



アンテルナシオナ  
ル・シチュアシオ  
ニスト 第5号

シチュアシオニスト・イン  
ターナショナル

# 目次

---

1. 冒険
2. 真実の時
3. シチュアシオニストのフロンティア
4. シチュアシオニスト情報
5. ロンドンでのS I 第4回大会
6. 資料
7. 演劇ユニット『誰でもない人とそれ以外の人々』への序文
8. 開かれた創造とその敵 1
9. 開かれた創造とその敵 2
10. 開かれた創造とその敵 3
11. 開かれた創造とその敵 4
12. シュバイヒャーへの返答
13. 付属資料 ポトラッチ
14. 解説 破壊と実現——ギー・ドゥボールと平岡正明、そしてフランツ・ファノン 平井玄
15. 解説 ドゥボールの死について 木下誠

S Iの作業条件を知れば、S Iがなぜ規律を課すにいたったのかも、S Iが出会うさまざまなかたちの敵意も説明がつく。S Iは、現在の芸術の建物のなかに自らの場所を確保したいと思っているのではなく、その建物を地下から侵食するのだ。シチュアシオニストは、既知の文化の地下墳墓（カタコンブ）のなかにいる。

さまざまな文化事象の専門化された特性によって規定される社会環境を少しでも見たことのある人なら誰も、そこではほとんど誰もが誰かを軽蔑し、各自が他のすべての者に退屈な思いをさせているということをよく知っている。しかし、このことは、そうした環境の隠しだてのような条件であり、誰もがはっきりと確認できることなのだ。それは個人のどのような会話においても、最初に互いにまず伝えあう陳腐な事柄でさえある。いったい、彼らの諦念は何に起因するのだろうか。彼らが1つの共同の計画の担い手たりえないという事実起因することは明白だ。そのとき、各自は、他人の中に自らの無意味さと自らの条件付けを認める。はっきり言うと、その分離した環境と決められた諸目的に加わるために、自ら応じねばならなかった屈服〔＝責任放棄〕を認めるのだ。

このような枠にからめとられた者たちは、いかなる種類の裁可＝制裁（サンクション）も必要としないし、裁可＝制裁を受けるための客観的な可能性も持ち合わせていない。彼らは常に、同じ地点に礼儀正しくとどまっているのだ。個人の間であれイデオロギーの間であれ、不和になることは、この共通性〔＝共同体〕に比べて二義的なものにとどまるのである。S Iにとって、またS Iが定める闘争にとって、排除は可能かつ必要な武器である。

それは、個人の完全な自由に基づいたどんなグループにとっても、唯一の武器だ。われわれの誰一人、コントロールしたり判決を下したりすることは好まないが、そのコントロールに価値があるとすれば、その実用性によってであり、道徳的な裁可＝制裁としてではない。S Iにおける排除の「テロリズム」は、いかなる点でも、権力を握った官僚が政治運動において行う同様の実践になぞらえることはできない。そうではなく、規律が必要となってくるのは、芸術家とは、どんな時でも、自分たちのために取っておかれた社会的権力のちっぽけな領域に統合されるように促されているからだ。このような規律が不朽の綱領をはっきりと定義しているのであり、そうした綱領を放棄すればその埋め合わせはできなくなるだろう。規律がなければ、この綱領と支配的な文化環境とが、多様な出入りを通してたちまち相互浸透するような事態になっているところだ。今日における文化的前衛の問題は、われわれの考えでは、ある総体的レヴェル――単に集団作業という意味だけでなく、相互に作用しあう諸問題の集まりという意味でも――においてはじめで提起される。したがってなかにはS Iから排除される者もいたのである。自分の戦う当の世界に統合された者もいれば、共通点としてはわれわれと決裂したということ――まさにその決裂の理由たるや、相反する理由からであった――しかないというのに、哀れにも互いに接近しあうことにしかならなかった者もいた。さらには、孤立するべくして孤立した者もいて、われわれは、彼らの才能を知る上で格好に立場にあった。彼らがS Iから出ていくことで前衛と決裂したと、われわれは考えているのだろうか。そのとおりだと思っている。これほどの規模を持った任務の

ために結集した組織は、目下のところS Iの他にはない。

われわれに対する感傷的な次元でのさまざまな反論には、この上なく深い韜晦が隠されているように思われる。経済的・社会的な形成物はすべて、過去を最重要なものとして扱い、現に生きている人間を固定し、商品として物象化する傾向にある。したがって、さまざまな趣味と人間関係が再び開始されるような感傷的な1つの世界とは、あらゆる身振りが資本主義的生産の奴隷制のなかで毎日反復されねばならないような経済的・社会的世界の直接的な産物にほかならない。まやかしの新しさに対する趣味は、そうした世界への不幸なノスタルジーを表現しているのである。

このような合意からあらかじめ排除された者たちからの誹謗は特にそうだが、S Iに対するさまざまな誹謗はまず、そこに込められた個人的な情念を推し量る尺度である。容赦ない敵意へと転じたこのような情念から口をついて出てきたのが、われわれはのらくら者だ、スターリン主義者だ、詐欺師だといった文句であり、その他多くの格好の毒舌であった。ある者の言によれば、S Iは現代芸術の取引のためによく組織された経済上の協定以外のなにものでもなかった。しかし、また他の者たちの断言するところでは、われわれ自身が麻薬の消費に対してあまりにも激しい性癖があるので、麻薬を売ったことは一度もないらしい。あるいは、彼らはわれわれの性的悪徳の会計報告をする。逆上して、われわれを成り上がり者呼ばわりする者までいた。

これらの攻撃的言辞は、公然とわれわれを無視する振りをしていたその同じ者たちが、長い間われわれのまわりでささやいていただけだ。しかし、そうした沈黙も今や、公然たる激しい批判によって、ますます頻繁に破られ始めている。かくして、『ポエジー・ヌーヴェル』のあの最近の特集号は、あれほどの多くの告発のなかに、2、3の、おそらくは真摯な気持ちから出た曲解も混じえている。彼らは、われわれを「生氣論者」として定義する。許容された生全体の貧しさに対して最もラディカルな批判をしてきたのは、われわれの方だというのに。さらに、彼らは、鳥もちにかかったかのようにスペクタクル世界のなかで完全に身動きがとれないため、われわれの状況概念を自分たちの知っている何かに関係づけようとして探しに出かけたが、演出方法に関する主義主張を年代順に並べた歴史記述の中を捜すのが関の山だった（新（ネオ）レトリズムなるものを信奉するこの同じ者たちは、公衆からの今後の協働を訴える「超時間」芸術の展覧会を去る6月に開催した。それによって、S Iの反芸術と、特にアスガー・ヨルンの転用絵画を取り込もうとしたが、彼らは、永久署名入りのスペクタクルに関する自分たちの形而上学的体系——それは、芸術自体の完全な無化のなかにまで前世紀の公認芸術家の滑稽な野心を持ち込もうとする——のなかにそれらを転写しただけだった）。

シチュアシオニスト潮流が最近用いている批判芸術のいくつかの現れもまた、文化を無化するこうした試みに属していることは疑いえない。転用絵画だけでなく、たとえば、『ポエジー・ヌーヴェル』のこの特集号にその序文が載った「演劇ユニット\*1」、あるいは『分離の批判』\*2のような映画などもそうである。彼らとわれわれとの違いは、文化におけるわれわれの行動全体が、そうした文化自体を転倒するための綱領に、おいて、組織されたシチュアシオニスト勢力に他ならない新たな装置編成の形成と進歩にむすびついてきたということにある。

何人かの物見高い密偵が、ヨーロッパ中を、さらには、もっと遠くまで旅行し、信じがたい指

示を携えて出会っている。

文化の今の現実を拒絶しているにもかかわらず、なぜ、われわれはその文化領域においてこれほど情熱あふれる再編成を助長してきたのか？ ——この問いに対する答えはこうだ。すなわち、文化というものは、意味のない社会の意味の中心だからである。このような空虚な文化が空虚な生存の中心にあるがゆえに、この領域でも、そして何よりこの領域においてまず、世界を全面的に変革しようとする企てが再発明されなければならないのである。文化における権力の要求を放棄すれば、この権力を実際に持ちあわせていない者たちの現状を温存することになるだろう。

打ち倒すべき文化を現実に倒すには、それを支えている経済的・社会的形成物の全体を倒さなければならないということを、われわれはよく知っている。しかし、もうこれ以上待つことなく、シチュアシオニスト・インターナショナルは、そうした文化と全面的に対決し、やがては、既存の文化的権威者たちが掌握するコントロールと装置編成に対抗して、自立したシチュアシオニストのコントロールと装置編成を課すような事態、すなわち、文化における二重権力状態を作りだすつもりである。

\*1: 「演劇ユニット」 アンドレ・フランカンの演劇ユニット『誰でもない人とそれ以外の人々』のこと。その序文は本誌に採用されている。

\*2: 『分離の批判』 ギー・ドゥボールの3作目の映画。1960年9-10月に撮影され、61年1-2月に編集。〈デンマーク-フランス実験映画会社〉製作。白黒35ミリ、20分。映画は「分離の批判」というタイトルとクレジットが画面に現れる前に、カロリーヌ・リトネールの声が予告編についてのコメントをすることから始まる。判別しにくいとぎれとぎれの映像の間に「もうすぐ、このスクリーンの上で」、「全時代を通して最も偉大な反映画の1つ!」、「本物の人物!」、「本当の物語!」、「かつて映画があえて扱わなかったテーマについて」などの貼り紙風に書かれた文字が現れ、カロリーヌの声はその映像に重ねてフランス言語学の泰斗アンドレ・マルチネの『一般言語学要理』からの引用を読み上げる。映画本編のなかではこの映画についての注釈はドゥボールの声になり、カロリーヌは少女の役を演じる。映画にはフランソワ・クープランとボダン・ド・ボワモルティエの音楽も使われる。『分離の批判』本編の映像は、ドゥボールやカロリーヌらのパリの町（カフェや街頭）での実写に混ざって、コミック雑誌、身分証明書、新聞記事、他の映画（パリの観光映画など）などが挟み込まれている。これらの映像には字幕が重ね合わされていることが多いが、それは同時に声で流される注釈と対応していない。映像と字幕と声の注釈との関係は補完的でもまったくの無関係でもなく、相互に批判的な関係になっている。

### 記者改題

アルジェリア戦争の1958年（ド・ゴールの登場）までの経過については、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第1号の「あるフランスの内乱」および第2号の「革命的知識人の総崩れ」の記者改題で書いたもので、この記事の背景にあるアルジェリアとフランスでのそれ以降の経過について書いておく。

1958年12月、ド・ゴールは第5共和制の初代大統領に選出されると、翌年からアルジェリア問題の解決に奔走する。58年11月の首相選挙以前の段階では、「コンスタンチヌ・プラン」によって、フランス共和国の統治下でのアルジェリア人の会議への参加という融和的なアルジェリア政策を発表していたド・ゴールも、FLNがそれを拒否し、ブーメディエンによるALN（民族解放軍）の建て直しや、カイロでのアルジェリア共和国臨時政府樹立と積極的な対外活動によって内外での攻勢を強めてくると、アルジェリア人の村落の強制移住を伴う山岳ゲリラの根絶作戦によってFLNとの対決姿勢を強化させる。しかし、その作戦の敗北が明らかになると、59年9月には、アルジェリア人の「民族自決」の承認へと方向転換する。このド・ゴールの変節に、アルジェリアのフランス駐留軍や植民者は激怒し、60年1月には右翼過激派（ユルトラ）が「バリケードの1週間」とやばれる反乱を起こし、フランス人憲兵隊との間に、アルジェリア戦争始まって以来はじめてフランス人同士の銃撃戦という事態が引き起こされた。反乱はド・ゴールの演説によって終結を見るが、その後もその火種は残り、11月、ド・ゴールがアルジェリアを訪問すると、マシュー将軍らはクーデターを計画してド・ゴールの暗殺を画策し、右翼過激派はヨーロッパ人学生をも巻き込んで、アルジェやオランで反ド・ゴールのデモを行い、フランスの憲兵隊・機動隊との間に激しい戦闘を繰り返した。しかし、こうした植民者らの暴動に対して、12月11日には、今度はアルジェリア人が反撃に出、アルジェやオランでは無数の群衆がFLNの旗を掲げて行進し、ヨーロッパ人入植者の商店や邸宅を破壊し、アルジェリア戦争はそれまでのFLN対フランス駐留軍という部分的なものから、アルジェリア全人民対全植民者へと全体化した。

フランス本国では、アルジェリア戦争は当初は海の彼方の植民地の話として総じて無関心が支配し、フランス共産党などの既成左翼は、ド・ゴールと同様にFLNを「過激派」と規定しその闘いを支援せず、抽象的な和平を唱えるだけであったが、FLN活動家やシンパへの拷問や村落の戦略的な強制移住、など、フランス軍のアルジェリアでの多くの残虐行為や非人道的行為が、新聞や雑誌の記事、書物による報告などさまざまなかたちで伝えられるにつれて、アルジェリア独立こそが、問題の真の解決をもたらすことを理解し、FLNを具体的に支援する者や、FLNへの支持を公然と表明する者、フランス政府の遂行する戦争への不服従を主張する者たちが現れ、フランス政府はFLNの支援組織への弾圧を強化した。1959年と60年は、そうした弾圧により多くの逮捕者が出て、次々と裁判が行われ、アルジェリア戦争の問題をフランス人全員が意識させられた年でもある。「121人宣言」までのそれらの経過は次のようなものである――

59年4月、『ル・モンド』がアルジェリアの強制移住させられた住民のキャンプのルポルターージュを発表しその劣悪な状態を批判。5月、『ヴェリテ・プール』（58年9月に創刊されたジャンソン機関の非合法情報誌）がフランスの植民地戦争へのレジスタンスを呼びかける作家ヴェルコールのインタヴューを掲載。同じく5月、反戦・不服従組織「若きレジスタンス」の結成。6月、『ヴェルテ・プール』がサルトルのインタヴューを掲載。7月、FLNリヨン機関の逮捕。9月、FLNを支援していた『共産主義の道』のジェラルド・シュピッツァーとジェラルド・ロルヌの逮捕。11月、FLNマルセイユ機関の逮捕。60年1月、『ル・モンド』がアルジェリアでの拷問に関する赤十字報告を掲載。2月、ジャンソン機関に最初の逮捕者、その存在が公になる。3月、「若きレジスタンス」の発覚。同じく3月、前年に逮捕されたFLNを支援した女性セルジュ・ドゥキュジスの裁判。4月、地下潜行中のジャンソンとの秘密記者会見を新聞に発表したジョルジュ・アルノーの裁判。ジャンソンの著書『われわれの戦争』差し押さえ。7月、スイスで「フランス反植民地主義運動（MAF）」の結成。

そして、1960年9月5日、ジャンソン機関への裁判の初公判が開始され、その翌日に『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌のこの記事で問題となっている「121人宣言」が発表された。アルジェリア人民に対する武器を取ることを拒否、フランス人によるアルジェリア人支援の正当性、植民地廃絶の大儀という3点を掲げるこの宣言は、ジャンソンのネットワークが行ってきた活動をできるだけ広範なフランスの知識人を結集して支持する目的で着想され、モーリス・ブランショ、ディオニス・マスコロ、クロード・ランズマン、マルセル・ペジュらが中心になって起草し、幅広く署名を呼びかけた。実際、署名者は、サルトル、ルフェーヴル、フランソワ・シャトレ、ジャン・ヴァール、マキシム・ロダンソン、ポンタリス、ジョルジュ・ムーナン、ディオニス・マスコロ、フランソワ・マスペロ、モード・マノーニ、ベルナール・パンゴ、ヴィダル＝ナケ、ダニエル・ゲラン、ロベール・アンテルムなどの哲学者や学者、政治活動家、ブルトン、ツアラ、レリス、ブランショ、マンディアルグ、ボーヴォワール、サガン、クロード・ロワ、ピュートル、サロート、クロード・シモン、クロード・オリエ、デュラス、ロブ＝グリエ、ヴェルコール、モーリス・ナドー、ベナユーン、シャルル・エスティエンヌ、エドゥアール・グリッサン、ドミニク・フェルナンデスなどのシュルレアリストからヌーヴォー・ロマンまでの種々雑多な文学者や批評家、トリュフォー、ブーレーズ、ドニオル＝ヴァルクローゼ、カスト、アラン・レネ、アンドレ・マッソン、シモーニュ・ショニユレなどの映画監督、画家、音楽家、俳優など、保守・革新を問わず多岐にわたった。

以下の記事にも書かれているように、「121人宣言」の発表後、ただちに弾圧が開始され、署名者はラジオ・テレビへの出演などの公の仕事から追放され、署名者の名を放送で言うことさえ禁止された。また、首謀者の割り出しのための事情聴取や尋問が――しばしば署名者以外の者にまで――繰り返され、署名者には警察による執拗な追及が行われた。だが、宣言のインパクトは強烈なもので、多くの著名人が公然とアルジェリアの独立の正当性を支持し、道理なき戦争を行うフランス軍への不服従＝裏切りを呼びかけたことに対し、右翼、左翼両方からの非難の嵐が巻き起こった。「フランスのアルジェリア」を唱える愛国主義者らは、10月1日、3日と2回にわたり「サラン〔将軍〕に権力を！」、「サルトルを銃殺せよ！」などのスローガンを叫びながら凱

旋門とシャンゼリゼで激しいデモ行進を行う。11日には、アラゴンが副会長をするフランス共産党系の「戦闘的作家協会」が、「121人宣言」署名者を「フランスの敵のゲームを行う扇動者」として非難する声明を発表（アラゴンはその後すぐに副会長を辞任）。10月12日発行の『カルフル』誌には、作家のアントワーヌ・ブロンダン、ロジェ・ニミエ、ジュール・ロマンや哲学者のガブリエル・マルセルら、保守派知識人数百名のマニフェストが発表され、「裏切り者の教師たち」を非難した。こうした「121人宣言」と、それに対する右翼、左翼からの反響に刺激され、10月下旬には、学生・教育者・組合による声明「アルジェリアの交渉による平和のために」が発表される。ロラン・バルト、メルロ＝ポンティ、エドガール・モラン、プレヴェール、ジャン・ルーシュらの著名人を含む教育関係者を集めたこの時期遅れの声明は、若者の「意識＝良心の危機」に対する治療薬として戦争という悪の停止を主張するという融和的内容で、「121人宣言」の打ち出したアルジェリア独立とフランス軍への不服従という流れをねじ曲げる役割を担った。

こうしたなかで、10月27日、パリの学生を中心に、アルジェリア独立を支持する大衆的なデモが行われるのである。

---

「下記署名者たちは今後、個人的な冒険の三面記事として提示することのできないさまざまな行為について、各自が意見を述べなければならない。また、かくも重大な諸問題に直面し個人的に決意せねばならない人々に助言を与えるためにではなく、そのような問題を判断する者たちに言葉や価値の曖昧さの罨にはまらないように要求するために、自らの立場で、自らの手段に応じて発言する権利を持つ。以上のことを考慮した上で、次のように宣言する。『――われわれはアルジェリア人民に対して武器を取ることを拒否する態度を尊重し、それを正当なものと判断する。』『――われわれは、圧政に苦しむアルジェリア人民の名において援助と庇護をもたらすことを自分たちの義務と見なすフランス人の振る舞いを尊重し、それを正当なものと判断する。』『――植民地制度を壊滅させる上で決定的な貢献をするアルジェリア人民の大義は、あらゆる自由な人間の大義にほかならない。』」

以上が、「アルジェリア戦争における不服従の権利に関する宣言」の結論である。同宣言は、121名の芸術家と知識人によって署名され、9月のはじめに発表された。訴追がすぐにも開始され、最初の告訴が通達されたにもかかわらず、9月中に、60人から70人の名前が最初の署名リストに追加された。新たな署名者のなかには、いかなる政治的急進主義からも程遠いことで知られている者もいた、この運動を粉砕するため、政府は、ためらうことなく例外的処罰――9月28日に発表される――に訴えた。公務員（概して教員）たちが一時停職を言い渡された一方で、署名者全員がラジオ・テレビ放送から追放されることになり、もはや放送で彼らの名前を挙げることもできなくなった。さらに、国の補助金を得ている劇場、あるいは、国立映画センターに正規に登録されている映画から閉め出されることになった。その上、今日までのところ

、同宣言文にありとされた犯罪に関する最大限の刑期は、懲役数ヶ月から数年に及んでいる。このような措置を講じることによって、スキャンダルの拡大は、この国の文化的自由に対する全面戦争に訴えることでしか抑えられないことを政府自ら認めたのだ。しかも、こうした極端な手段に打って出ても、ほとんど元が取れなかったようだ。というのも、9月28日以降、60名以上の署名が集まったからである。さらに、非常にゆっくりとした形でしか、後続の告訴に踏み切れなかったからである。

「121人宣言」が取り締まりによってフランスと外国で頼みもしないのに宣伝されることになったおかげで、その効果はとうてい無視できなくなった。そのとき見られたのは、次のような光景だった。反フランスに対してより迅速に、より強く打撃を加えるようにと当局に訴える高貴なマニフェストに、フランス的というお墨付きをもらった知性のお歴々が名を連ねたこと。知識人プジャード\*1の発刊する気のきいた新聞が、第一面に8段抜きで、「ホモたちのマニフェスト」と呼んで同宣言を激しく非難したこと。専門家として社会的「展望」を全面的に問いただす年寄りのうちの何人かが、この過激な宣言に自分たち自身も参加すべきかどうか、即座に自問し、集めた署名を本来の目的からそらして丁重な請願書——国民教育連盟が、この請願書を通じて、この戦争が交渉により終結することを期待する旨を知らせていた——へと改変することにすぐさま没頭したこと（彼らのなかでも特に、E・モラン\*2とC・ルフォール\*3のことが念頭にある）である。

この宣言の功績は、文化という地層に非常に明確な分割線をもたらしたということにある。署名者たちは、前衛の政策や首尾一貫した綱領を全く代表していないのはもちろんのこと、署名という行為以外に、賞賛すべき資質を持つ個人の集まりを代表しているのでもない。しかし、このような情勢下であって、アルジェリア人および訴追の身となったフランス知識人たちの自由という共通の大義に与することを望まなかった者は全員、「前衛主義」の任意の諸問題の間をいまだにうろつくという自惚れきった態度を折にふれて見せることで、相変わらず一笑に付され軽蔑されるにちがいないことを逆に自ら暴露しているのである。それゆえ、数ヶ月前に訴追反対運動を組織していた阿呆ども\*4とこのガレー船でほとんど再会しなかったのは驚くにはあたらない。自由が真に守られるためにはいかなる判決〔=判断〕も拒まねばならないというのが、そこでの彼らの主導概念であり、それは彼らの芸術的、社会的そして知的な欠陥を埋め合わせるためのものだったが、彼らは自己に忠実なあまり、121名の者とともに守るべき何らかの自由があるという判断も下さなかったのだ。

政治的には、この宣言は、3ヶ月前からフランス世論の相対的な覚醒に役立ってこなかったわけではない。10月27日\*5の夕方、共産主義者たちの鮮やかなサボタージュやすべての組合官僚の抑え込みにもかかわらず、若者たち、とりわけ学生が、反戦のための最初の街頭デモを先導することができた。韜晦と屈服〔=責任放棄〕に明け暮れた数年の後、ある自覚が生まれてきているのだ。

12月11日、アルジェリア革命は、アルジェとオランの街頭で大衆が介入するに及んで、この革命が事実、その総体において「アルジェリア人民の大義」にほかならないということ、耳を貸すまいと固く決意した人たちにも聞き届けさせた。同じスキャンダルと言っても、こちらの方は、もはや知識人たちのビラによってではなく、武装解除された群衆の流血によって表現されているのである。このスキャンダルは、相変わらず、最終的には、フランスのプロレタリアートに向けられている。彼らの介入だけが、この戦争を早急に、かつ上首尾に終わらせられるだろう。

\*1: ピエール・プジャード (1920-) 南仏の文房具店主をしていたが、1953年、税制改革に反対する小売業者を組織して反税運動を展開し、翌年には、チュニジアを手放したマンデス・フランスから多国籍企業、哲学者・知識人、外国人まで祖国に背く者をすべて攻撃するファシスト的右派政党にまで発展し、56年の総選挙では52議席を獲得するまでに躍進した。彼が組織したプジャード運動は、典型的なポピュリズムの運動として、プチブル層の生活保守意識に根ざした偏狭で排外主義的な感情的愛国主義を組織し、アルジェリア戦争に疲弊した50年代末から60年代初めのフランスにおいて一定の力を持った。現在のフランスの人種主義的右翼政党「国民戦線 (フロン・ナシオナル)」のル・ペン党首もこのプジャード運動の熱烈な担い手だった。

\*2: エドガール・モラン (1921-) フランスの社会学者。レジスタンスの時代にトゥールーズの「亡命学生収容センター」で活躍し、共産党に入党。戦後、強制収容所の存在を知ったことを契機にスターリン主義を告発し、51年、フランス共産党を除名。50年から社会学者として国立科学研究所で教える。1956年から62年にかけては、雑誌『アルギュマン』誌の編集長を務める。著書に、『映画——あるいは想像上の人間』(1956年)、『スター』(57年)などの映画社会学の研究、『プロメテの変貌』『オルレアンのうわさ』(69年)などの社会学調査研究、『自己批判』(59年)、『政治的人間』(65年)、『ソ連の本性——全体主義複合体と新たな帝国』(1983年)など政治あるいは「政治人類学」的著作がある。60年この時期には、モランは「121人声明」には署名せず、それに乗り遅れた教員組合やフランス全学連が出した日和見的声明「アルジェリアの交渉による平和のために」に、ロラン・バルト、ジャン・コー、ルネ・エチャンブル、ジャック・ル・ゴフ、メルロ＝ポンティらとともに署名している。問題を「交渉」に矮小化するこの融和的な声明は、客観的には「121人声明」の拡大をせき止めるものとして機能した。

\*3: クロード・ルフォール (1924-) 1946年ソルボンヌ大学を卒業、教授資格試験の準備をするなか、第4インターナショナルのフランス支部である国際主義共産党の集会でコルネリュウス・カストリアディスと出会い、トロツキスト反対派を形成。49年には、教授資格を取りパリ大学で教え始めると同時に、カストリアディスらとともに〈社会主義か野蛮か〉を創設し、その中心的メンバーとして活動。52年『レ・タン・モデルヌ』誌上でスターリン主義とロシア・フランスの共産党を擁護するサルトルとの間に激しい論争を行う。58年5月の「アルジェリア危機」以降〈社会主義か野蛮か〉に参加するものが増えるにつれて、組織問題をめぐり党の必要を主張するカストリアディスら多数派と対立、その年11月〈社会主義か野蛮か〉を脱退して新しい組織〈労働者の情報と連携〉(ILO)を結成(60年には〈労働者情報通信〉(ICO)に改名)、党を否定し労働者の自発性を最大限尊重する運動を展開。62年のアルジェリア戦争終結後は、このグループを去り、社会学者・思想家としての活動に入る。代表的な著作に『官僚制批判の諸要素』(1971年)、『マキャベリ』(72年)、『余分な人間——収容所群島についての考察』(76年)などのほか、メルロ＝ポンティの遺作の編集も手がけ、彼についていくつかの書物も著している。ルフォールも「121人宣言」には署名しておらず、おそらくモランとともに教育者の声明に署名したと思われる。

\*4：数ヶ月前に訴追反対運動を組織していた阿呆ども ジャンソンへのインタビュー記事を公表した廉で逮捕されたジョルジュ・アルノーの裁判でアルノーの弁護に立った『パリ＝プレス』、『マリー＝クレール』、『フランス・ソワール』、『オロール』などのジャーナリストたちのこと。

\*5：10月27日 この日、パリの共済会館（ミュチュアリテ）で、フランス全学連（UNEF）、国民教育連盟（FEN）、フランス・キリスト教労働者連盟（CFTC）の呼びかけによるアルジェリア平和集会が開催された。フランス共産党やその傘下の組合のサボタージュ（彼らはその日、フランス全土での平和的な分散行進を呼びかけた）にも関わらず、この集会には多数の学生や労働者が集まり、会館から外に出た大量の集会参加者は、警察の暴力的な弾圧に対して激しい衝突を繰り返した。これは、アルジェリア戦争の過程を通して生み出されたフランス人の側の初めての大衆的デモンストレーションとなった。

SIとは何でないか、SIはもはやどのような領分を占めるつもりがないか（あるいは、あらゆる既存の条件に対する闘争において、単に副次的な仕方でもそうするつもりがないか）は周知の通りだ。SIはどこへ行くのかを述べたり、シチュアシオニストの計画を積極的に特徴づけたりするのはさらに難しい。しかしながらSIの歩みの暫定的な位置をいくつか、断片的に列挙することはできる。

階層秩序化された専門家集団はどれも、次第に現代世界の官僚制度、軍隊そして政党までもその構成要素としてきているが、SIはそうした集団とは逆に、反専門家の反階層秩序的な団体の最も純化された形態の集団として姿を現す。このことは、いずれわかる日が来るだろう。

シチュアシオニストによる批判と構築はあらゆるレベルにおいて、生の使用価値に関するものである。われわれの都市計画構想が都市計画批判であるのと同じように、また、余暇に関するわれわれの実験が実際に（分離および受動性という支配的な意味での）余暇を拒否することであるのと同じように、われわれが自らの行動の場を日常生活に設定するのは、日常生活批判——それも、「もはや願望や指摘の段階にとどまっているのではなく、現に実行に移されたラディカルな批判」（フランカン『綱領の素描』（第4号））でなければならない——が問題なのであって、日常生活に対するこのような実践的な批判は、「不可能と描いてしまった日常」において自己の乗り越えをめざすのである。

われわれは、現代文化における異常な観念を発明したとは考えていない。むしろ、現代文化の虚無の異常さ指摘することを始めたのだと考えている。文化生産の専門家とは、最もやすやすと分離に、したがって、欠如に甘んじてしまう者たちのことである。だが、現代の社会の全体の方こそ、制御できないまでに疎外された自らの無限の能力をいかに回収するかという問題を避けて通れないのだ。

人間の未来としての豊かさとは、物——たとえそれが、過去に属する「文化的な」物、あるいは、この過去をモデルにして繰り返された物であっても——の豊かさのことなどではなく、状況（生、生の次元）の豊かさのことである。消費のプロパガンダの現在の枠のなかで広告が行う根本的な韜晦は、さまざまな幸福感をモノ（テレビ、庭つきの動産、自動車など）、に結びつけることにある。しかも、それは、「ハイクラス」の物質的環境を何よりもまずそれらの物で構成するために、これらのモノとその他のモノとの間に保ちうる自然な絆を断ち切ることによってなされる。この押しつけられた幸福のイメージは、テロリズムに直接通じる広告の性格でもある。しかしながら、「幸福」とか、これこれの幸福の契機とかは、ある包括的な現実依存するのであり、そこにはまさに、状況に置かれた人物——現に生きている人々と、彼らを照らし出し彼らの意味（彼らの可能性の余地）となる契機——が含まれている。広告では、モノは情熱的な仕方、情熱をかき立てるものとして扱われる（「こんな素晴らしい車を持てば、生活はきっとどんなに変わるだろう」）。しかし、より興味を持つに値するものを扱うとなると、それが何であれ、全体の条件付けを窮地に陥れないではすまない。すなわち、広告が現実の情熱に関心を払うとき、問題なのはただスペクタクルの広告だけなのである。

これから作るべき建築は、古い記念碑建築（モニュメント）の華々しい（スペクタキュラー）美しさへの関心から離れ、万人の参加を引き起こす位相的な（トポロジック）な組織化に資するものとならねばならない。われわれは場所恐怖症〔トポフォビー〕に賭けるだろう。そして場所愛好症〔トポフィリー〕を創造するだろう。シチュアシオニストは自分を取り巻く環境も自分自身も可塑的なものとみなすのである。

新たな建築は、古い定義を持つ情動的環境ブロック（たとえば、城）の転用によって、その最初の実習を開始できるだろう。状況を構築するためのものとして建築の中に転用を利用することは、生産物を現在の経済的・社会的組織の諸目的から引き離し、それを再投資することを意味し、未知のものを抽象的に創造する形式主義（フォルマリズム）的配慮と断絶することを意味する。既存の欲望をまず解き放ち、それを未知の成果の新たな次元において繰り広げることが肝心である。

かくして、状況を直接用いた芸術をめざす探求は、計画された状況を構成するさまざまな出来事の流れをあらかじめ表した最初の荒削りな表記法〔心理地理学による地図や描写のこと〕によって、おそらくかなり前進したところである。参加者がどんな未知数を賭けるのか、しかも、真剣に、観客なしに、この賭け〔＝遊び〕以外の目的なしに、賭けるのかを選択できるような図式、方程式が問題なのだ。これはまさしく、疎外に対する闘争において有効な武器、放蕩の情けない約束事と手を切る上でいずれにせよ格好な武器の原型〔＝試作品〕である。「幸福に通じるさまざまな経路」というフリーエ的な道を再び前進しなおす最初の試みなのである。われわれとしては、幸福に関する、いかなる望ましい、あるいは、保証された形式も支持しないということをつけ加えなくてはならない。そして多かれ少なかれ明確にされ完全なものにされたこれらの図表は、さまざまな出来事の計算された配置によって開示される未知なるものへと飛躍するための滑走路としてしか役立ちえないということもまたつけ加えなくてはならない。これらの図表は、さらに、ブリュッセルとアムステルダムで5月29、30、31の3日間に試みられた漂流実験\*1の時に観察されたシチュアシオニストのカタパルト原理の応用でもある。その際、この実験で明らかになったのは、社会的空間の横断——一時的に、かつ、たとえば、功利的な口実の下に、組織された横断——の非常に強い加速化によって、主体が、その加速化の停止期に突然、漂流へと投げ出され、自らの既得速度でその漂流を駆け抜けるという効果をあげることができるということであった。全く自明なことだが、次のことを見失ってはいけない。すなわち、制約された基礎を出発点にして組み立てられる実験はどれも、実験室の規模でのみ、つまり、社会という総体の無限小の度合いでのみ行われるので、情報の点から言って、さらに、プロパガンダの点から言ってもそれなりの価値があるにもかかわらず、未来における生活の構築物に比して、単に規模の差だけでなく、性質の差をも示すだろうということ。しかし、この実験室は、消尽された文化領域のあらゆる創造物から遺産を受け継ぎ、そうした創造物に対する具体的な乗り越えを準備するものである。

したがって、ここには文化の最後の前哨がある。そのむこうで、日常生活の征服がはじまるのだ。

\*1：ブリュッセルとアムステルダムで5月29、30、31の3日間に試みられた漂流実験 「迷宮としての世界」 (第4号) を参照

S I ドイツ・セクションの機関誌『シュプール\*1（足跡）』の創刊号が、1960年8月、ミュンヘンで出版され、5月17日のシチュアシオニスト宣言のドイツ語訳がその巻頭を飾った。11月に出版された同誌2号は、その最も大きな部分をロンドン大会の報告に割いている。

\*

ピノ＝ガッリツィオとG・メラノッテ\*2が6月にS I から除名された。素朴さからなのか、それとも、出世主義からなのか、彼らは、イタリアで、イデオロギー的には受け入れがたい関係者たちと接触し、それから、協力する体たらくであったのだ。彼らには1度、非難をしておいた（批評家グアスコ——彼は周知の通り、イエズス会士のタピエ\*3に結びついている——についての、本誌 第4号の「シチュアシオニスト情報」を参照）のだが、彼らの政治を矯正することはできなかったしたがって、もうこれ以上彼らの言い分を聞くことなく、彼らを除名するという決定が下されたというわけだ。

彼らの振舞いを正当な理由で告発したコンスタントは、しかしながら、このような決裂に満足しなかった。他方で、彼は、教会を建てる企てにうかうかと乗ってしまったオランダ・セクションの一部の建築家たちに対しても、われわれは数ヶ月前に同じ措置に訴えるべきであったと、嘆いたのだった。より深いレベルで言えば、コンスタントはS I と対立していたのである。なぜなら、彼は、統一的都市計画のいくつかのアンサンブルに見られる構造の問題に優先的に、かつ、ほとんど排他的に関心を寄せていたのに対して、他の数名のシチュアシオニストたちは、このような計画は、現段階では、その内容（遊戯、日常生活の自由な創造）を強調する必要があると、繰り返し言っていたからである。したがって、コンスタントの諸々のテーゼは、包括的な文化のどんな探求よりも、建築形式の専門技術者を高く評価していた。しかも双方に対して要請された最小限の指導に関して、どちらも単純に同じような取扱いを受けたので、彼には処遇の厳しさに不釣り合いが生じたように思えたのである。それで、コンスタントは、同じ6月に、自分がS I の規律と不協和音をかなでている以上、一連の出来事が治まるまでの間、この点に関して自由を取り戻しておきたいと、宣言したのである。それに対するわれわれの返答はこうだ。すなわち、われわれは、S I の歴史に刻まれているさまざまな決裂に対して長い年月の間、実践的武器という意味を保証してきたわけだが、敵意とか落ち度といった観念を除けば、そうした武器によって許容されるのは、決定的に任務を放棄するか、それとも、このような圧力形式を断念するか、2つのうちのどちらかを直ちに選択することである、と。コンスタントが選択したのはS I を去る方であった。

\*

6月に、『発明すべき風景のための手帳』誌の創刊号がモントリオールで出版された。その第1号には、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌から再録したおよそ10編の論文の他に、『手帳』誌の編集長であるパトリック・ストララン\*4とカナダでの彼の仲間数名のテキストが載っている。これは、シチュアシオニストのプロパガンダがアメリカ大陸にまで及んだことを公然と宣言する最初の定期刊行物である。

\*

かつてヨルンの『経済的政治批判』はクリスチアン・クリステンセン\*5に捧げられていたが、そのクリステンセンが1960年6月10日、デンマークでなくなった。

\*

7月20日、P・カンジュエールとドゥボールの校訂による、資本主義と文化に関する『統一革命綱領の定義に向けた予備作業』がフランスで出版された。これはS1において議論のたたき台となる綱領であり、労働運動の革命的活動家たちと提携を図るためのものだ。

\*

ユトランド半島にあるシルケボア美術館\*6——スカンジナビア諸国の中でも指折りの近代美術館であったが——は、つい最近、シチュアシオニスト図書館を創設した。この図書館はそれ自体がまた、次の3つのセクションに下位区分される。1つは、プレ・シチュアシオニストに関するセクションで、そこには、シチュアシオニスト運動を準備する上で何らかの役割を演じたことのできた、1945年以来のさまざまな前衛運動についての望ましい資料がすべて集められている。2つ目は、本来の意味でのシチュアシオニストに関係するもので、S1のあらゆる定期刊行物を含んでいる。3つ目は、S1についてのさまざまな著作を収めるための歴史セクションだが、今のところ実際は、あちこちで出現し始めた反シチュアシオニストのプロパガンダが収められているだけである。最後に、おそらく最も興味深い主導性を発揮した部門として、この図書館にコピー・セクションが開設された。そこには、われわれの友人たちの成果のどれかを模倣した作品がすべて保存されることになる。現在の芸術における彼らの奇妙な役割は、彼らがS1に所属しているというまさにそのことによって、容易に認めてもらえないのは明らかだからだ。誰にでもすぐアクセス可能なグラフによって、モデルとその後続のものが現れた日付——すでに何度となく、両者はほとんど間髪を入れず出現したことがある——が科学的な正確さでわかるだ

ろう。こうして、シルケボア図書館は、「前衛芸術家たち」の間で戦わされたあのさまざまな下らない議論——シチュアシオニストたちはそれに参加したいと思ったことは一度もない——からは程遠いところに位置して、将来、文化における前衛のメートル原器を客観的に提供するだろう。数年後にはヨーロッパやアメリカ出身の、さらに後には、アジアやアフリカ出身の、専門の歴史家の多くが、新式のこの「ブルトゥーユの展示館」で資料を完成させ、検討する目的だけのために、シルケボア旅行をするだろう。そのことをわれわれは信じて疑わない。

さらに、シルケボア美術館が入念に練り上げている聡明な計画、すなわち、映画関係の別館——そこには、関係するそれぞれの映画のコピーが保管されるだろう——の建設によってこの図書館を完全なものにしようという計画は、その実現に必要なあらゆる物質的手段を獲得できることを、われわれは願っている。

\*

9月の始め、ドイツのグループ「ラマダ」からS Iに対して、今月の24日に開かれることになっているロンドン大会に1人、ないしは数名の代表者を派遣することによって集団S Iに加盟してよいかどうか、問い合わせがあった。S Iはドイツ・セクションに対してこの問題に関する報告を求め、それを聞いた後、ドイツに最初からあるセクションの他にそれとは独立した、多かれ少なかれ異なった、かつ、未知数でもある綱領を持つ2つ目のシチュアシオニスト組織を承認することは受入れ難い旨の結論に達した。しかも、「ラマダ」は、このような綱領上の違いはS Iに入るには取るに足らないものであるが、同じドイツに置かれるとはいっても、はっきりと別グループとして組織する上では大きな違いであると、一方的に決定しているのだった。したがって、このグループには、ロンドン大会に招待することはできないということ、さらに、同グループの構成員たちが事によると、S Iに加入できるようなことになるのであれば、それは、われわれのドイツ・セクションに個人的に加盟した上でのことだということを知したのである。ただし、彼らのうちの1人は例外であって、彼はこれまでの個人的な立場がもとで、全く審査の対象にはなりえないだろう。

\*

アレクサンダー・トロッチ\*7が3種類の麻薬を所持していたらしいところを警察に見つかったという、ただそれだけの理由によりギャングとみなされ、ニューヨークで逮捕されたことを知らされて、ロンドン大会は9月27日直ちに、彼を支援する決議文を採択し、現代芸術院に集まった公衆の前で読みあげられた。

3人のシチュアシオニストが、同大会により与えられた権限を行使して、10月7日に配布されたビラ『アレクサンダー・トロッチに手を触れるな』に署名した。その文面は、とりあえず芸

術家の自由ぐらいは弁護できる者に署名してもらえるように、かなり穏健なものであり、この具体的な法律事例に役立つよう、事実、意図的に芸術の領域に限定したものになっている。そしてそれは、この芸術家という身分をアレクサンダー・トロッチに当てはめることに異論をはさむことができるのであれば、それはたまた「彼が新しい型の芸術家を代表するという唯一の理由」——もっとも、すべてのシチュアシオニストがそうなのだが——によってであると指摘している。シチュアシオニストを数に入れなくとも、このアピールはすでに、数ヶ国（イギリス、ドイツ、フランス、オランダ、ベルギー、スウェーデン、イスラエル、デンマーク、カナダそしてアメリカ合衆国）から81名の芸術家、作家あるいは批評家を集めた。これまでのところ、同アピールがあまりにも危険と判断し、そのことを敢えて発言するものは2人しかいない。まだ自分の回答を伝えていない多くの者が、それを知らせて来る機会がきっと訪れるのもそう先のことではないだろう。われわれはこの事件の経過を、あらゆる種類の態度決定に関するあらゆる有益な詳細および注釈とともに、近くこの欄で公表することにしたい。

\*

ドウボールは、11月21日パリで刑事警察から「121人宣言」への参加のことで尋問され、同宣言が自分に伝えられるとすぐにそれに署名したと答えた。彼が署名したのは、9月29日になってからのこと、つまり、ド・ゴール政府が、署名者が受けることになる法的制裁を過度に重くすることによって、政府を弾劾する者たちに対してそれを口に出せるのならしてみろと挑発した政府命令の発表の翌日のことであった。また、ドウボールは、誰からもその機会を提供されなかったので、宣言のテキストの起草あるいは配布には参加しなかったと答えた。さらに、しかし、今進行中の予審では他のものよりも責任の重い署名者を何人かあぶりだそうと躍起になっているようなので、供述書には、同宣言に署名したという唯一の事実をもって、自分は編集と配布の面で完全な責任を負うということを書き留めるべきであり、その責任は「署名者が個人的に認めようとする責任がどのようなものであろうと、すべての署名者の責任と等しい」のだと答えた。

\*

ロンドン大会でS I中央評議会の形成とその構成が決定されたのを受けて、11月4日から6日までベルギーのブリュッセルの近くでその第1回会議が行われた。同評議会の審議事項は次の通りである。アレクサンダー・トロッチを支援するためのキャンペーン。ドイツ（道徳的秩序の名の下での鎮圧——すでに大学生デールが冒瀆的な著作のために有罪になるにいたった——の開始）およびフランスにおけるシチュアシオニストの活動条件。革命的政治潮流に対するわれわれの関係。ユネスコに対してわれわれが介入するための準備（新しい職員募集のための質問票の

発表)。英語によるシチュアシオニスト雑誌『ザ・シチュアシオニスト・タイムズ』の1961年発刊。

同評議会は、都市計画におけるわれわれの構築の企ての合法的かつ実践的な組織化に関して、非常に重要な決定を数多く下した。おなじく、孤立したさまざまなマイクロ社会において環境と出来事をシチュアシオニストがコントロールするためのいくつかの形式についての研究も行った。

最後に、同評議会は、SIが記録した進歩と、SIに寄せられはじめた支持とを、遅滞なく利用して、あの似非新左翼（ゴーシスト）で体制順応のインテリの傾向のなかでも最も代表的な傾向、すなわちフランスの雑誌『アルギュマン』を見せしめにすることを決定した。彼らインテリは、これまでわれわれの周囲にせつせと沈黙を組織してきたが、あらゆる領域での彼らの任務放棄は、事情通の目には明らかとなり始めている。1961年1月1日以降『アルギュマン』誌に寄稿するものは誰であれ、それが将来のいかなる時期でも、いかなる場合にもシチュアシオニストの一員としては認められないということを、同評議会は決定した。このボイコット通知は、少なくとも今後何年にもわたる文化においてSIに保証されている——われわれにはそれがわかっている——重要性から、その威力を引き出すだろう。いかがわしい仲間の魅力を感じるなら、その当人が危険を冒して逆に賭けてみるがいい。

\*

正確に言うと、『アルギュマン』誌の編集長であるエドガール・モランという男が、数名のシチュアシオニストに会おうとしたところ、彼らに言下に断られるか、それとも、今となつてはあまりに遅すぎると返答されるかしたあげく、自分が公然たる軽蔑の的になり始めていること（シチュアシオニストたちが公式に主張したばかりのことは、現在の『アルギュマン』誌に参加してはどうかと請われた数名の者によって、すでに自発的に表現されていた。しかし、控えめに言って、このことは、是非とも必要なボイコットへの確固とした態度にとっては害になりかねなかった）に気づき、自分の件を擁護してくれるようにと実態のない噂を一心にふりまいているのだ。自ら主宰している元・革命雑誌の情けない変遷全体に対して、王党派で反ユダヤ主義者のジョルジュ・マチューとの共犯（「問題の芸術」についての彼のばかげた雑誌 第19号\*8を見よ）に対して「121人宣言」のための署名活動——ドゴールの権力が大層な手段を使ってわれわれと戦っているその時にだ——を卑劣な仕方で妨害したこと（9月29日付の『オプセルヴァトゥール』誌に掲載された彼の論文を参照）に対して、彼が有罪を宣告されているのは誰の目にも明らかだというのに。問題のモランは、シチュアシオニストの1人が1959年に作りフランスでは1度も上映されなかった実験映画を、モラン自身が同じ年に携わっていた別の映画の中で剽窃したとして、シチュアシオニストからいたるところで告発されるかもしれないという噂を——相変わらず口から耳へと——ばらまいている。この噂は絶対に嘘である。SIでは誰にでも手に入る多数の細部に関してコピーされることにはかなり慣れているので、誰も、どれほど明白なコピーの場合でも、そのことを申告させるのが有益だなどと思ったことは1度もないだけに、なおさ

らモランの言うことは嘘なのだ。単に、1人のシチュアシオニスト（アスガー・ヨルン）が、いかがわしい（ルーシュ）モランの映画の仕事を非常に不正確に知らせてくれた第三者に語って、モランがシチュアシオニストの模倣をしているのではないかと口にしたことが1度あっただけのことだ。ヨルンの仮説は、彼がモランという人物の不誠実とみすぼらしい敵意について知っていたことで、十分に説明のつくものだった。それに、もしモランが映画を製作しなければならなかったのなら、彼の芸術の愚かしさからすれば、意識的か否かを問わず、誰かのコピーをしなければならなかっただろう。だが、この年〔=1959年〕に関しては、問題はなかった。映画を作ったのはモランではなくて、ジャン・ルーシュ\*9だったからである。そして、陽動作戦の全く狡猾い専門家であるモランがこのことについて語ったのは、だれもが彼に認めざるをえない例の唯一の才能を使うためでしかなかったのだ。

#### アレクサンダー・トロッチの投獄に関するシチュアシオニスト・インターナショナル第4回大会決議文

シチュアシオニスト・インターナショナル第4回大会の代表は、友人のアレクサンダー・トロッチがアメリカ合衆国で逮捕され、麻薬を服用し売買したという嫌疑をかけられたことを知り、シチュアシオニスト・インターナショナルがアレクサンダー・トロッチに対してこれまで通り全幅の信頼を寄せることを宣言する。

同大会は、トロッチがどのような場合でも麻薬を売買することなどありえないということを宣言する。これは明らかに警察の側からの挑発であり、シチュアシオニストはそのような挑発で怖じ気づいたりしない。

同大会は麻薬所持など重要ではないと、主張する。

同大会は、アスガーヨルン、ジャクリーヌ・ド・ヨング\*10そしてギー・ドウボールに、アレクサンダー・トロッチを支援するため、即座に行動を起こし、可能な限り早い時期にシチュアシオニスト・インターナショナルに対しその活動を報告するように任命する。

同大会は、イギリスで今日最も知的な創造的芸術家であることは全く疑いえないアレクサンダー・トロッチの釈放を要求するため、特にイギリス文化庁および、自由を重んじるすべてのイギリス知識人に訴える。

1960年9月27日、ロンドン

\*1: 『シュプール』 〈シュプール〉は1957年、西ドイツ、ミュンヘンで結成されたアヴァンギャルド芸術集団。最初のメンバーはエルヴィン・アイシュ、ハインツ・ヘフル、ハイムラート・プレム、グレーター・シュタードラー、ヘルムート・シュトゥルム、ハンス＝ペーター・ツィンマーの6名。後にローター・フィシャーが加わった。1959年始めにS Iに合流し、1960年8月から62年1月にS Iから集団除名されるまで、機関誌『シュプール』全7号を刊行。

\*2: ジョルス・メラノッテ S I イタリア・セクションのメンバーでピノ＝ガッツィオの息子。1960年除名。

\*3: ミシェル・タピエ (1909-87年) フランスの美術批評家。1948年、ブルトン、ジャン・ポーランと「生の芸術 (アール・ブリュット) 商会」を設立し、大戦直後から画家のデュビュッフェが実践していた「生の芸術」(幼児、精神病患者、アマチュアの作品)の収集活動を推進する。それと平行して、デュビュッフェ、ヴォルス、フォートリエら大戦後の前衛的な非具象絵画を「アンフォルメル (非定形)」芸術と命名し、この運動の推進者にして中心的理論家として活動。また、サム・フランシスやアンリ・ミショー、フォンタナ、日本の具体派等も積極的に評価した。著書にアンフォルメルのマニフェストである『もう一つの芸術』(1952年)がある。アンフォルメルの代表的画家ジョルジュ・マチューが熱狂的な教権主義右翼だったため、それを支持するタピエ派もシチュアシオニストは「バチカンの秘密諜報員」、「イエズス会士」などと呼んでいるのだろう。

\*4: パトリック・ストララン カナダ人のレトリスト。レトリスト・インターナショナルのメンバーとしてドゥポール、ヴォルマンらとともに活動し、パリのギャラリー・デュ・パサージュで「戦争の前」と題した「影響波及的メタグラフィック」の展覧会にも出品。カナダのオーロール出版社から『ソクラ／クリ／ティック問題』、『謎の飢餓』(ともに1975年)などの著作がある。

\*5: クリスチアン・クリステンセン (?-1960年) デンマークの革命家。今世紀初頭のデンマーク労働運動の理論家にして組織者。同姓同名のデンマークの政治家で閣僚を歴任した近代左翼運動の指導者ジャン・クリスチアン・クリステンセン (1858-1930年)とは別人。

\*6: シルケボア美術館 アスガー・ヨルンが生まれ故郷のシルケボアに自ら作った美術館。そこには、コブラの芸術家の作品のほか、アントニオ・サウラ、ロベルト・マッタ、デュビュッフェの作品など、ヨルン個人のコレクションが展示されている。

\*7: アレクサンダー・トロッチ イギリス国籍のシチュアシオニスト。S Iのなかではセクション無所属で、1961年以降S I中央評議会のメンバーとして活動。1964年秋に自らが推進していた文化運動「プロジェクト・シグマ」の最初の刊行物発行に際して、S Iを関わり合いにならせないために脱退。

\*8: 「問題の芸術」についての彼のばかげた雑誌 第19号 モランが編集する『アルギュマン』第19号は「問題の芸術」というタイトルで、現代芸術 (絵画・詩・音楽)の特集を組み、ユベール・ダミッシュ、ピエール・フランカステル、フランソワーズ・ショエ、アンドレ・デュ・ブーシェ、オクタビオ・パス、ロジェ・ムニエ、アドルノなど、芸術家、芸術批評家、詩人、哲学者など多様な視点からの論文、インタヴューなどを掲載している。そのなかにはジョルジュ・マチューの文章「形態の溶解について」も含まれている。

\*9: ジャン・ルーシュ (1917-) フランスの民族学者、映画監督。マルセル・グリオールの元で人類学を学び、アフリカ各地を訪れ、1947年以降、研究上の必要から「シネマ・ヴェリテ」と名付けたドキュメンタリー風の映画を作り、人類学博物館にルロワ・グーランとともに民族学映画委員会を開設した。シネマ・ヴェリテの手法を用いた民族学的作品として、ピアリッツ〈呪われた映画〉フェスティヴァルでグランプリを獲得した『憑かれた者たちの舞踏への参入』(1949年)、『狂った主人たち』(55年)、『人間のピラミッド』(59年)、『おれは1人の黒人』(59年)などがある。ここで話題になっているのはルーシュがエドガール・モランと協力して作った『ある夏のクロニクル』(61年)のこと。シネマ・ヴェリテの手法を現代の都市社会を対象に用いて、カメラによる1960年の夏のパリの街での社会学的アンケートを行ったこの映画は、ルーシュが民族学的関心から社会学的関心へと移行しつつある時の作品である。この作品の後、ルーシュは『罰』(62年)や『北駅 (ガール・デュ・ノール)』(64年)など、モランとの映画で開発した「シネマ・ディレクト」と呼ばれる手法を用いた映画を数多く撮っている。1987年シネマテーク・フランセーズ会長に選ばれる。

\*10 : ジャクリーヌ・ド・ヨング オランダ国籍、S Iオランダセクションのメンバー。1962年3月に除名。その後、1963年に「シチュアシオニスト・タイムズ」からアスガー・ヨルンと共同で「迷路」についての資料集（映画、音楽、詩、民俗学、建築など）を出版している。

### 訳者改題

1960年9月にロンドンで開催されたS I 第4回大会は、S Iの歴史において2つの点で重要な大会となった。すなわち、第1にS Iの組織形態がそれまでの国ごとに独立した各セクションの連合体から、最高議決権を持つ大会とそれによって選出される中央評議会という形に変更されたことであり、第2にS Iがそれまで中心に据えてきた「統一的都市計画」に「日常生活の革命的批判」の意味を強く持たせ、S Iの路線の「政治化」を図ったことである。この2つの点は密接に関係し合っており、第1の決定は第2の決定の論理的帰結としてなされたと言っても過言ではない。S Iは、いくつかのセクション（イタリア、オランダ）で生じてきた芸術—技術至上主義的変質に対処し、社会革命の側面を前面におし出すために、組織の単一化によってメンバー間の理論面での統一を図ったのである。

S Iにおける芸術—技術至上主義の兆しは、1959年のミュンヘンS I 第3回大会前後の「統一的都市計画研究所」をめぐる議論においてすでに胚胎されていた。コンスタントらオランダ・セクションは、大会以前にはドゥボールやヨルンの主張する文化革命と社会革命の統一を「ユートピア」だとして、S Iの活動を知識人による文化変革に限るべきだという意見を述べ（参照）、大会においては「統一的都市計画」への「技術」と「合理化」の利用可能性を訴えた（参照）。イタリア・セクションのメラノッテは大会において「統一的都市計画研究所」にのっての「作品の重要性」の評価を求めた（参照）。ドゥボールは「社会革命の展望はそのあらゆる古典的な図式との関係からすれば、大きな変化を見せている。それは現実に則している」（参照）と現代資本主義社会での闘争場の変化を主張し、それを見ないコンスタントらの文化至上主義こそ「改良主義」で「ユートピア」主義であると激しく批判し、フランカン「技術それ自身によって技術的環境を消失させるという任務」（「文化革命のための綱領」）を主張する。だが、最終的にはドゥボールらはコンスタントらにある程度譲歩するかたちでS Iの統一を図ったと思われる。ドゥボールとコンスタントが1958年11月10日に「シチュアシオニストの行動の最小限の定義」としてこの大会に向けて発表した「アムステルダム宣言」が、大会で全員一致で採択されるに際して加えられた修正は、対決すべき相手としては「反動的なイデオロギーと勢力」という言葉から「イデオロギーと実践の反動的な体系（システム）」という言い方に薄められ、「文化」という言葉がつけ加えられ、「芸術上の探求の自由」を認めるものとなっている（参照）。

しかしその後、ロンドン大会までに、この芸術—技術至上主義は結局S Iの理論と相容れなくなり、一連の除名・脱退という形で表面化した。1960年に入り、春にまず、オランダ・セクションのアルバーツ、アウデヤンス、アルマンドが、教会建築に協力したという理由で除名され、次いで6月、ピノ＝ガッリツィオ、メラノッテ、ヴェリッヒらイタリア・セクションのメンバーが、アンフォルメルに関する美術評論家ロレンツォ・グアスコとの接触を理由に除名される（参照）。そのすぐ後には、今度は、これらの者のイデオロギー的変更を激しく断罪してい

たコンスタントが、「ニュー・バビロン」の建設において建築の専門技術者を特権的に評価することによって、あらゆる専門家を批判するS Iの規律との間で齟齬を生み、表向きは「ニュー・バビロン」の計画に没頭するという理由でS Iを脱退する（参照）。これらのいずれもS I結成当初からのメンバーの「芸術家」たちの除名・脱退の意味は次のように考えられるだろう。芸術作品の独立性への志向は、57年のS I結成から3年が経過し、外部からのS Iへの注目が高まるにつれて、商業的成功をめざす者が出てきたことの現れとも取れるが、本質的には、ドゥボールらとピノ＝ガッリツィオ、コンスタントらとの間で「文化」の意味の捉え方の差がここになって表面化してきたのである。それには、「芸術家」出身ではないアッティラ・コターニィやラウル・ヴァネーゲムなどの者たちがこの頃からS Iに参加したことや、60年というアルジェリア戦争をめぐる政治的激動の年に、S Iが外部の様々な運動潮流と関係を持ち始めたことも影響しているかもしれない。ドゥボールが〈社会主義か野蛮か〉との共同行動を模索し、カンジュエールと『統一的革命綱領の定義に向けた予備作業』を発表したのも、またアルジェリア戦への不服従を掲げる「121人宣言」に関わったのもこの年である。

S Iはこのロンドン大会以降も、61年4月のアスガー・ヨルンの脱62年2月のドイツ・セクション（〈シュプール派〉）の大量除名、同年3月のナッシュら6婦負の分離工作を行った者（ナシスト）の除名というように、「芸術作品」を思考する部分との闘争を継続してゆく。そして、62年のアントワープでの第6回大会では、革命組織として自らを位置づけ、単一の世界組織へと組織形態を再度変更し、57年のS I結成以降からの第1期に幕を下ろし、68年5月へと至るS Iの第2期へ入ってゆくのであるが、60年のこのロンドン大会がS Iの第2期へと決定的に向かうワンステップだったのだといえるだろう。

---

S Iの第4回大会は、1959年5月に開催されたミュンヘン大会から17ヶ月後、1960年9月24日から28日まで、ロンドンのイーストエンドの秘密の場所で開かれた。ロンドンに結集したシチュアシオニストは、ドゥボール、ジャクリーヌ・ド・ヨング、ヨルン、コターニィ、カティア・リンデル\*1、ヨルゲン・ナッシュ、プレム\*2、シュトゥルム\*3、モーリス・ヴィッカーとH・P・ツィンマーであった。大会の討議は、実は、ロンドンの芸術関係者や新聞・雑誌記者との接触を巧妙に避けた場所として、「犯罪者が多いことで名高い」（『シュプール』誌 第2号）ライムハウス地区にある「英国海員組合会館」で行われた。

9月25日、第1回会議は、まず、重要さの異なる17件の議題からなる議事日程の採択について討議し、その中から、最終的に、3件が切り離され、S Iの別の審議に付託された。アスガー・ヨルンが、会議の議長に選出され、今大会のすべての議事で議長を務めることになった。

次に、アッティラ・コターニィからの報告があり、大会参加者は数分間、耳を傾けた。これについては2日間にわたって討議されることになった。コターニィはS Iをまず、出会いの場所を

作するための設備を獲得するものとして規定する。このような位置づけを説明しながら、彼は、対話が疎外であり、悲劇であるとしたり、出会いが手段によって否定的に選別されたコミュニケーションの試みであるとする、哲学的見解は批判として不十分であることを示した。なぜなら、「周知のように、全く異なった様々な理由から、こうした出会いすら起こらない」からである。統計学的に、いくつかの考えられる移動の間で、空白、つまり無駄な時間の割合を計算することができる。「出会いの欠如は具体的な数字として表すことができ、それによって、世界の歴史的な状態を特徴づけることができるかもしれない」（中略）「この分析の結果として、われわれの運動は、（たとえばコミュニケーション手段のいかなる「進歩」とも無関係に）出会いの欠如をもたらしている原因を、実践的に、批判しなければならない。そして、出会いと漂流の要素が積み重ねられる場所、基地（シチュアシオニストの「砦」）を築かねばならない。これは状況の構築の最低限のものである」。コターニィはこの計画を一定の枠組みの中で、すなわち、一定の期限を設けて検討することを提案した。この最小限のネットワークを設置するために必要な時間計画を作らねばならない。シチュアシオニストのほかの道具は、宣伝活動や出版活動の道具も含めて、すべてこの計画に従うことになる。

この展望についての討論は次の問題を提起するにいたった。S Iは、どの程度政治的な運動なのか？ S Iの外には、亜流の政治家しかいないという意味で、S Iは政治的であるという答えは多くの賛同を得た。討議は、いくらか混乱してきた。今大会の論調をはっきり出そうというドゥボールの提案で、参加者は書面で次の質問に答えることになった。「S Iが頼りにできる社会勢力があると思うか？ あるならば、それはどのようなものか？ どのような条件でか？」この質問状の内容が決定し、回答が書かれた。はじめの方の回答からは、S Iが社会全体の解放のプログラムを作成し、他の社会勢力と一致協力して行動することが期待されていた（コターニィ「われわれが自由と呼ぶものを頼りにする。」——— ヨルン「われわれは専門化と合理化に反対するが、手段としてのそれには反対しない。（中略）社会集団の運動は彼らの欲望によって規定されている。われわれは、他の社会運動がわれわれの方針に合わせない限り、他の社会運動を受け入れることはできない。われわれは新しい革命勢力である。われわれの外部で同じ道を探しているほかの組織とともに行動するために」）。会議は閉会した。

9月26日、第2回会議の冒頭で、ハイムラート・プレムは質問状への回答としてドイツ・セクションの声明を読み上げた。前日の会議の閉会后に作成されたこの声明は非常に長いものだが、前日に読まれた回答に見られた革命的プロレタリアートの支援に対する期待を攻撃している。なぜなら、労働運動を支配してきた数々の官僚主義的企てに対抗できるだけの革命的な力量を労働者が持っているかどうかについて、彼らは深い疑いを抱いているからだ。S Iは、今日、社会によって堪えがたい状態に置かれ、条件付けの武器をとるには自分自身しかあてにできない、前衛芸術家を動員することによって、単独でその計画全体の実現を準備すべきであると、ドイツ・セクションは考えている。この見解に対して、ドゥボールは激しい批判で答えた。

夜の会議では、ドイツ支部の声明が再び検討された。ナッシュは、それに反対の立場から発言し、SIが政治組織や社会運動組織の分野で直接に行動する能力があることを強調した。彼は有益なところにシチュアシオニストの秘密メンバーを潜入させることを組織的に企てることの必要

を訴えた。ナッシュの意見は、皆に原則的に承認されたが、状況に関して、いくつかの留保条件が付け加えられた。しかしながら、ドイツ・セクションの見解について、議論はとどまることを知らず、その中核をなす、労働者は満足しているという仮説に至った。コターニィは、ドイツ代表にむかって、たとえ、1945年以降ドイツでは労働者が受動的で満足しているように見えても、あるいは、合法的なストライキが組合員を楽しませるために音楽をつかって組織されているにしても、他の先進資本主義国では、「山猫」ストが増えていることを指摘した。また、彼の意見だが、彼らがドイツの労働者をまったく理解していないと、付け加えた。精神的な問題と物質的な問題を区別したプレムに対して、ヨルンは、この区別とは訣別しなければならないこと、「物質的な価値が『精神的な』意味を取り戻さなければならないこと、精神的な能力はすべて、その具体化によってのみ評価されねばならないこと、言い換えれば、SIによって今まで定義された意味で、世界が芸術的にならなければならない」ことを訴えた。ジャクリーヌ・ド・ヨングは、難解なうえに、翻訳のせいで（大会の支配的な言語はドイツ語だった）ますます混みいつてきた議論を単純にするために、ヨルンの見解に対して1人1人が賛否を表明することを求めた。全員が賛成した。ドゥボールは、多数派がドイツ・セクションの声明をはっきりと否認することを提案した。それで、両派が別々に見解をとりまとめることに決まった。少数派のドイツ代表たちは退室して、隣の部屋で話し合った。会議が再開されると、ツインマーは、ドイツ・セクションの名において、先に発表した声明を撤回すると述べた。それは決して、その重要性を否定するからではなく、今ここで、シチュアシオニストの活動を妨げたくないからである。「われわれは、われわれが参加したかどうかにかかわらず、SIによってなされたすべての活動に、そして今後なされるであろう活動に連帯することを宣言する。われわれはまたSIの名において発表されたすべての見解に賛成するが、全体の発展に対して、二義的なものと考えられる今日の討論については、将来の検討にゆだねたい」と彼は結んだ。全員がこれを承認した。しかし、コターニィ、ついで、ドゥボールは、今日討議された問題が二義的であると彼らは考えていないことを明記するよう求めた。ドイツ代表はこの語句を削除することに同意した。会議は、夜遅く閉会した。

27日の第4回大会では、アレクサンダー・トロッチの投獄に反対する決議が採択された。また、翌日、ヴィッカーが大会の名において公式声明を発表する現代芸術院で、とるべき態度について議決された。この近代主義的な耽美主義者のサークルを軽蔑をもってあしらうことに全員が賛成した。全会一致で承認された、5月17日の宣言に関して、ヨルンは次のことを強調した。「あらゆる形態における、窮乏世界の清算」とは、われわれにとって、窮乏の終わりは、いかなるものをも拒否する自由、いかなる強制的な快適さをもなしですませる自由を含んでいる。それがなければ、窮乏の消滅は、新たな疎外を生むだろう。

大会では、SIの組織を手直しして、あらたに、中央評議会を設置することが決議された。中央評議会は、6週間から8週間おきに、ヨーロッパのさまざまな都市で開かれることになるだろう。この会議には、SIのメンバーなら誰でも参加できる。会議の閉会直後に、集まった情報や決定事項が全員に伝達されるだろう。だが、この機関の特徴は、評議員一一評議員は大会で指名される一一の過半数の同意が、SI全体を拘束することにある。したがって、SIの結成時に、コシオ・ダローシャのイタリア・セクション\*4の影響によって採択された、国ごとに独立したセ

クションからなるS Iの連合制という考え方は放棄される。S Iの方針をはっきりと討議に付す、このような機関は、本当に共同して活動していく以上、地理的な広がりをもった運動に不可避的な、何のコントロールも受けない事実上の中央集権による独裁よりも好ましいと考えられる。毎年、開かれるS Iの大会が、運動の最高機関であることに変わりなく、すべてのシチュアシオニストがこれに結集することが理想だが、それが実際には不可能である以上、欠席者は、できるだけ、書面で規定の委任状を大会に提出するか、別のシチュアシオニストを代理人に指定することが、決められた。大会では、通常、理論的な討論がなされるのに対して、評議会は、とりわけS Iの活動の実際面での発展を揺るぎないものにするだろう。しかしながら、大会の合間には、中央評議会がS Iの新しいセクションを承認する権限をもち、この場合、そのセクションの代表を評議員に指名することもありうる。

ロンドン大会で指名された、最初の評議会は、かつてのSI誌編集委員会のメンバーと、スカンジナビア諸国を代表して満場一致で指名されたナッシュからなる。それに、コンスタントの脱退でできた空席を埋めるためにコターニィが選ばれた。

会議の最後の案件は次回の大会の場所の選定だった。いくつかの提案が退けられたあと、ベルリンとスウェーデンのイエーテボリの間で投票がなされ、イエーテボリに決まった。

9月28日、第5回会議はドイツ・セクションから提案された「狂気に関する宣言」を採択した。その主題は次のとおりである。「社会がその総体において狂っている限り、(中略)それがS Iのメンバーの場合には、われわれはあらゆる手段を用いて狂気という形容に反対し、それが引き起こす結果に反対する。現代精神医学にとって正気と狂気の規準は、結局、社会的成功にあるのだから、あらゆる現代芸術家について狂気と言う形容を断固として拒否する」。大会はS Iの統一的都市計画事務局をブリュッセルに移転し、アッティラ・コターニィをその局長とする決議を採択した。

コターニィは都市計画の法的規制に注目しなければならないことを訴えた。「現在建設されているものは土地の上ではなく、法律の上に建設されている」。そして、そうでなければ模型の段階にとどまっている。ヨルンは新しい幾何学の必要を説いた。なぜなら、明らかにユークリッド幾何学と現行の法律の間には直接的な関係があるからだ。会議の最後の案件は、いくつかの実地的な決定であったが、中に、ユネスコの掌握に関するものがあつたとだけ言っておこう。

同夜、現代芸術院において、モーリス・ヴィッカールは、たった今終了した大会の公式声明を発表した。このような場所で、この声明のあとで討論が引き続いて行われる必要はなかった。なぜなら、ヨルンが公衆に向かって答えたように、「討論は4日間続き、今や、すべてが明白で、われわれは合意に達した」からである。その上、現代芸術院がこの夜のために作らせた最初の翻訳が非常に劣悪で、意味を歪めていることがわかったので、シチュアシオニストは十分に満足できる翻訳ができるまで、誰にも発言の機会を認めるわけにはいかないことを理解させねばならなかった。シチュアシオニストは十分な勢力で場所を占めていたし、明らかに時間に味方されていたので、現代芸術院の責任者たちは、即座に、そして約2時間の間、それに取り組みねばならなかった。最後の1時間あまりの時間、すでにすっかり集まっていた公衆はいらだっていた。しかし、この長い待ち時間の間に出ていった人は非常にわずかだったし、ヴィッカールのすばらし

い演説の間はもっと少なかった。というのも、テキストは、最終的に、非常にうまく翻訳されたからである。

\*1：カティア・リンデル スウェーデン国籍のシチュアシオニスト。S I スカンジナヴィア・セクションに所属。1962年3月に除名。

\*2：ハイムラート・プレム S I ドイツ・セクション。〈シュプール〉のほかのメンバーとともに、1962年2月に除名。

\*3：ヘルムート・シュトゥルム S I ドイツ・セクション。〈シュプール〉のほかのメンバーとともに、1962年2月に除名。

\*4：コシオ・ダローシャのイタリア・セクション ピノ＝ガツリツィオらを中心とした元「イマジニスト・bauハウスのための国際運動」のメンバーら。

## S I の状況についての報告

私がここで言わなければならないことは、すでにS I の内部で広く議論されたことで、それゆえ、それゆえ、その意味を大部分なくしてしまったことを認めるにやぶさかではない。それについては諸君にお許し願いたい。S I を他の政治的問題と芸術的問題の総体のなかに「位置付ける」ために、提案したいことが3つある。

基本的に、以下の3件について検討願いたい。

a S I が物質的な設備の整った出会い（情熱であろうと告発であろうと）の場であること。わたしは「物質的な設備の整った」ということを強調する。

b 基礎的な設備の準備段階（この段階は前シチュアシオニスト的とも、前芸術的とも形容できる）は資本主義的無意識行動によってコントロールされていること。

c 基礎的設備とはシチュアシオニストの諸能力の編成に他ならないこと。

アッティラ・コターニイ

## J・ナッシュ（スウェーデン）の発言

今まで耳にしたことから受けた印象は、一言で言うと、ある種の悲観主義がS I の中にあって、これがドイツ・セクションの声明の中に色濃く現れているということです。しかしながら、われわれのスカンジナビアでの経験では、小さな集団でも、爆発力と本当の活動理論があれば、イギリスやドイツやフランスで考えられている以上のことができるのです。わたしは数年の間、労働者の文化活動組織で働きました。スカンジナビア諸国では労働者階級のために経済的余裕が作られたことで有名ですが、この経済的余裕がどのような文化的目的に利用できるかということは当然わかっていません。というのは、それは人生の意味という問題に関わってくるからです。それで当面の間、労働者には資本主義によって作られた文化が与えられています。なぜなら、それしかないからです。それが文化資本主義の産物に過ぎないことはよくわかっていますが、現代民主主義国では、左翼はこの産物の分配を組織することによって大きな利益を得ているのです。したがって、当然、左翼は本当の創造からは何の得るところもありません。

S I があれば、創造の可能性を生み出すことのできる、大きな浸透力を持った少人数の集団を生み出すことが可能になるでしょう。それはちょうど、文化の消費の可能性を広げるためだけに共産主義者が前衛グループを組織したのと同じことです。

私自身、3年間、金属労働者組合の執行部にいました。2年前、スカンジナビア諸国の全労働組合組織の大会に参加しました。ある人の報告によると、完全雇用が恒常的に続いていて、ストライキがないために、ストライキ資金はこの10年間使われなかったそうです。スウェーデンは6万人の外国人労働者を受け入れてさえいました。ストライキ資金は、ドイツマルクに換算す

ると、3千万マルクもあったそうです。それでいて、この金をどうしたらいいのかわからないでいたのです。これがあの大会の大問題でした。

S Iは、こうしたこと一切を打倒するために、わたしが今言った集団が協力することのできる、初めての組織です。潜入という古き良き手段を使わなければなりません。これ以上によい手段はありません。文化省、ユネスコ、政府、労働組合、新聞社、放送局など――必要ならどこでも――、さまざまな種類の組織で、ひそかに活動することのできる、秘密会員を作ることをここで提案します。

秘密会員であることで、彼らは、S Iの公式メンバーであることが、知られている場合よりも、ずっと大きな行動の自由をすぐに得ることができるでしょう。この方法は、なканずく無政府主義組合活動のある種の試みを実際に適用するものですが、必ずや効果をあげることでしょう。

ヨルゲン・ナッシュ

### 統一的都市計画研究所に関する決議

第4回大会は以下のことを確認する。すなわち、1959年にS Iによってアムステルダムに開設された「統一的都市計画研究所」は、その任に就いていたシチュアシオニストたちがS Iに全面的に敵対する反動的な企てに参加したために、更迭を余儀なくされたので、維持が不可能になった。

統一的都市計画の研究と応用作業を進めるために他のシチュアシオニストを任命することを取り決める。

大会は、S Iが統一的都市計画研究所の所長として、A・コターニィを任命することを決議する。所長は大会に対して責任をとるものとする。

この研究所の所在地をブリュッセルに定める。

### 現代芸術院の前でS I第4回大会の名において行われた声明

皆さん

現代芸術院は「インターナショナル・シチュアシオニズム」運動の声明と予告しましたが、それは、われわれが現代芸術院に伝えた用語の使い方としてまちがっています。

シチュアシオニズムは存在しません。このように呼ぶことのできる主義はありません。われわれがシチュアシオニストと呼ぶものは実際の経験であり、規律ある国際的な運動として組織されたものです。もし、皆さんがシチュアシオニズムは存在しないということを理解されたなら、それだけでも、今晚の時間を無駄にしなかったことになるでしょう。もし、そのうえ、何か他のことを理解されるなら、皆さんは余得を得て帰宅されることとなります。

まず第1に、われわれが今作ることのできるいかなる作品もシチュアシオニストの段階に達し

ていないということを考えていただきたい。われわれは共同して、最初の前シチュアシオニスト的総体を近い将来実現しようとしているだけです。シチュアシオニスト運動は物質的設備を備えた新しい情熱としてとらえることができます。われわれは新たな革命勢力なのです。放棄される他の人々によって横取りされた、革命的な過去を、われわれ以外の誰が、全面的に所有することができますでしょうか。

われわれは、芸術上の問題のまわりで言葉を芸術的に使う趣味はありません。芸術上の問題はもっと底が深いのです。われわれはとりわけ行動に関心があります。もし、おしゃべりをなくすならば、少なくとも、胸をわくわくさせる町を作り出すことができるでしょう。われわれは環境を創造することができる。あなた方が感じている退屈から人々の振る舞いを解放することができるのです。

皆さん

シチュアシオニスト・インターナショナルの第4回大会は、ライムハウスの英国海員組合会館で、9月24日から今日まで、ドイツ、フランス、デンマーク、スウェーデン、オランダ、ベルギー、ハンガリーの各セクションの代表を集めて開かれました。アレクサンダー・トロッチがアメリカで破廉恥にも逮捕されたために、イギリス・セクションが代表を出すのを妨げられたことを、われわれは深く遺憾に思います。

ここで、シチュアシオニスト・インターナショナル大会に付され、全会一致で採択された宣言を読み上げます。

モーリス・ヴィッカール

アレクサンダー・トロッチの投獄に関するロンドン大会の決議はシチュアシオニスト情報のページを参照のこと。

## 演劇ユニット『誰でもない人とそれ以外の人々』への序文

「われわれが力を尽くすことを望むのは、世界の終焉のスペクタクルのためではなく、スペクタクルの世界の終焉のためである。」

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第3号の論説より

それをわれわれに繰り返し言ったものはいただろうか？ それをわれわれに予言したものはいただろうか？ 演劇は死んだと。われわれは「演劇のために」書いているのだから、こんな考えには何の興味もない。演出家たちは、少なくとも時機を失した、最悪の場合には必至の、こうした台詞に人工呼吸を施そうとするだろう。脚本家といえば、下の階の隣人が溺れ死んだという報せを聞いた老婦人同様、死体というちっぽけな考えを持たないものがあるだろうか。事態はここまで悪化しているのだから、葬儀の厳粛さの代わりに、この芸術を完全に忘却の淵に沈ませることになる、「とどめの」作品をやるのを決まりにしているすべての者にとって、演劇は有利な立場にある。

この最初の台本がこの儀式の誘惑を逃れていないことはあまりに明白である。墓の上で書かれたのだ。それはあまりに明白で、前衛たちが必ずや身にまとう確信とは裏腹に、本当にやろうとしたことを言う余地がほとんど残っていないほどである。そうなのだ。わたしは何をしたかったのか？ なぜ、まず、演劇ユニットなのか？

ブレヒト\*1とダダとベケット\*2の流行のあとで、反演劇とか今や周知のやり方を発見するのは、恥知らずというものだろう。もっと広がりのある結果を望むのもそれに劣らず、恥知らずだろう。この蘇生作業は非常におもしろいものにもなりうるし、二義的にもなりうる。それは決して、このような創始者たちと、肩を並べることはないだろう。ブレヒトなどの名前をかつぎ出すことは、厚顔無恥の現れであるばかりでなく、もっと微妙な誘惑の現れだろう。根気のいる新しさの誘惑、応用的で比較的で学問的で、結局は虚しい探求という観念である。ファウスト博士はサタンの弟子に他ならない。これが前衛作品の、意図された、あるいは無意識の、啓蒙的性格の原因である。

演劇ユニットには、明白なものであれ、他の解体中の芸術形態（枯渇した文学ジャンルであるが、もしそのまま、舞台上で上演すれば、最高の評価を約束されている小説のような）によって示唆されたものであれ、前面に出すものとしては借り物しかない。演劇ユニットとは、何よりもまず、小説である。もちろん、翻案されたものではない。その逆である。上演された小説である。すなわち、まったく的外れか、単にさっとかすめただけのライフ・スタイルとわれわれの振る舞いの不均衡、状況の日常的なずれの、あの奇妙な寄せ集めを舞台に投影するものである。一方で、ライフ・スタイルがわれわれの前で対話をし、他方で、こうした身振りや決心、出会いや出発はその中で本当に表現されえない。上演にあたっての既成概念や出来事（たとえば、幕間の廃止）を考慮に入れれば、これが演劇ユニットである。

演劇ユニットは4つの要素からなっている。対話の時機にかかわらず、4つがすべて、スペクタクルの全体的ビジョンに協力する。4つとも、対話のアーティキュレーションや進行（いかな

る劇化も排除する)、直線的有効性と無縁ではない。観客が目の前に上演されているのが自分の人生だということを、なんらかの振る舞いや使い古された演劇の手法によってではなく、対話で心の中に2つの全体(言われることとなされること)が分離されることによって、わかってくるにつれて、対話の直線的有効性は深いものになる。

1 プロットの粉碎—現在まで、演劇をドラマチックにできるかどうかは、何よりも、人物の特異性と、その人物が状況に応じて持っている、大なり小なりの行動力にかかっていた。それはまるで、人物が自分自身を繰り返しているようである。演劇的に効果的な人物とは、まず、再三繰り返される人物である。プロットの一貫性は、1人の人物が他の人物でもありうるということ認めざる、あるいは認めるように強いられる以上、各々の人物の中で実際に展開される多少とも意識的な弁証法を隠していたのである。ピランデッロ\*3やストリンドベリ\*4が試みたように、人格の二重化や人物の真実の多面的な検討に訴える必要はないのである。本当のプロットは意識のそれである。それは、人物の交換可能な特異性である。それゆえ、演劇ユニットは、まったく劇的なものではない(もし、プロットという言葉に「運命」へとむかう登場人物たちの進行であると解するならば)。それは弁証法的なものである。なぜなら、それは、時間的な順序に反して、あるいは時間的な順序にもかかわらず、上演される行動のあらゆる瞬間の完全な再現をめざすからである。

2 登場人物の循環的機能—舞台の上での行動の間隔を開けることが、観客に意識されるのは、常に新しく生まれ変わる登場人物から何も見落とさない場合だけである。もし、演劇ユニットのあらゆる登場人物が、仕事のあるなしにかかわらず、舞台に上がることも舞台から出て行くことも禁じられ、われわれの目の前で、他の人物の対話に外から干渉しているような、ある上演中の時間を考えるならば、人物の機能は、彼が表しているものや、それとは別の時間に、彼に関わる対話の中で彼がしたことやすることから遠ざかるだろう。これが人物の循環的機能である。それは、自分の情熱からも観客の情熱からも隔たっている。これは、もはや単なる1つの役ではないことに驚いている役であり、毎日の生活の中で、現実存在している歪みを強調するものである。われわれが言うこととすることとの間には、決して一致も、同一視もないことを、われわれはよく知っている。それなのに、演劇は今まで、その逆を信じさせることを目的としてきた。演劇ユニットは、もっとも絶対的な反証、すなわち、日常的な手段による日常性の反証に他ならない(というのも、誰も日常性から逃れることはできないから)。

3 参加とライフ・スタイル—舞台上で上演されるものは、ライフ・スタイルに従属している(もし、本当の生活を考えるならば、実際には、到達できないものに従属している)。表向きは、偶然に置かれた、さまざまな事件に、人物は用意されていない。チャーホフの人物を見よ。しかし、上演時間に与えられた新しい次元と、プロットの絶対的な廃止は、チャーホフが試みた以上に、観客の参加を不可能にする。それから何も期待してはならない。カタルシスもプレヒト的証明も。人物は、ちょうどわれわれに最も関係のないものによってしか言い表さないように、他の人物によってしか言い表さない。彼らは、疎外された、偽物だということが明白な、ひどい生活に属しているが、それは、われわれの誰もが朝から晩まで生きている暮らしなのだ。

4 対話と時間—ここで、対話は夢の力を持たない。それには、スペクタクルの外に出るこ

とによって見いだされる力があるだけだ。その力の中では、誰もが安心してしようとするが、安心していなければならないことを確信しているわけではない。それはあたかも、何かした後でかわす言葉がわれわれのした行為を清めるかのようである。したがって、ここで対話は、場合によって、コミュニケーションの価値と無価値を分かち持つ。それは、存在を対話が引き起こした行為の及ばないところに持っていくことによって、存在そのものを変えてしまう。そして、行為はたえず、自らの必要のなさを弁護する。演劇ユニットの唯一の支えである対話は、極限において、こうした行為やエピソードの循環的反復にたえず対立する最も深い情緒を、直接的に――だが極端な苦しみとともに――奪取するものとなるだろう。行為やエピソードというものは、人物に本当の演劇上の重要性を持つのをやめさせる。こうしたエピソードはわれわれにとって、親しみ深くも、身近なものにもならず、より悲痛なものになる。なぜなら、われわれはもうそんなエピソードを体験したくないのに、実際には体験できるからだ。もっとも、日常がコミュニケーションを、2つの眠りの間に置くように、カッコに入れなければ、の話だが。

アンドレ・フランカン

\*1: ベルトルド・ブレヒト (1896-1956) ドイツの劇作家。1928年、クルト・ヴァイルとの合作『三文オペラ』で大成功を博す。29年から36年にかけて共産主義運動に参加。その後、ナチスの台頭によって故国を離れ、スウェーデンから合衆国に亡命。その間、『ガリレオの生涯』(37年)、『肝っ玉おっかあ母とその子供たち』(39年)を書く。戦後、49年以降、東ベルリンに住み、劇団「ベルリナー・アンサンブル」を結成し、字幕スライドや歌を用いた「異化」効果の理論に基づく政治演劇活動を展開。

\*2: サミュエル・ベケット (1906-1989) アイルランド生まれの劇作家。1938年以降、フランスに住み、カフカ、ジョイスに影響を受けた作品をフランス語で発表。代表作に『ゴドーを待ちながら』(1953年)など。

\*3: ルイジ・ピランデッロ (1867-1936年) イタリアの劇作家。『作者を探す6人の登場人物』(1921年)によって、従来の劇の制度に変革をもたらしたことで有名。1934年、ノーベル文学賞受賞。

\*4: ストリンドベリ (1849-1912年) スウェーデンの小説家、劇作家。ショウペンハウアーやニーチェの影響を受け、写実主義、知性的貴族主義、神秘主義と3期にわたる変遷をたどりながら北欧独特の戯曲や小説世界を作り上げた。代表作に、第1期の戯曲『令嬢ユリエ』(1888年)、第2期の小説『大海のほとりにて』(90年)、第3期の戯曲『死の舞踏』(1901年)など。

訳者解題

ここでは、『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 第4号の「独自性と偉大性」でのイズーへの攻撃に引き続き、ヨルンが執拗に批判しているもう1人の「永遠の」レトリスト、モーリス・ルメートルを紹介することで訳者解題に代える。

モイーズ・ビスミュトというユダヤ名の本名を持つモーリス・ルメートルは、1926年、パリのユダヤ人の父とキリスト教徒の母から生まれた。ソルボンヌの哲学科に身を置き、文学・哲学・芸術への関心から、いくつかの雑誌に文章を書くようになり、そのうちアナキストの新聞『ル・モンド・リベルテール』の記者として文学通信欄をまかされる。この頃、自らはユダヤ人であるにも関わらず、反ユダヤ主義の作家セリーヌの熱烈な愛読者となり、特にその文体実験に強い影響を受ける。

戦後、1949年に、ルメートルはイジドール・イズーと出会い、レトリズム運動に参加、50年に発表した著作『犬と猫』において、レトリズムに音楽的次元を加えた。また、より純粋なレトリズム（文字主義）を提唱し、レトリズムの詩論を完成させるとともに、自ら「ハイパーグラフィック」と名づけた絵文字・象形文字などで構成されたレトリズム絵画や造形詩、「失語詩」と呼ぶ音響詩、映画まで幅広い作品によってレトリズムの最も積極的で革新的な芸術家に数えられるようになる。ルメートルは、若くから雑誌の編集に通じていたため、1950年からレトリストの機関紙『Ur』の編集長となり、同時に雑誌『アンジュウ』の編集、57年からはさらに『ポエジー・ヌーヴェル』誌の編集を行った。また、1950年にイズーが『核経済論——青年の蜂起』を著し、体制変革的な青年組織（参照）を作ろうと試みた際に、ルメートルは雑誌『青年戦線』（巻頭論文はイズーの「われわれの綱領」）を創刊してこれに協力した。これらのほかにも、さまざまなレトリストの展覧会の組織化、本・パンフレットの編集、さらには『映画はもう始まった？』（51年）などの映画作品も数多く作り、レトリストの運動の記録レコード『モーリス・ルメートルが紹介するレトリズム』（58年）まで出すなど、レトリストとして活発な活動をしている。

代表的な芸術作品としては、『ハイパーグラフィック壁板』（45—50年）、『ハイパーグラフィックに書き移されたレトリズム誌』（54年）などの絵画作品、『レトリズム詩製造機』（64年）と題されたコンクリートミキサーを転用したオブジェ、失語詩『叫び』（64年）、『失語ソネット』（64年）などがある。著作としては『レトリズムおよびイズーの運動とは何か』（54年）『レトリストの造形作品とハイパーグラフィック』（56年）、『愛の体系』（60年）、『レトリズム絵画略史』（62年）、『ドゴールとセックス』（67年）、『失語作品のタイトルを美的にするためのマニフェスト』などがある。

ルメートルは、1952年以降のドゥボールらレトリスト左派によるレトリスト・インターナショナルには加わらず、一貫してイズーと行動を共にし、レトリストの作品のなかで、イズーと双璧をなす独自のスタイルを築き上げた。しかし、ダダやシュヴィッターズの音響詩を徹底さ

せ1960年代のコンクリート・ポエムによく似たそれらの作品は、1949年に発想された芸術スタイルとしてのレトリズムを純化した芸術作品にすぎず、そこにはレトリスト・インターナショナルやシチュアシオニストのように作品の破棄から状況の構築へと向かう視点はまったく存在しない。イズーとともにルメートルもまた、自らの作品創造を創造者＝芸術家が「創造術（クレアティック）」によって生み出す行為とし、その術に通じたレトリストという秘教集団の一員として「閉じられた創造」の反復に躍起となっているのである。

---

1

「仮に、優れた論敵によって引用されなかったとしたら、世に知られずに終わった人は多いのではないだろうか。忘却ほど高度な復讐はない。というのも、それはそれらの人々を無の埃の中に埋もれさせることなのだから。」

バルタザール・グラシアン\*1『神託便覧』

「シチュアシオニスト・インターナショナルというのは、知的誤謬の1つであって、そんなものは、自分自身の死骸を粉々にして撒き散らして最期を遂げるままにほうっておくべきであると、私はつねづね考えている。さまざまな他人の発見をずる賢く利用しながら、それらを総合しているのだという言い訳しかできない輩を、私はかねてから嫌っている。私が正当な理由に基づいて思うには、シチュアシオニストというのは、亜流マルクス主義者、それも〔二流、三流どころではなく〕二十流ぐらいの低レベルであって、反文化的な穴居人の言い回しに埋まっている。コブラ運動の元画家（それは私のことだ――アスガー・ヨルン）は、何の成果も得られないような原則しか持ちえず、四流か五流の叙情的抽象の真似事をし、先の大戦後の1948年にコブラを結成してようやく何とかまともに自己表現ができるようになったのであるが、それとて、ビヤーク＝ペーターセン\*2がきっかけを作ったのであるし、また、彼よりも前に、リヒャルト・モーテンセン\*3、エイラー・ビレ\*4、エギル・ヤコブセン\*5がペーターセンに支持を寄せている。それに、彼の自国での成果は、なんら実質的な重要性がないままである（というのは、国際的なレベルでなんら新発見をしていなくても、よそで作られられた作品を国内向けに応用している芸術家がいるからである）。私は彼に、絵画だけで十分だろうと忠告しておこう。それはべつに彼の絵画を評価しているからではなくて、彼の『哲学的』作品を読んだがゆえに、そう言うのである。抽象芸術、とりわけ、ポール・ジェラルディのシュルレアリスム版とでもいうべきジャック・プレヴェールが序文を寄せている製造屋の抽象芸術は、売れ行きがよく、ミーハー族をみな夢中にさせているようである。私は、私なりの文化観と創造のために、著作において厳密にならざるをえない。私は、私自身の著作に責任を負うことにさえ、すでにかかなりの困難を抱えている。私の著作には、いかなる間違った文もなく、見直しを要する判断もないのであるが」

。彼がこのように述べている理由のすべてから私が完璧に理解したことはといえば、レトリストのモーリス・ルメートルは、金で雇ったライターに、彼の雑誌『ポエジー・ヌーヴェル』第13号の136ページにわたって、小さな活字をぎっしり詰めて、シチュアシオニスト・インターナショナルについての研究で埋めるよう託したということである。

その文章の途方もない長々しさは、その特筆すべき唯一の特徴であり、そのことは容易に説明できる。発明と理解の努力というものは、かつて私が価値についての研究の中で明らかにした一つもりであるように、時間当たりいくらで支払われるものではありえないし、したがって、お金で客観的に測られるものでもない。産業労働者の慣例は、もちろん、知的生活の周縁にあるいくつかの層に浸透しており、例えば、ありきたりのジャーナリズムは、1行当たりいくらで支払いがなされている。けれども、明らかに、このタイプの労働者の利益とは、質を犠牲にしても生産の速度と量を増すことである。そのことは、とりわけ、情報の乏しさのうちに見て取れる。というのも、情報の収集は、無給の時間内になされているはずだから。またそのことは、そのような仕事のレベル〔の低さ〕にも現れてきており、結局のところ、こんなに安上がりなものに喜んでいるスポンサーの知性は、低脳で、ずいぶんたやすく満ち足りるものだということになる。ルメートルが取りあげている「戦略的な理由」はといえば、そもそもそのせいで彼はこのような無分別を犯すはめになったのであるが、相変わらず曖昧なままである。かりに、彼自身が言っているように、彼が「S Iについて理解するという考えを退けた」のであれば、その主題はすっぱり落としてしまうか、あるいは、その作業を教養ある人に任せるほうがよかったであろう。なぜならば、ルメートルは、企業家として、自らの下請け業者の仕事に全面的な責任を負うからである。

\*1：バルタザール・グラシアン（正式名バルタザール・グラシアン＝イ＝モラーレス 1601－58年）スペインのモラリスト、エッセイスト。反抗的なイエズス会士として、多くの困難に遭いながらもいくつもの著作を発表し、ヨーロッパの道徳思想に影響を与えた。『神託便覧』（1647年 原題 El oráculo manual ただし仏訳題名は l'Homme de cour 「宮廷人」）は道徳的箴言集である。

\*2：ヴィルヘルム・ビヤーク・ペーターセン（1909－1947年）デンマークの画家、理論家。1930年から31年にかけて、バウハウスのクレーとカンディンスキーの教室で学んだ後、デンマークに戻り、1933年、抽象表現主義と象徴主義との総合をめざした理論的著作『抽象芸術のなかの象徴』を著し、これはデンマーク現代芸術にとってエポック・メイキングな書物となる。翌年、リヒャルト・モーテンセン、エイラー・ビレと「抽象シュルレアリスム」の芸術集団「リニエン（線）」を設立し、抽象とシュルレアリスムを統合しようと試みるが、35年、ブルトンのシュルレアリスムに接近して、抽象表現を捨て去る。以後、北欧へのシュルレアリスムの導入に努めつつ、パリでのシュルレアリスム国際展（1938年と47年）に出品する。1950年代以降は、シュルレアリスムとは決別し、構成的な幾何学的抽象芸術に回帰した。

\*3：リヒャルト・モーテンセン（1910－）デンマークの画家。コペンハーゲンで絵画を学んだ後、1932年、エイラー・ビレと訪れたベルリンで、抽象絵画やシュルレアリスムなどの現代芸術に出会う。帰国後、1934年にビヤ

ーケ・ペーターセンと「リニエン（線）」を設立、「抽象シュルレアリスト」を掲げて象徴あるいは幻想と抽象表現とを調停しようとする独自の芸術運動を開始する。37年にペーターセンがブルトンに接近して抽象主義を捨てて「リニエン」を離れると、それに対抗して、エイラー・ビレとともに、モンドリアン、ファン・ドゥースブルフ、クレー、ミロ、タンギー、カンディンスキーらの作品を集めた「ポストー表現主義・抽象・新造形主義・シュルレアリスム」と題した展覧会を組織する。この展覧会は、批評家や観客には評判はよくなかったが、スカンディナヴィアの前衛芸術家に大きな影響を与え、象徴性と抽象表現の結合は後の「コブラ」の芸術表現を先取りするものであった。その後、モーテンセン自身は「コブラ」には参加せず、1950年代初めにフランスにわたり、ヴィクトル・ヴァザレリらとともに幾何学的抽象に向かった。

\*4: エイラー・ビレ（1910-） デンマークの画家、彫刻家、芸術理論家。コペンハーゲンで絵画を学び、モーテンセンとベルリンに行き、帰国後、1934年、モーテンセンらと「リニエン」を設立、「抽象シュルレアリスト」の活動を始める。同年発表された『ピカソ・シュルレアリスム・抽象』は、1938年から1942年には「ヘスト」に参加し、次いで41年から44年には「ヘルヘステン」に参加して、「抽象シュルレアリスト」から「コブラ」への道を開く。1984年のコブラ結成後1951年まで、その積極的なメンバーとして活動、仮面や抽象的な形態に基づいたエネルギッシュな彫刻や絵画を製作した。

\*5: エギル・ヤコブセン（1910-） デンマークの画家、理論家。モーテンセン、ビレらと同世代の画家として、30年代に抽象表現の洗礼を受け、「リニエン」に拠って「抽象シュルレアリスム」の理論と実践の両面で大きな貢献をする。1937年、ナチスの軍隊のチェコスロヴァキアへの進行に対する怒りから描いた「オフォブニン（積み重ね）」が彼をとりわけ重要な画家とした。この絵画は、自発的な線と色彩が分かちがたいまでに複雑に絡み合った構成によって、「コブラ」の先駆と見なされている。1941年、ナチスの占領下で『リニエン』の後を次いで発行された『ヘルヘステン』に参加。48年に「コブラ」が結成されると、1951年までその活動に参加。ヤコブセンの絵画は、特に抽象と象徴の交差する仮面や祭り、北欧の神話などをモチーフにし、線と形態、色彩が自由に絡み合う様は、1946年から47年のポロックのオール・オーバーの手法を先取りしたものとされている。

「私はとても悲しい。しかし、私がどんなにがんばってみても、メゼンス氏はPINを出版しようとしな。私たちはお金はいりませんと彼に言っても、彼は笑って、かりにそれを出版するとしたら、私たちのほうが彼にお金を払わなければならないことになるだろうと言い、また、そんなつもりはないと言った。彼はそれを注意深く読んだが、好きになれなかったのである。彼が言うには、25年前だったらそれは時流に合っていただろうが、今では、私たちはあまり理解をえられないだろう。(.....)

そのうえ別のこともある。つまり、模倣者たちがいるのである。例えば、パリのレトリストたちだ。彼らは、ハウスマン\*1と私の『原(ウル)ソナタ』\*2を真似しながら、私たちの名に言及さえしない。私たちはそれを彼らより25年も前に、彼らより優れた根拠を持って、行なったのに。」

クルト・シュヴィターズ\*3、47年3月29日付け書簡、『ダダ通信』に引用。

ルメートルはどのような武器を用いるつもりなのだろうか。ここで彼は、カール・ヤスパースという名の小さなスイス人\*4の精神医学理論のうちに陥っている。彼の遠近法においては、ヤスパースはモーゼやプラトンに等しい「大きさ」に達しているあ(66ページおよび80ページ)。ルメートルの遠近法においては、このヤスパースは、時代も考え方も彼に最も近いがゆえに、巨大になった。ヤスパースは、今世紀の最も名高い馬鹿の1人と考えるに値する輩であるが、彼の巨大さとは、非科学的な精神医学の権威すべてをもって、彼のような馬鹿ではない人は皆、精神病患者であり、それゆえ公共の危険であって、社会は彼らを監禁し治療することが許されるべきであるという原理を立てたことにある。ルメートルはこの考え方を世界的規模にまで広げた。すなわち、万人が病人である。完全な治療法が必要でありまた完全に正当である。そして、その治療医は彼である(引用。「世界の若さと歴史の恒常的な病気を治すことができる完全な治療法を提案した唯一の人物...」55ページ)、というのである。

しかし、世界の歴史の恒常的な病気とは何か。それは世界の若さであり、ただそれだけである。若い時期には、各個人や集団は、わずかな能力と無に等しい知識に比して、並外れた意志を持っている。成年期は、意志よりも強い現実的な力を持つが、その力は、型にはまった行動に従属してしまう。老年の疲労は、経験や知識によって埋め合わされ、それは力と意志を凌駕する。若さの救済のためにグノーシスを提案することによって、ルメートルは、ただ単に、急速に老いる方法を提案しているだけであり、同様に、若者に、その意志をできるだけ早く、現存する枠組みの虜である社会的な力への意志に組み入れるよう提案しているのである。

まさに、ルメートルは、シチュアシオニストたちが彼のゲームの規則に従わないと言って非難

する。「神話的でまやかしの決まり文句のどれもが、彼らを分類して知の領域に組み入れることを不可能にし、また、乗り越えつつ乗り越えられるものと乗り越えられつつ乗り越えるものとの間の必然的な歴史的関係の確立を妨げている」。それはそうだ。自ら唱える直線的継承とかつまらぬヒエラルキーとかを堅く信じ込み、その他のものにはいっさい目もくれずに、ルメートルは、シチュアシオニストは彼を乗り越えていない、だから彼よりずっと下に位置づけられるべきだと叫ぶ。で、それで？ 私の友人であるデンマークの詩人イエンス・アウグスト・シャーデ\*5はかつて私に、「はるかに下の方へ落ちると転落が上昇になることだってあるよ」と言った。われわれの行動にはなんらまやかしはない。私はけっして、あなたがたルメートル商会ご一同を乗り越えたいと思ったことはない。私たち双方は、すれ違った、ただそれだけである。そして、私たちが接近したのと同じ動きによって、私たちは離れていく。この遭遇がいかなる重要性を持つこともなく。

穴居人というレーニンの例もまた、選択が実にまずい。レーニンとロシア未来派の軋礫は、レーニンが一因をなした革命の一般的な危機と路線転換における1つの例にすぎない。レーニンは、幼年期の病気すなわち希望という病気ではなく、「小児病」と見なされた左翼急進主義に対してあまりに性急で表面的な攻撃をしたせいで、そのような危機と路線転換の一因をなしたのである。おまけに、私は年がいつているので、レーニン自身がみんなから穴居人と見なされていた時期を覚えている。私の死後、いつの日か、私はおそらく誰かに対して反穴居人として用いられることがあるだろう。

ルメートルは、図書館で彼が見つけたか彼の専門代書人に見つけさせたかした時代遅れの文化的価値基準が時勢とともに廃棄されるかもしれないという考えにおびえている。しかし、誰でも知っているように、生きた現実として、文化は、ひとが学んだことをすべて忘れたあとに残っているものである。確固たる記憶に結びついた愚かさほど悪いものはない。そうは言っても、ルメートルのブレン・トラストの百科的知識主義のダイジェストの中の欠点、欠落、はったりを論難しようというつもりはない。

われわれが1950年頃、2、3の文化部門においてレトリズム運動に認めた実験的価値を、ルメートルは軽蔑しているようである。レトリズムにおいて、実験的な面は、実際あったけれども、彼のいう本質的価値、すなわち創造システムに比べれば、取るに足りないものだと、彼は言う。そのようにして彼は、無分別にも、たった1つしかない彼の料理皿に唾を吐く〔=有用なものをないがしろにする〕。というのも、彼が「創造」と呼ぶものすべてが絶対に無効だと、われわれは見なすし、また歴史もわれわれとともにそう見なすであろうから。ルメートルは、唯一の歴史的価値として認められるべきは、彼の唯我論的な創造の夢であると思っているがゆえに、例えば、われわれがレトリズムの詩の重要性を認めないことに、彼は驚く。しかしながらそれは、そのような詩が、ルメートルの恣意的で伝達不可能な「創造術（クレアティック）」\*6のシステム化との関連においてしか、芸術的創造としての重要性を持たないからである。レトリズム運動総体がある時期に少しの間本当の前衛としての役割を担ったことがあるにしても、その最初のデモンストレーションであった擬音詩は、クルト・シュヴィターズよりも20年以上あとになるのだから、もちろん、なんら実験的なところはない。

そのうえ、レトリズムの場合は、パリを別にすれば、なんらユニークなところがない。しかし、ルメートルは、地理的にきわめて偏狭なために、S Iの影響力と、セーヌ左岸で6ヶ月間デモンストレーションを行なった小集団——それがいったい何だったのかを知っているのは世界中でほとんど彼1人きりだった——の影響力を、冗談抜きで比べてみる。しかも彼はそれを、〔一方は〕パリの新聞が巧みにそそのかされたときに献呈することがある「第一面の記事」によって、また〔他方は〕「彼らの名のピラでパリを埋め尽くす」（41ページ）という事実によって、比べてみるのである。そのルメートルは、彼の発見——それはすでに見たように、キリスト教徒であれ他のものであれ、しかるべき地位にいるあらゆるたぶらかし屋たちに売りつけるためのものである——を知ってもらうためならいかなる譲歩をもするつもりなのであるが、自分を理解してもらうための時間はたっぷりあると言い張るばかりで、彼のご大層な創造なるものについて、なぜちっとも理解されないのか、なぜみんなから拒否されるのかを、自問しようもしない。レトリズムは15年前に出現した。レトリズムは、社会において敵を選ばず、あらゆる人々を転向させようとした。そして、20冊もの本を通じて、その教義の証明（亜流のデカルト的な証明）をたえず提示した。けれども、レトリズムはこのうえなく無名のままである。そしてルメートルは、シュルレアリスムや象徴主義——彼が挙げた例を今一度挙げるならば——が、登場から15年後にはすでに文化において幅を利かせていたということを内心では認めたがらない。それらの運動は、どの分野においても現代ほどには新しいものに飢えていない時期に登場したにもかかわらず、そしてまた、今日ほどには解体されていなかった文化的イデオロギーによって、過去の秩序の保全という旗印のもとに攻撃されたにもかかわらず、幅を利かせていたのである。たとえば「レトリズム的思考」という余話のドイツの同類は、システムティックで、疑似弁証法的で、死ぬほどつまらないものであるが、マックス・ベンゼ\*7という名である。彼らは等しく時代の典型である。それは仕方のないことだ。彼らは価値の分類者としては非常に役に立つ。もっとも今日的意義のない価値の分類ではあるが。アメリカナイズされた文化の用語でいえば、それらは、精神の家庭用電化製品技術のガジェット〔=新奇ながらくた〕なのである。

\*1: ラウール・ハウスマン（1886－1971年） ウィーン生まれの画家、作家、詩人。1918、19年頃のベルリン・ダダイストの1人。

\*2: 『原（ウル）ソナタ』 シュヴィターズの詩（1925－32年）。伝統的言語の破壊の試みといえるものである。

\*3: クルト・シュヴィターズ（1887－1984年） ドイツの画家、彫刻家、詩人。1919年、釘・紙・布などを寄せ集めた「メルツ絵画」（「メルツ」は「コメルツ Kommerz 商業」からの切り取り）を制作。1921年、ハウスマンらと接触し、翌年ワイマールのダダ会議に参加、ダダの終結後は構成主義に進む。1924年、ハノーヴァーの自宅にメルツ芸術を集大成して建設した「メルツバウ」は、構成詩『原ソナタ』とともに彼の代表作となる。1933年ドイツを去り、1940年イギリスに移住。

\*4: カール・ヤスパーズという名の小さなスイス人 ヤスパーズ（1883－1969年）はドイツ生まれの精神医学者、哲学者であるが、スイスのバーゼル大学教授であった。なお、「プチ・スイス（小さなスイス人）」は、チーズの名で

もある。

\*5：イェンス・アウグスト・シャーデ（1903－78年） デンマークの作家、詩人。宇宙的な、またはエロチックなインスピレーションによる詩集を残している。

\*6：創造術（クレアティック） イジドール・イズーとモーリス・ルメートルの用語法で創造者としての芸術家が解体の果てのゼロから作り出す方法。本論文の訳者改題を参照。

\*7：マックス・ベンゼ（1910－90年） ドイツの哲学者・理論家。第二次大戦中ナチスによって投獄されたが、戦後は1964年からイエナ大学、シュトゥットガルト大学、マックス・ビルの設立したウルムの造形大学などで論理学、美学、記号論などを教えながら、実存的合理主義、論理的経験論の立場から、情報理論に基づいた、厳密な科学としての新しい美学の確立を目指した。著書に、『技術的実存』（49年）、『文学の形而上学——技術の時代における作家たち』（50年）、『テキストの理論』（62年）など。また、ベンゼは、1958年、ハロルド・デ・カンポスらが中心になってブラジルのサンパウロで創設されたコンクリート・ポエムのグループ〈ノイグランデス〉に属し、その理論家として活動するとともに、自分でも視覚詩やヴォーカル性を追求した詩作品を作っている。

「足りない設備を作るためには、たいして時間はかからない。しかし人員を育成するには、はるかに多くの時間がかかる。それに、もし設備の製造の際にミスがあっても、それは改められる。必要なら、役立たずの機械を壊して、あきらめることもできる。しかし人間は、いったん育成されたら、壊されない。人間は自分がなすすべを心得ている活動を、40年の間、いつでも実行できるのである……」

アルフレッド・ソーヴィー\*1 『マルサスから毛沢東へ』

中国的なパースペクティヴは、中国の文化ではない。しかしそれは、有効で重要な見方である。実際の生きている人間というものは、最長老が約百歳で、新生児の何人かは将来同じくらい長生きするはずであるから、いつでもほぼ2世紀をカバーするわけである。人類のこれら一時的な両極の間には、永遠の緊張がある。人生のこの車輪のサイクル、この永劫回帰は、永続革命であり、それについては、シュメール人、仏教徒、プラトン、ショーペンハウアー、ニーチェ以来、幾千もの考察がなされ、今後も続くであろう。思想のこの道が、歴史の展開が唯一の始まりから必定の終へと一方向にのみ回り、不可逆であるという考えに到達したのは、ゾロアスター教である。それは、その二元論的な見方と一方向的な方向づけを、ユダヤ教とキリスト教とイスラームに伝えた。同時に、その見方は、ミトラ教とマニ教とグノーシス主義に伝えられた。ルメートルのグノーシス主義的な告白を聞けば、彼が仏教の弁証法的ダイナミズムを理解できないということ、彼が二元論に従うであろうということ、そしてまた、彼の若者へのアピールは、ただ単に、古典的で伝統的に西洋的な、未成年者誘拐行為にすぎないということは、明らかである。そういうわけで、私は、全く新しいシステムの可能性を発見したと思い込んだことを後悔している。それは、中国的なパースペクティヴを時間の次元と西洋に応用することで、いくつかの予測できない結果をもたらされるという意味で、相対的に創造的なシステムであるかと思ったのだが。このことから、ルメートルのシステムはいつそう単純になる。彼は、ネオーソレル以外の何者でもない。私はさらに探求したのだ。しばしば自論の証人としてレーニンを挙げているという事実、および、これらのパースペクティヴの起源をフィヒテとしていて、ソレル\*2——彼はそもそもソレルを読んだことを認めている——がその発明者であるとは白状していないという事実から分かることは、彼がその源泉から、公に白状する気になれないほど多くのものを汲み取っているということである。ルメートルの中国的なパースペクティヴは、ソレルのイデオロギーにまで衰えた。その後裔のことは周知の通りだ。

ソレルの巧妙さは、キリスト教の心理学的影響力の方式を研究し、未来のゼロ点（世界の終わりと未知の天国の始まり）に対する信仰を純粹に技術的なシステムに移し替えたことである。そうすれば、キリスト教的な世界の終わりを何にでも置き換えることができるようになる。例えば、ゼネラル・ストライキとか、社会主義革命とか、あるいはより現代的に、核ミサイルのボタン

を押す人とかに置き換えられる。また、そのパースペクティブから見て正しい行動をとらないすべての人々に対する制裁を、今世紀のあらゆる歴史的イベントのキー・ワードを用いて、確実に執行できる。そのキー・ワードとは、裏切り（何に対する？ システムに対する）という非難である。私が（『運命の輪』\*3の中で）バンジャマン・ペレ\*4——彼は現在ルメートルから非常に高く評価されている——の神話体系的（ミトロジック）要請に反対したとき、それはなぜかといえば、私にとって、あらゆる芸術は、限りなく多様な、神話的（ミチック）創造であるからであり、また、私は、押しつけられたただ1つの神話や神話システムの信仰への回帰を、自由な創造性に反するものとするからである。ここで私は、多様な天国という観念を立てて、ルメートルのお気に入りの観念、すなわち、唯一の天国という、今一度掘り返された腐乱死体のようなイデオロギーに反対する。この件に関するペレの態度が1度でもルメートルのような愚かさに近づきえたとは思わないが、しかしその当時、その危険はあった。そして、1952年に愚かにもペレを「創造の欠如」ゆえに侮辱したルメートルが今となってペレを当てにするようになって、ペレはもはや抗議できないでいる。

いずれにせよ、ルメートルの次のような確言ほどシチュアシオニスト運動を褒めそやすことは、誰にもできない。「私は『シチュアシオニスト・グループ』の存在を信じている人々を1人として知らない。シチュアシオニストたち自身がシチュアシオニストでないことは、彼らが何度も書いている通りだ。存在しない集団について語ることは、それをでっち上げたという非難を招くことになる」。けれども、われわれの唯一の目的はまさに、それを発明（アンヴァンテ）することなのだ。われわれはこれまですべてを発明してきた。そしてわれわれはほとんどすべてをまだこれから発明しなければならない。われわれの土地は非常に豊穡だから、それはまだほとんど存在していないのである。

われわれが発明しようとしているのは、シチュアシオニスト的な活動そのものであり、またその定義でもある。ルメートルは、間抜けにも攻撃文書の中に数多くの全く無駄な提案や申し出や言い寄りをすべり込ませていて、次のように主張する。「シチュアシオニストと私のグループは、たぶん、『状況』の分野について精神的に相互に理解し合うことができるかもしれない。また同様に、私を批判する人々も、諸要素の創造主——生の諸々の瞬間を生み出す構築者よりも上位にある——についての私の倫理的な見解や、全面的な文化的状況——創造術（クレアティック）の成果であり、単に遊戯的なものではない——のヴィジョンに、賛同してくれるだろう」。われわれが彼の目的とは正反対の目的を持っていることは、すでに示した。ルメートルの提案するオプションはすべて拒否すべきである。

ルメートルは、アインシュタインの重要性を教示している注（80ページ）の中で、大胆にも、「時間とは、状況に内在しない観念である」と付け加えている。しかしながら、われわれは、シチュアシオニスト的データの研究を進めるにつれて、問題は、現在のトポロジーの知識を越えて、シチュロジー\*5、シチュグラフィ\*6、そしておそらく、シチュメトリー\*7さえをも発明することだと思ってしまうようになっている。

ルメートルは、古典的西洋とは異なるスカンジナビア文化があるということに驚嘆している。スカンジナビア文化とは、何よりもまず、忘却の文化、忘れられた、歴史のない文化であり

、それは、石器時代から途切れることなく続き、中国文化よりも古くて不変である。私は、かくも重々しい忘却の遺産に加えて、私の祖先の何に言及することができようか。

私は何の取り柄もない男である。しかし同時に私は相当に抜け目がない。ジャーナリストや、現存する秩序に奉仕する他の職業的撲殺業者たちは、われわれを「打ちのめされた世代」と呼ぶ。そして、彼らがわれわれを攻撃し、蔑視し、われわれに失業中の未熟練工と同じくらい粗末な食事をする機会を残しておくことさえ完全に拒否したところ、われわれがあまりに強固になり、彼らがわれわれを面白いと思い始めたときにも、われわれが彼ら酷評家たちに大げさな抱擁をよこすのを拒んでいることに、彼らは驚いている。私はコブラ運動の時期を思い出す。ドイツのわれわれの同志たちはドイツ連邦共和国の囚人にかかる費用の10分の1で生活しなければならないと、C・O・ゲーツ\*8が認めたときのことである。レトリスト運動がその創造的な時期に注目し、値する仕事を実現していた際に強いられた生活条件がとてつもなくひどいものであったことを、私は知っている。そしてそれは今も続いている。あるドイツの芸術家——彼はやがて必ずや祖国の最大の誇りとなるであろう——は、2年前に相変わらず、ミュンヘン駅の空の客車以外の住居を持っていなかった。私もまたそうであって、私がシチュアシオニスト派においてシステムティックな構造を発見したとき、そこにあるのは、われわれがそれを密かに利用すれば、われわれに直接的な社会的な力をもたらし、幾多の侮辱に復讐する暇を与えてくれそうな方法だということが、私には分かった。私はためらわずにこの見通しをギー・ドゥボールに説明した。彼はそれを考慮に値しないときっぱり拒んだので、私は私の意見を公にせざるをえなかった。そのとき彼は私に、そのような方法は、ポーウェル\*9とベルジエのような連中とか、隠された豆知識に夢中になる神秘主義的な老嬢たちに任せておけばよいのだと言った。これらの人々は皆、グルジェフ\*10がしたように、その写しを裕福な弟子たちに転売することを夢見ているのである。考えてみると、私も〔ドゥボールと〕同じ態度に至ったであろうと、今では分かる。その態度は、まさしく、今日まで私の行動全体の論理のうちであり、しかも、S Iにおけるわれわれの共同作業の論拠のうちにもあるのである。

さて、「まとまりのない群衆に、秘中の秘、創造の創造法をあかすという考えに私がためらっていることは、理解していただければ」とルメートルは書いている（7ページ）。彼は、ことが彼の無内容な「創造術（クレアティック）」の編成の秘密にかかわるだけにいっそう、秘密を守る権利を擁護している。彼は原爆の秘密などの例を挙げて自分を正当化している。だが実は、その方法の秘密は芸術を職人仕事に変えるものであり、芸術を、よそから来た企画を再生産する独占的技術に変えるものである。ルメートルは、職人の同業者組合の残存物にすぎないものの自覚的な支持者である。記念すべき傑作を認めてもらうことによって、そこに入ることができるのである。たとえばルメートルは、ドゥボールの最初の映画\*11に甘かったが、それはただ彼がその映画を理解できなかったからである。彼は平然としてその映画を「映画史の10大傑作のリストに」含めている。傍点で強調したのは彼である（25ページ）。

ルメートルはまた、私が彼はおしまいだと公言したことを非難する。彼は、自分は生きていると主張する。それはその通りだ。だが私は、彼が死んだと言ったのではない。私は、彼が（彼のシステムの中で）昏睡状態にあると言ったのである。それはおそらく彼が生きている限り続くで

あろう。名人芸の秘密を根気よく占有することは——特にそれが1個人によって独断で決められた名人芸の場合には——、もちろん、その規格に当てはまる非常に独特の商品を生産することが可能であることを保証する。しかしながら、誰であれ、その生産の価値を高めてやろうという気になるということは、全く保証しないのである。

私は、ルメートルと同様に、「抽象美術を生み、定義した」人はワシリー・カンディンスキーである（111ページ）と思う。しかし私はルメートルとは違って、カンディンスキーが「芸術の指導者」であったとは思わないし、また、私が抽象画家であるとも思わない。私はこれまで、まずハンス・アルプとマックス・エルンストの流れ、ついでモンドリアンとマルセル・デュシャンの流れに従って、反抽象的な絵画だけを作ってきた。カンディンスキーは、『点と線から面へ』\*12において、現代美術をユークリッド幾何学のパースペクティブ〔＝遠近法〕に同調させた。それに対して、ここに名を挙げた刷新者たちは、逆の幾何学のほうへ進んだ。すなわち、多次元宇宙から表面へ、線から点へと進んだのである。ドリッピング画法\*13の技術は、カンディンスキーの立場のばかばかしさを暴露している。カンバスの間近で作業をすれば、絵の具の流れは表面、色斑を作る。しかし、カンバスと流れの源の間に距離をとれば、絵の具は線を作り始める。さらにもっと距離をとれば、絵の具は幾多の小さな滴に分かれ、それらは点にしかならない。それはまさしく遠近法におマッスける構成要素のようである。それら構成要素は、色塊として始まり、地平線で点となって消える。カンディンスキーは、地平線において、抽象美術において、始めたが、それはどこに到達するためにであろうか。私はといえば、私は目の前の現在において始めたが、それはどこに到達するためにであろうか。

\*1：アルフレッド・ソーヴィー（1898-） フランスの社会学者、人口統計学者。国立人口統計学研究所長（1954-62年）、国連の人口問題委員会のフランス代表。

\*2：ソレル ジョルジュ・ソレル（1847-1911年）は、アナルコ・サンジカリズムを唱えて革命的組合運動に影響を与えたが、後にその思想が反動運動、特にイタリアのファシズムに利用された。著書に『暴力論』（1908年）など。

\*3：運命の輪 ヨルンが1948年に書いた著書。正式な題は『金の角あるいは運命の輪』で、1957年、コペンハーゲンのセランディア書店から出版された。

\*4：バンジャマン・ペレ（1899-1959年） フランスの詩人。1920年代からのシュルレアリストとして、一貫してブルトンの陣営に付いて活動。ブルトンは1952年にペレのことを「わたしの最も親しい最も昔からの闘争の伴侶」と呼んだ。1925年に『シュルレアリスム革命』の編集者などを務めた後、26年に共産党に入党、一時は『ユマニテ』に協力。31年、ブルトンの使者としてブラジルに渡り、投獄される経験を持つ。36年、スペイン市民戦争に共和国防衛の国際義勇軍として参加し、アナキストのドゥルッティ旅団で戦う。第二次大戦中はフランス軍に動員され、軍隊のなかにトロツキスト細胞を創設しようとしたとの嫌疑で投獄される。41年脱獄を果たし、メキシコに亡命。戦後、45年に亡命先のメキシコで書いたパンフレット『詩人の不名誉』をパリで発表し、アラゴンらのレジスタンス派の愛国主義を糾弾する。48年にパリに戻り、第4インターナショナルと決裂、シュルレアリスムの再建に励む一方で、「革命的シュルレアリスト」やコブラ、レトリストなど新しい潮流を批判する。逆にレトリストらも、戦前と同じオートマティズムを唱えるペレらの「創造の欠如」を批判した。

\*5：シチュロジー（situlogie） ヨルンの造語。トポロジー（日本語では「位相幾何学」ともいうが、語源的には、topos（「場所」の意味のギリシャ語）と logie〈一学〉の合成語で、直訳すれば「場所学」となる）に満足しないヨルンが、それに代わるものとして提起する概念。situs（「場所」の意味のラテン語） + -logie（一学）の合成語で、これも直訳すれば「場所学」となる。トポロジーやユークリッド幾何学に対するヨルンの批判と、シチュロジーの提起については、本記事 第4節を参照。

\*6：シチュグラフィー（situgraphie）ヨルンの造語。situs（「場所」の意味のラテン語）と -graphie（「(学問的)記述」の意味の接尾語）の合成語。本記事 第4節に2度ほど言及され、「柔軟な幾何学」と敷衍されるが、あまり詳しく説明されていない。

\*7：シチュメトリー（situmetrie）ヨルンの造語。situ（「場所」の意味のラテン語）と metrie（「計測」の意味の接尾語）の合成語。本記事では、この箇所を別にすれば、全く言及されていない。

\*8：C・O・ゲーツ カール（Karl）・オッター・ゲーツ（1914-）のことと思われる。ドイツの画家。まずキュビズム、次いでシュルレアリスムと抽象美術の影響を受け、戦後、コブラ運動に近づき、1950年代からは、アクション・ペインティングに接近した。

\*9：ルイ・ポーウェル（1929-） ベルギー生まれのフランスの作家、ジャーナリスト。ジャック・ベルジエとの共著『魔術師たちの朝』（1960年）で有名になり、次いで、「新右翼」の信奉者として、また1978年からは『フィガロ・マガジン』の編集長として、有名になる。なお、ジャック・ベルジエについては、右記著作の共著者であること以外は不詳。

\*10：ゲオルギー・イヴァノヴィチ・グルジェフ（1877頃-1949年） アルメニア生まれの神秘主義運動家。彼の教義は、人間を束縛する古い思考と感情を捨てて高次の霊的自由を達成しようとするもので、20世紀初頭の神秘思想と1960年代のヒッピー文化に影響を与えた。ルネ・ドーマル、P・D・ウスペンスキー、J・G・ベネットらが彼を師と仰ぎ、また、フランク・ロイド・ライトやD・H・ロレンスらの信奉を得た。

\*11：ドゥポールの最初の映画『サドのための叫び』のこと。本書 第1巻を参照。

\*12：『点と線から面へ』 原文ではドイツ語で《Von Punkt ber Linie zur Fleche》となっており、Fleche は Flache の誤植であるとしても『線上の点から面へ』くらいの意味になるが、これはおそらく、カンディンスキーの著書『点と線から面へ（Punkt und Linie zzur Flache）』（1926年）のことを指すものと思われる。

\*13：ドリッピング画法 底に穴のあいた缶に入った絵の具を、キャンパスの上から、動かしながら垂らしていく技法。マックス・エルンストが考案し、ポロックがよく用いた。

「それについての思考と考察は全く新しいものです。引用はまだされていません。主題は、きわめて重要であり、限りない秩序と明晰さをもって取り扱われています。私はそれにずいぶん時間を費やしました。どうか、それを受け入れて、私の才能の最大の努力と考えてくださるよう、お願いします。」

ジョナサン・スウィフト『魂の能力についての反論の余地なき試論』

かりに、ルメートルが主張するように、時間か状況に内在しない観念であるとしたら、シチュロギーは、唯一物、すなわち形態を研究するものとして、形態学と同じになってしまうだろう。しかし、正確に言えば、シチュロギーは、時間の形態学である。というのも、トポロギーを連続性の研究として定義することについては、万人の意見が一致しているからである。連続性というのは、広がり（空間）における非分割性と、時間における非中断性のことである。シチュロギーにおける形態学的側面は、次の定義に含まれる。すなわち、環境とは無関係に、図形に内在する特性に関すること。

停止と中断の排除、強度の恒常性、および過程の伝播の一方向性は、1つの状況を規定するものであり、また、ルメートルが可能だと主張する時間の細分化をも排除する。しかしながら、ルメートルのような無学な輩において観念が混乱しているのは許せるにしても、専門的トポロギー学者たちの間で観念の混乱が横行しているのは許しがたい。そのせいで、われわれは、純粋なトポロギーの分野から離れて、より基本的なシチュロギーを考案せざるをえないのである。その混乱は、向きづけ可能性——それは、本当は、時間の次元への適用にすぎないのだが——の定式の中に入り込んでいる。E・M・パターソンは次のように説明している。「向きづけ可能性という観念は、面は単側か両側かのいずれかである\*1という物理学的観念から派生している。1つの面の各点——境界（boundary）に点がある場合は、それらを除いて——の周りに、小さな閉曲線を一定の向きに描いてみることにしよう。その向きは、時計回りか反時計回りかのどちらかであるが、その点に帰属するものとする。そのとき、互いに十分近いすべての点について同じ向きになるようにそれら閉曲線の向きを選ぶことが可能な場合は、その面は向きづけ可能であると言う。そうでない場合は、その面は向きづけ不可能であると言う。単側な面はすべて、向きづけ不可能である。」

この幾何学と物理学のごた混ぜは全く不当である。容易に証明できることであるが、球体は1つの面しか持たず、輪環も同様である。円錐は2つの面を持ち、円筒は3つの面を持つ、等々。しかし、論理的に言って、1つの面は単側でしかありえない。

いずれにせよ、両側な面は、連続性が途切れているのだから、トポロギー的でない。しかし、両側な二重の面という間違っただ道筋に入り込んでしまった理由は、明白である。なぜならば、それによって、トポロギーを、等しさないし同等性の研究という幾何学の一般的な傾向に結びつけ

ることが可能になるからである。2つの図形がトポロジー的に同位相ないし位相同形であるのは、2つの図形のそれぞれが連続的変形によってもう一方の図形に変換できる場合であると説明される。このことが意味するのは、単に、変換においてたった1つの図形しかないということである。シチュロギーは、唯一物の変換的\*2形態学である。

幾何学の古典的なパースペクティブをトポロジーに適用することで生じる最大の誤りとは、幾何学の古典的な区別に適合させて、座標の数に従って、線形トポロジー、面のトポロジー、立体のトポロジーに区別することである。これは、シチュロギーの基本を理解しようとするならば、不可能で滑稽なことである。なぜならば、トポロジーにおいては、点と線と面と立体の間に、まさしく同等性があるのに対して、幾何学においては、絶対的な区別があるからである。この混乱は、メビウスの帯に関する考察のうちに明確に反映されている。メビウスの帯とは、「位相同形性のない2つの面」を持ち、あるいは「単側な複数の面」を表し、前も後ろもなく、内も外もない、と言われるものである。この現象を見て、メビウスの帯はただ1つの次元しか持たないと思う人さえいるかもしれないが、それは全く馬鹿げている。なぜならば、メビウスの帯を紐で作ることなどできないし、ましてや、線では作れない。メビウスの帯において最も興味深いことは、まさしく、平行な縁の2つの線の間関係である。

次のような明確な事実を理解するならば、メビウスの帯についての幾何学的同等性、合同と相似を、研究することが可能である。すなわち、メビウスの帯の長さは、その幅に比していくら長くてもよいが、その幅との関係において計算可能な一定の比率よりも短くすることはできない、という事実である。この最小限界ぎりぎりのメビウスの帯を計算して作るのは、数学者の仕事である。そのようなメビウスの帯ができたなら、人は自分の目の前にあるのが、次のような物体だと分かるだろう。すなわち、任意に選ばれた1点を通る、その帯の幅を示す直線は、帯の反対側の部分に引かれた同じ直線と直角をなす——もし帯が円筒状につなが合わされていれば、その2つの直線は平行線になるのに——ような物体である。同じ直線が、ある点では水平線を表し、別の点では鉛直線を表している。したがって、帯がぺちゃんこでないなら、空間があるわけではないのに、3つの次元があるわけである。それこそが、メビウスの帯の不思議さである。この種の2つのメビウスの帯は、必ず相似であり、帯の幅が等しければ、合同である。

あらゆるトポロジー的な図形や形態の不思議な振舞いを、空間座標系（縦、横、奥行き）——その中で図形や形態は動くのであるし、またそれが図形や形態を、生んだり消したり、あるものから別のものへと変換したりする——との関連において注目した人は、今まで誰もいなかったようである。ユークリッド幾何学にとっては、座標系〔=座標システム〕は既定の土台である。シチュロギーにとっては、そうではない。なぜならシチュロギーは、座標を好きなように創造したり解体したりするからである。そういうわけで、ユークリッド幾何学は、最小努力の法則に則した方式である直交座標系を基準点とするために、あらゆるシチュロギー的考察を通り過ぎなければならなかった。ルネ・ユイグ\*3が著書『芸術と人間』で明らかにしているところによれば、新石器時代の農耕文明期ののち、金属器文化の発展とともに、2つの様式の分化、すなわちハルシュタット様式\*4とラ・テーヌ様式\*5の分化が生じたのであるが、それこそまさに、幾何学的思考とシチュロギー的思考の分化にほかならない。ドーリア人\*6を通じて幾何学的指向はギリシ

に根づき、合理主義的思考を生んだ。それとは反対の傾向は、アイルランドとスカンディナヴィアで終わった。

ヴァルター・リーツマン\*7は、その著『直感的トポロジー』の中で次のように指摘している。「芸術において、例えばヴァイキングの時代に、曲線交錯模様が飾りとして好んで用いられた。私の目の前に、ストラットフォード・オン・エイヴオンにあるシェークスピアの結び目の庭の写真がある。その庭には、花が幾つもの結び目の形に配置されている。（中略）シェークスピアが結び目と何の関係があるのだろうか。私はそれに答えることができない。たぶん、それは何かの間違いかもしれないし、あるいは、意図的に迷宮のテーマと取り違えたものかもしれない。シェークスピアにおいてそのテーマは2回問題になる。『真夏の夜の夢』（第3幕第1場）と『テンペスト』（第3幕第3場）である。」

間違いなどあるわけがない。ジェイムズ・ジョイスは、『フィネガンズ・ウェイク』\*8の中で、「疾風いけない、怒濤いけない（No sturm ,no drang）」という不条理な文句を発することで、古典主義とロマン主義の間の昔の争いを乗り越え、情念と論理の間の和解に向けた道を切り開いたのである。今日欠けているのは、トポロジーにおいて計画されたことに合致する思考と哲学と芸術である。しかしそれが実現可能なのは、現代科学のこの分野をその元の道——すなわち「位置解析学」\*9ないしはシチュロジー——に戻すという条件においてのみである。ハンス・フィンダイゼンは『霊媒とシャーマン』\*10の中で、シャーマニズムは、ラップ人\*11のうちに今なお生きながらえているが、その起源は間氷期の洞窟の画家たちの精神に遡ると述べている。そして、ラップ人的な個性を特徴づける装飾が単純な曲線交錯模様であることは意味深い。トポロジーに関するいろいろな秘密が知られていたことは、いつも、結び目、紐、曲線交錯模様、迷宮、等々の印の存在によって示されてきた。そして、織工たちは古代からずっと、多かれ少なかれ奇妙でまよかしめいていて曲折した形態に関する革命的な教育を、変わったやり方で伝授してきたのである。この歴史は、あまりによく知られすぎているので、まじめに研究されたことがなかった。そこにこそ異常が認められるのであって、その逆ではない。

マックス・ブロート\*12の著作が打ち立てた、カフカとデンマークの天文学者ティコ・ブラーエ\*13の間の関係は、シェークスピアとハムレットの間の関係と同じくらい深い。そして彼らがプラハ——プラハは、ラ・テーヌ文化の時代からトポロジー的思考に光り輝いており、またトポロジー的な意味においてバロックさえ凌駕するに至っている——にいたという事実は、ケプラー\*14がティコ・ブラーエの計算に幾何学と古典数学の方法を適用して——それはティコ・ブラーエ自身には不可能だった——導き出した驚くべき結果と同じくらい、当然なことである。このことが今一度明らかにしているのは、トポロジーが幾何学の源なのであって、その逆のプロセスは不可能であるということである。このことはまた、キルケゴールの哲学をヘーゲルの哲学の継承として説明することが不可能であるということも示している。ヨーロッパ文化におけるスカンディナヴィア的思考の影響は、首尾一貫したものでも、絶え間なく続いたものでもなく、不条理の思考そのもののようなものである。したがって、イギリスのプラグマティズムやドイツの観念論やフランスの合理主義とはまったく異なるスカンディナヴィアの哲学的伝統——それは、オーレ・レーマー\*15、H・C・エルステット\*16、カール・フォン・リンネ\*17等々の潮流を構成してい

る——が存在するという事実が相変わらず秘密であっても、驚くにはあたらない。スキャンジナビア人たちがこのような奥深く隠された首尾一貫性の基本的論理を知らないのだから、それだけにいっそう他の地域の人々には分からない。私は学問の効用に関するすべての考えに対して最大限の軽蔑を抱いている。しかしながら、ヨーロッパの現在の状況においては、この主題についての無知は危険を呈しかねないように思われる。そういうわけで、私は、スウェーデンボリ\*18とノヴァーリス\*19が鉱山技師であったという事実は、彼らの背中に精神分裂病的狂気という診断を張り付けることを可能にするようなヤスパースのあやふやな公準よりも重要であると考えている。それは、その事実が科学的に論証できるからではなくて、それが織工職と同様にトポロジ的思考に基礎をおく職業だからであり、また、その事実がわれわれをシチュロジーの確立のための貴重な考察に導くかもしれないからである。

けれども、これらすべては、S Iの仕事に従属する、可能な技術としてのみ提示される。S Iの味方と敵は容易に見分けられるものである。ベルジエとポーウェルが、著書『魔術師たちの朝』を出版して、オカルト技術研究所を組織することを提案し、その創設のための援助を求め、また、今日同時代人たちをいろいろ操作できる人々専用の支配的な秘密結社の結成を提案するとき、シチュアシオニストは、最大限の敵意をもってその提案を拒否する。われわれは、いかなる場合にも、そのような企てに協力することはできないし、また、その資金調達を援助したいという気持ちも全くない。

ガストン・バシュラールが『新しい科学的精神』\*20の中で言っているように、「等しさは、明らかに、計量幾何学の基礎である」。そして彼はわれわれに次のことを教えてくれる。「ポアンカレは、さまざまな幾何学の論理的同値性を証明した後で、ユークリッド幾何学は常に最も便利なものであり続けるであろう、そして、ユークリッド幾何学が物理学的経験と対立した場合には、人々は、この基本的な幾何学を変えるよりも、物理学理論を修正するほうを好むであろう、と断言した。たとえばもっと前に、ガウスは、非ユークリッド幾何学の一定理を天文学的に実験してみたいと主張していた。彼は、3つの星を頂点にもつ三角形は、したがって途方もない面積になるが、その三角形はロバチェフスキー幾何学によって示された面積の減少を見せるだろうか」と自問したのである。ポアンカレは、そのような実験が決定的なものであるとは認めなかった。」

シチュグラフィーあるいは柔軟な幾何学の出発点は、位置解析学でなければならない。それは、ポアンカレによって展開され、トポロジーの名のもとに等しさの方向に押し進められた。しかし、等しいとされる要素が少なくとも2つないならば、等しさに関するいかなる言説も、当然、排除される。たとえば同等性は、唯一物についても、唯一物の多価性についても、何もわれわれに教えてくれないが、実はそれこそが、位置解析学あるいはトポロジーの本質的な研究分野なのである。われわれの目的は、ユークリッド的な等しさの幾何学の対極に、基本的で柔軟な幾何学を置くことであり、また、両者の助けを借りて、変数の幾何学、微分的で遊戯的な幾何学のほうへ向かうことである。われわれは、実験的にガウス曲線を見せてくれるガルトンの装置（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第1号の図を参照\*21）のうちに、この問題に対するシチュアシオニストの最初のアプローチを見いだす。そして、たとえ私の直観的な幾何学の取り扱い方が明らかに反正統的であるにしても、私は、道を切り開き、そしてまた、幾何学と物理

学をどちらの自律性をも放棄せずに調和させる可能性に関して、ポアンカレとガウスを引き裂いていた深い溝を渡る橋を架けたと信じる。

あらゆる公理は、望ましくない可能性に対して扉を閉ざすものであり、その結果、意図的な非論理的決定を含むものである。ユークリッド幾何学の基礎にあってわれわれの関心を引く非論理は、次の2つの公理の間で演じられる。すなわち、互いに重なり合うものは等しい、および、全体は部分より大きい、という公理である。この不条理が分かるのは、例えば、われわれが幅のない長さという線の定義を適用し始めるときである。互いに等しい二直線を重ね合わせるならば、その結果として、二直線が平行である（そのことは、等しさが完全かつ絶対的なものでないか、または、重ね合わせが完全かつ絶対的なものでないかのいずれかを示している）か、または、二直線が合体して一直線になっているかのいずれかでなければならない。けれども、もしその合体してできた直線が、直線の1つよりも長かったり、または幅を獲得したりするならば、それはそれらの直線が等しくなかったからである。しかしながら、もしそれらの直線が絶対的に等しいならば、全体は部分より大きくないことになる。このことは異論の余地のない論理であるが、しかし、もしそれが真であるならば、計量幾何学はまさに全体は部分より大きいという公理に基礎をおいているのである以上、われわれは不条理のうちにいることになる。

計量幾何学においては、等しい2つの大きさは同一であるという考えを考慮に入れている。しかし、2つのものは決して同一ではない。なぜならば、そのことが意味するのは、それがただ1つのものであるということだからである。もし裁判官の前で殺人者を同定しなければならないならば、それが殺人を犯した人とちょうど同じような個人であるというだけでは不十分であり、この場合、彼の双子の兄弟が彼の身代わりになるわけにはいかない。等しいものはない、重複はないということは、ケーニヒスベルクの橋渡り\*22の経験の場合と同様に、確信できるものである。幾何学において、大きさの同一性と位置の同一性は、いかなる量的な考察とも相いれない。しかし、大きさの等しい無数の直線を、重ね合わせによって、それらの直線の1つより大きくない1直線にしてしまうということが、どうして可能であろうか。1直線を2つに分割して、その2つともが元の直線に等しいということなどは、考えられないというのに。

1直線をその位置から移動すると同時にその位置に留めておこならば、できるのは2直線ではなく、1つの面である、2直線が等しいということを証明するような重ね合わせは、2という性質を消さずに実行することはできない。つまり、もはや等号で結ぶことはできない。ただ1つの直線は何にも等しくない。このことが立証しているのは、ユークリッドの直線には厚みがないというこの定式の絶対的観念論が、いかなる現実性も持たないということである。

もし、やり方を現代化して、合同、ないしは大きさと形の同一性という定式を用い、空間における位置を除外するならば、重ね合わせによる証明はもはや不可能になる。

千の点を重ね合わせによって1つの点にすることができ、その点は、千の点のうちの1つに等しい。けれども、1つの点を、元の場所に留めつつ同時に移動することによって、点の数を増やすことはできない。そうすることによってできるのは、線であろう。しかし、立体は？ 2つの同一の立体は、想像の中でしか重ね合わせることができない。そうすることができるのは、2つの幻の立体だけであって、現実の立体ではない。この抽象性は、ユークリッド幾何学の力でもあ

り弱点でもある。トポロジーにおける抽象化の欠如は、弱点でしかない。

ゼロの千倍は、ゼロでしかない。そしてゼロからは何も引き出せない。ユークリッド幾何学の使用は、この意味において一方向的であり、不可逆的である。すなわち、向きづけられているのである。そして、シチュグラフィを別にすれば、すべてすべての幾何学は、同様に、向きづけられている。向きづけは線的な概念であり、向きづけられた直線は、半直線とも呼ばれる。なぜならば、そのような直線は1つの行程を意味しており、選ばれた向きは正の向きと呼ばれるからである。線上の任意の場所に選ばれたゼロ点は、始点として定められる。したがって、向きづけられた直線は、線そのものではなく、線と点の組合せである。向きづけられた平面とは、いわゆる正の回転の向きが選ばれている平面である。そして、その平面もまた、ある1点、すなわち、回転面と直角をなす回転軸の設定を可能にするような回転の中心に、結びついている。

空間が向きづけられるのは、空間の各軸の周りに回転の向き、いわゆる空間の正の向きが、結びついている場合である。このような装置は、計測と呼ばれるいっさいのものを可能にする。けれども、計測とはどういうことなのであろうか。それはこの件に関して最も奇妙なことである。長さであれ、あるいは幅、高さ、質量、時間であれ、またそれら基本概念から派生したどのような単位であれ、単位の計測というものはすべて、ゼロ点から無限へと向きづけられた等間隔に分けられた半線——空間の半次元——上に示された大きさの表示にあるのである。その半線は、直線である必要はなく、円周上にしるされていてもよい。大きさが数回転以上になるならば、その回転が、より大きい線なり円なりの大きさの間隔になる。このことこそが、ありとあらゆる計測が結局帰着する原理である。いかなる計測であれ、半線上の展開というこの限界から外れたことを——それが何であれ——説明しえない。

ユークリッド解析幾何学は、その古典的な説明では、半線の向きづけに従って展開される。まず、空間的次元のない点から始まり、点を前へ進めると、線になる。線をその長さに垂直な方向に進めると、面ができ、そして面について同様の操作をすると、立体ができる。しかしながら、点から線や面や立体を作るこのような向きづけられた運動、この運動それ自体は、空間的次元との関係において幾何学の考慮に入っていない。非論理的であることは明白である。重ね合わせの行為もまた、運動なしには不可能である。けれども、古典幾何学を築くのに必要なすべての運動を問題にし始めたら、もはや純粹に空間的な現象について語るができなくなる。とはいえ、それでも運動は最初からある。次のように自問することもできよう。時間はたった1つの次元しか持たないのであろうか、あるいは、起こることをもっと整合的に説明できるようにするために、将来は時間に少なくとも3つの次元を与えざるをえなくなるのではないだろうか。それはまだ分からない。しかし、確かなことが1つある。すなわち、時間は、計測器具を与えることで、半次元、ないしは向きづけられた長さの形に単純化されうる、ということである。それゆえ、科学的定義において持続の計測単位として「時間」と呼ばれるものそして、このような形式のもとで時間は相対性理論に関与するのであるが、正確には、向きづけないしは半線という観念の基礎ではないのかどうか、それを知ることがもう1つの問題である。

向きづけられた幾何学は、その向きづけゆえに、システムに内属している時間の諸概念を無視しうる。しかしながら、時間の役割、空間の3次元との関係における時間の現実的な役割を自覚

するために、われわれは、半線状の向きづけという道を捨て、統一的な位相同形性を確立しなければならない。

われわれは、次元という表現を用いようとする、すぐさまその正確な解釈と定義の問題に直面する。1つの次元は、始まりも終わりもなく、向きも方向もない1つの大きさ、1つの無限として、論理的に定義されうる。時間の次元における無限についても同様である。それは永遠である。空間の3次元のうちの1つの次元の大きさは、面を表わすが、それも、始まりも終わりもない大きさである。もし線的な計測システムが半線しか計測できないならば、2次元直交座標による計測システムは、面の4分の1に記入された図形しか空間的に計測できないし、また、3次元の計測情報は、球の8分の1に、すなわち同じ向きに向きづけられた3座標軸が90度の角度をなすところから始まる部分に、記入されているのだから、いっそう乏しいことになる。このような知識の永続的縮小を避けるために、われわれは、逆方向から取り組もう。

殺人事件の証人にとって、同定するという事は、容疑者をありうる唯一の者として規定することである。けれども、位相同形性は、われわれにさまざまな問題を提起する。それらは、簡単にいえば、次のような比喩で表現できる。今や、同定すべきは、もはや殺人者ではなく、哀れな犠牲者、乱暴者が故意に車で何度もひいて潰した哀れな犠牲者のほうである。犠牲者は、生前の面影とは悲劇的に異なる様相をしている。すべてはまだあるのだが、しかしひどく位置がずれている。彼はもはや同じではないが、しかしまさしく彼である。形が崩れていても、人は彼を同定できる。疑いない。このことが、位相同形実験の場であり、統一体の可変性なのである。

ここでシチュロジックの実験の場は相反する2つの傾向に分けられる。すなわち、遊戯的傾向と、分析的傾向である。芸術と網目織り（スピン）\*23と遊びの傾向と、科学と技術の傾向である。統一体における可変性の創造と、変数間の統一の探求である。お分かりのように、われらが殺人者は前者の道を選んだが、同定者たちは後者の道をとらなければならない。後者の道は領域を位置解析学ないしはトポロジーに限定するものである。シチュロジックは、その展開において、これら両傾向に決定的な推進力を与えるだろう。今1度、ガルトンの装置が表している網の目をもって、一例とできよう。遊び道具としては、その機械は、終了合図の出たピンボール・マシンであり、パリの大半のビストロで見かけられる。また、計算された可変性の可能性としては、それはあらゆる電話網のモデルである。

しかし、一般的で基本的なシチュロジックにおいては、創造的な面が分析的な面に先行する。シチュアシオニストは現存するすべての条件を潰す者になるであろう。それゆえわれわれは、われわれの証明を始めるにあたって、われらが犯罪者の方法を採用することにしよう。けれども、そのやり方が血みどろのドラマになるのを避けるために、それをユークリッドのように完全に想像上の抽象的な世界の中に引き入れることにする。

われわれは、ある物体に、完全な位相同形の性質、絶対的で実際には存在しない性質を与えることから始めるが、それはユークリッドが点に空間的な大きさの不在を与えたのと同様である。われわれは、完全に球形で正確な直径を持つボールに、絶対的な柔軟性を付与する。そのボールは、決して引きちぎれたり穴があいたりすることなく、あらゆる仕方で変形できる。完全な3次元対称性を持つこの物体を前にして、われわれの目的は明白である。われわれは、その物体

をすっかり平たくして、2次元の面に変形し、そして、それらの位相同形的な同等性の数値を見つけようとしているのである。その球の高さを、最後はゼロになるように等しい10段階に縮小しよう。そして、球が次第に面に変形されていくのにつれて、球の3つの直径のうちの1つが減少していくことが認められるが、その減少に対応して、他の2つの直径が増大する比率を計算しよう。最後の数値は、それに先立つ9つの数値から導き出せよう。当然ながら、無限に達することはできない。なぜならば、5倍の大きさのボールで同じやり方をすれば、少なくとも5倍の大きさの面ができるはずであり、大きさの違いを計測できる2つの無限などというものは、論理を超えているからである（ただしルメートルが永遠について語る際の彼の論理は別であるが）。この実験に関する実際の計算作業は、数学者たちに任せる——彼らにそれよりましな仕事は何もないならば。

まだ終わりではない。この厚さのない巨大なクレープ内にひとつの対角線を選び、先の実験とまったく同じ仕方で、この面を長く伸ばして、厚さのない線になるようにしよう。その際、先と同様に、計算を行なう。そのようにして、位相同形的な同等性が、3次元、2次元、1次元の物体の間の数値として表現されるのであるが、人々は皆、抗議し始めるかもしれない。最も頭の良い人々は、ユークリッドは点から始めたのだから、と言って、続きを辛抱強く待つだろう。どのようにして、この途方もない直線をたった1つの点に縮小できるだろうか。私には、球に戻ることはできない。かりにシチュロギーがただ単に空間的で位置的な現象にすぎないとしたら、その通りなのだが。

アインシュタインの説明によれば、もし線が光の速度に達しうるならば、線は進行方向に縮んで、長さとしては完全に消えるに至り、他方、その速度において時計は完全に止まるであろう。それが、われわれのやりたいことである。そうすれば、ことはすべて解決される。この派手なやり方の唯一不都合な点は、些細なことではあるが、見えないということである。というのは、私は宇宙を横切って飛んでいくこの点を2度と手に入れることができないからである。かりに空間を横切るこの運動をその場での自転運動に変えることができるとしたら、私は再び、程度の差はあれ、この点を確保できるのであるが。

アインシュタインは、「空間と時間を分けて考えると、それらは空虚な影になってしまう。両者の結合だけが、現実を表現する」と言明している。まさにこの考察に基づいて、私は別のところで次のように明言した。ユークリッドの点は、空間的次元を持たず、しかし、空間内にある以止は何らかの次元を表さなければならないのだから、少なくとも、空間に導入された時間の次元を表している。持続なき点を空間内に固定することが不可能であるだけに、なおさらそうである。持続なくして、位置はない。

しかし、その点が時間の性質を持つためには、その点は運動の性質を持たなければならないし、幾何学的な点は線をなすことなく空間内を移動できないのであるから、その運動は自転、すなわち自分自身の周りを回る回転でなければならない。その運動が連続的であるとしても、その運動は軸も空間的な方向も持ちえない。そのうえ、その渦巻きはどんな小さな空間を占めることもない。点についてのこの定義は、ユークリッドの定義よりも豊かで明確なものであっても、やはり抽象的であることにかわりない。しかしながら、ヘロン\*24というギリシャの幾何学者がいて、

ガウスは彼からヒントをえて、直線とは、その直線を構成する諸々の点のいかなる移動もなしに、軸として自分自身の周りを回る線であると定義したこと、そしてまた、それが直線に関してこれまでに言われた中で唯一の明確なことだと多くの人々が認めているということ、私が知ってからは、私は、自分が正しい道を進んでいると感じている。

しかし、軸は1つの向きにしか自伝できない。軸を反対の向きに自転させるためには、一旦止めなければならない。それに対して、自転している点は、自転軸の連続的な変化によって、反対の向きの自転に、またどんな向きの自転にも、導くことができる。したがって、直線は、次のように説明できる。もし任意の自転している2点をつなぐならば、それらの点は同じ向きに同じ速度で回転せざるをえない。速いほうは減速し、遅いほうは加速することによって。

このようにして、線のすべての点は、空間的次元の中に存在を獲得したが、それは、運動の自由の喪失に相応している。運動は空間の中で向きづけられたのである。

直線についてのこのような向きづけられた明確な定義をいつまでも抱え込んでいたくないならば、急いで柔軟な定義を考案する必要がある。柔軟な定義というものを理解するためには、次のことを念頭に置く必要がある。柔軟な幾何学は、各次元の無限という性質を強調するのではなく、一般的な時空間における存在という性質を強調する。時空間は、有限でも無限でもよいが、しかし、大きさについて研究されるすべての物体に対して、第1次的なのである。各立体、各面、各線分、あるいは時間の各部分は、普遍的な時空間の全体の一部である、あるいは、その全体から抽出されたものである。例えば、ユークリッドの等しさの幾何学における線分の分析においては、直線の「無限」という性質が捨象される。一部分が切り取られ、残りは忘れられる。統一的な幾何学においては、それは不可能である。直線は、点の途切れることのない列ではない。なぜならば、諸々の点は、1つの直線を作り上げるために何かを失ったからである。線分においては、線の両端から観察されうる二つの点しかない。しかし、線分には2つのゼロ点があるのであって、半直線のようにただ1つのゼロ点があるのではないということ、どのように説明できるだろうか。唯一の可能な説明とは、2つのゼロ端を持つ線分は、ゼロ点を交差させて相反する方向に向かう重なり合った2つの半直線から構成される、というものである。そういうわけで、線分は、行き帰りという二重の行程を持ち、また、対極になった、ないしは対位法に置かれた、両端間の距離の2倍の長さを持つ線である。このことは、柔軟な、ないしは弁証法的な、幾何学にとって、基礎である。この観点からすると、定められた各立体は、全体的な立体ないしは普遍的な空間の中で、面によつて分割された立体である。同様に、定められた各面は、線によって区別された普遍的な面の断片である。また、各線分は、点によって規定された線的な断片である。そして、各点は、時間の中でその持続によって規定された瞬間である。

立体を規定する特有の面、すなわち立体の表面は、容器とか、外形などと呼ばれる。そしてその機能においては、2つの立体の分離として、内部と外部の対置という性質を持つ。同様に、線による表面の分離は、前と後を対置し、線上の点は、行程の正の向きと負の向きを区別する。これらの表示がこのように意味を持つのは、2つの次元システム間の関係の中でのみ、座標の同一の組合せの中でのみである。問題がいつそう複雑になるのは、相互に関連した複数の座標系で遊び始める場合である。それは射影幾何学と呼ばれ、その最もよく知られている例は、中心消失遠

近法である。

射影のシステムだけでなく、対象化一般のシステムをもよく理解するためには、座標系〔＝座標システム〕の二分化がどのように作り出されているか、また、最初の第1次的なシステムとはどれかを見る必要がある。あらゆる観察者に対して第1次的なシステムとは、観察者自身に内属する座標系であり、観察者の主観的な座標である。ふつう、人々はこのような観察の基本的前提条件に無関心である。個人の座標は、前、後、上、下、左、右と名づけられている。そしてそれは、科学における向きづけだけでなく、本源的なやり方で倫理における向きづけ、すなわち社会的な向きづけ〔＝オリエンテーション、進路決定〕にとっても、重大な役割を演じている。そこにおいて個人は、左に引かれ次いで右に引かれ、前に傾けられ、進歩によって常に前に傾けられ、後に押され、上昇と高い経歴の方へ急かされ、最後には地面の下に運ばれる。右\*25の方向は、最小努力の方向、直線の方向、正しいないしは合理的といわれる方向である。反対に、左は、本来、遊びと網目織り（スピン）と最大努力の方向である。しかし、政治左翼が最小努力の方法に従って公正さを整備する方向になるたびに、そのような対立は緊張を欠くことになる。しかし、われわれの対立観においては、最小努力の方向は落下の線を示すのだから、上昇を表すのは、左の方向、遊びの方向であるはずである。そのことこそ、私が弁証法的逆転を用いて証明しようとしたことである。右という語（ドイツ語 recht、英語 right）は、スカンジナビア諸語では上方への上昇（hogre）を意味するが、それは他のところでは左を象徴している。ヨーロッパにおける社会的な向きづけやその語彙における混乱は、そのおかげで、よりいっそう豊かで矛盾したものになっている。これらのことは、純粹に客観的な考察であり、いかなる予定された結論も含まないが、しかし、最も基本的な宗教的諸観念（天と地獄）にさえ影響を与えたものである。

一座標系の距離的な段階付けは、現実には、等距離の平行座標線網を作ることを可能にする。この格子縞化は、ゼロ点と正の向きを、座標系内のどこでも好きなところに、変えたり選んだりすることを可能にする。線についてもまた3次元座標系についても、それは同じことである。

ときに投影が必要となるのは、観察される物体の座標系が、観察と計測にとって基礎となる座標系に対してずれているからである。そんなわけで、投影幾何学は、2ないし複数の座標系の間関係の規則を、まるで2ないし複数の空間があるかのように表示する。そのようにして、同一の空間を投影によって複数に増やすことができる。しかしそれは、時間の次元を通してしか正当化されない。

半直線、面の4分の1、立体の8分の1で働く正の幾何学は、しかしながら、純粹に空間的な別の遊びを可能にする。2次元座標の2つの負の半直線が作る直角を移動して、正の角と向かい合わせに置き、例えば正方形を作ることができる。この操作は、円をその細部の1つである正方形によって定義できないにもかかわらず、なぜ正方形の説明が円周と円の対角線の比のうちに見いだしうるのかを説明してくれる。並置による正方形のこの定義は、われわれによる線の弁証法的定義に付け加わり、そして、常に円積問題\*26にぶつかっている幾何学よりもシチュロジーのほうがどうして直接的なのかを示してくれる。

われわれはここに、シチュロジーが幾何学的思考に導入できるかもしれないが大変動の結果の

いくつかを素描した。しかし、この分野を知る者にとっては明らかなことであるが、われわれの物理学的、力学的概念に関しても、結果はそれに劣らず大きなものであろう。アインシュタインの定義から理解できるように、われわれが持っている光の観念はいかなる空間的次元にも属さない。とはいえ、光を物質でないと考えるのは誤りであろう。4元素〔地、水、空気、火〕という古代の神秘的な観念さえ再考の余地がある。それらが絶対的な現象として存在しないことをわれわれは知っている。とはいえ、現代科学が、固体、液体、空気または気体および光とも言われる物質の状態の区別を考察しようとしするのは不思議である。角氷が突然溶けてテーブルの表面に広がるのを見ると、液体の状態は、空間的次元の1つを失って代わりに流れという自由をえたことを表わしており、液体は2次元の物質であると結論できるかもしれない。そして、水の表面張力の定常性は、物理学において、光の速度の定数と同じくらい重要であるように思われる。このことから予想する論理的な結論とは、気体は1次元しか持っておらず、その埋め合わせに運動の自由な戯れをえているということである。そして、もっと少ない次元を持つ何かの例を探す必要があるならば、モーリス・ルメートルとその仲間を思い浮かべたえ。

アスガー・ヨルン

\*1：面は単側か両側かのいずれかである 表裏がつけられる面を「両側」、そうでない面を「単側」という。だいたい面は両側であるが、メビウスの帯は単側である。なお、この引用文の後、ヨルンは「論理的に言って、1つの面は単側でしかありえない」と述べているが、それについては、ヨルンに概念上の混乱があるのではないかと思われる。

\*2：変換的（transformatif）英話の形容詞 transformative からの借用と思われる。

\*3：ルネ・ユイグ（1906－） フランスの美術史家。数々の著作を通して、美術的な着想が、社会、哲学的・宗教的思想、生活様式に依拠することを示そうと試みる。『芸術と人間』（1958－61年）はその集大成。1950年コレージュ・ド・フランス正教授。1960年アカデミー・フランセーズ会員。

\*4：ハルシュタット様式 ヨーロッパ初期鉄器時代の主流をなす文化様式。オーストリアのハルシュタット墓地遺跡に代表され、それにちなむ命名。

\*5：ラ・テーヌ様式 紀元前5世紀から紀元前1世紀頃のヨーロッパの鉄器時代の文化様式。ハルシュタット様式に続くもので、ケルト人によるものとされる。剣の柄頭や留め針にある独特の曲線文がこの様式の特徴の1つ。スイスのラ・テーヌ遺跡にちなむ命名。

\*6：ドーリア人 古代ギリシア民族の、一分派。前1200年ごろ、ペロポネソス半島を中心とした、ミュケナイ文明世界に侵入し、古代ギリシアに鉄器をもたらしたことで知られる。

\*7：ヴァルター・リーツマン（1880－1959年） ドイツの数学者、数学教育学者。

\*8：『フィネガンズ・ウェイク』 ジェイムス・ジョイスの20世紀最大の実験的小説。「疾風怒涛 Sturm und drang」は、シュレーゲルらの19世紀初頭のドイツロマン主義に先駆けて、ゲーテらが起こした18世紀の文学運動。

\*9：位置解析学（analysis situs）「トポロジー」の旧称で、20世紀初頭までこの言葉が使われていた。ライプニッツが1679年に「代数学が量を扱うのに対し、直接に幾何学的な位置を扱う解析学の1つの分野が必要であると思う」と述べ、この分野を位置解析学（analysis situs）と名付けた。しかしライプニッツは具体的な問題には触れなかった。この分野におけるオイラーらの先駆的な業績の後、位相幾何学の実質的な創始者であるポアンカレ（1854－1912年）も、この数学を位置解析学（analysis situs）と呼んでいた。この言葉に代わって、「トポロジー」という語(ドイツ語での初出は1847年)が普及したのは、S・レフシェッツの著書《Topology》（1930年）によるところが大きい。

\*10：『霊媒とシャーマン』 ハンス・フィンダイゼンの著書（シュトゥットガルト、1957年）で、邦訳は、和田完訳、冬樹社、1977年。なお、邦訳書の「訳者あとがき」によれば、フィンダイゼンは、深層心理学・超心理学に造詣の深いドイツの学者のようである。

\*11：ラップ人 ノルウェー、フィンランド、スウェーデンにまたがり、海岸、山地、森林に住む民族。現在の総人口は約3万人。周辺諸民族からはラップと呼ばれ、ノルウェーではフィンと呼ばれるが、自らはサーメ（Same）と名乗り、漁獵、遊牧などで生活している。

\*12：マックス・ブロート（1884－1968年） プラハ生まれのユダヤ人で、ドイツ語作家。フランツ・カフカの友人で、カフカ伝を著した（1937年）。

\*13：ティコ・ブラーエ（1546－1601年） デンマークの天文学者。観測実体に合わない宇宙構造論を排し、フヴェン島に設けた観測所で、生涯、規則的な天文・気象観測を続けた。望遠鏡なしで、彗星の発見、惑星・恒星の位置測定など驚嘆すべき成果を上げた。ブラーエの死後に残された太陽及び惑星の膨大な観測資料から弟子のケプラーは近代天文学の基礎と言われるケプラーの法則を編み出した。

\*14：ヨハネス・ケプラー（1517－1630年）ドイツの天文学者。ティコ・ブラーエの残した観測記録に統計学的計算と幾何学を適用して、火星の公転軌道を決定し、さらに他の惑星の楕円軌道を証明。そこから、惑星は太陽を焦点とする楕円軌道を描いて公転するなどの、ケプラーの三法則を発見した。

\*15：オーレ・レーマー（1644－1710年）デンマークの天文学者。ティコ・ブラーエ天文観測所で助手を務め、のちにパリの新王立観測所などで天文観測を行い、デンマークに戻ってからは、コペンハーゲン大学天文学教授として教える。木星の衛星の食により光の速度を測定した。

\*16：ハンス・クリスチアン・エルステット（1777－1851年）デンマークの物理学者。電流が磁力に与える影響を研究し、電磁気学発展の端緒を作った。

\*17：カール・フォン・リンネ（1707－78年）スウェーデンの植物学者。オランダのライデン市で『自然分類』を出版、全植物を24の綱に分けた分類法を作り、生物を属名と種名の二語で表す二名法を確立。植物分類学に不朽の業績を残した。

\*18：スウェーデンボリ（1688－1772年）スウェーデンの哲学者・神学者。ストックホルムの貴族出身でウプラサ大学で学んだ後、自然哲学者、科学者として活躍。この時、鉱山技師として自ら採掘を行った。後年は、靈感を受け、神霊学研究に没頭し、神秘論に基づく新宗教の布教に努めた。主著として『天界の神秘』（1749－56年）、『キリスト教の神秘』（71年）など。

\*19：ノヴァーリス（本名フリードリッヒ・フォン・ハルデンベルク 1772－1801年）ドイツ・ロマン派の詩人。1791年、ライプツヒでフリードリッヒ・シュピーゲルと知り合い、ロマン主義の活動に参加。同時に法律学、鉱山学を学び、鉱山技師として働いた。代表作に『夜の讃歌』（1880年発表）、『青い花』（死後発表）など。

\*20：『新しい科学的精神』 1934年刊。なお、関根克彦訳で1976年に中央公論社から邦訳が出ており、引用部分（邦訳書46ページ）の後半に関して同氏が付けられた訳注の一部をここに引用させていただく。「虚の半径を持つ球面上の幾何学すなわちロバチェフスキーとボリアイの非ユークリッド幾何学の場合、三角形の内角の和は三角形の面積が大きくなればなるほど、二直角 $\pi$ からのずれが大きくなって減少していく。ガウスは（中略）3つの山の頂上を結ぶ三角形を測量して、内角の和の減少が見られるかどうかを知ろうとしたが、その結果は否定的であった。（原文改行）なお、バシュラールはここで *diminution de surface*（面積の減少）と書いているが、意を汲んで「内角の和の減少」と訳した。いうまでもなく、三角形が大きくなればなるほど（正確に言うと三角形の3つの高さのいずれもが大きくなれば）、三角形の面積は大きく

なる。」（同書228ページ。ただし本記事の訳では原文通りに訳した。）コブラの自発性に基づく形態の実験やそのためのプリミティヴィズムや民衆芸術への関心には、バシュラルの「物質的想像力」の影響が大きく、雑誌『コブラ』にはバシュラルの名が数多く出てくる。ヨルンは1960年、「ガストン・バシュラルの肖像」という絵を描いている。

\*21：『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』第1号の図記事 「シチュアシオニストとオートメーション」に挿入された図のこと。

\*22：ケーニヒスベルクの橋渡り 1963年にオイラーが提出した一筆書きの問題。オイラーは、「次のようなのが、おそらくライプニッツの位置解析学（analysis situs）であろう」と前置きして、ケーニヒスベルク（現在ロシア最西部の都市。ソ連時代はカリーニングラードと呼ばれた）にある7つの橋を全部1回だけしか渡らないように歩くことができるどうかを検討した（答は「できない」）。これが一筆書き問題の始まりであり、一筆書き問題は、線状グラフの位相幾何学の一例である。

\*23：網目織り 原綴りは spinn で、外来語であることは確かであるが、実を言うと、何語なのか確定できていない。しかしノルウェー語にはこの綴りの語があり、2種類のノルウェー語＝英語辞典と1種類のノルウェー語＝フランス語辞典の記述をざっとまとめると、「紡績糸、織物、網（目）、クモの巣」くらいの意味である。これは、本記事が（リーツマンやフィンダイゼンを引用しつつ）北欧の「曲線交錯模様」「結び目」「（古代からの）織工」に「シチュロジー的思考」を見いだしている部分に通じるとも考えられるので、一応暫定的に、ノルウェー語と見なし意を汲んで「網目織り」と訳した。ちなみに、スウェーデン語にもこの綴りの語があり、「回転、紡績（英語 spin, spinning）」という意味のようである。なお、デンマーク語（アスガー・ヨルンの母語）、ドイツ語、オランダ語には、この綴りの語はないようである。

\*24：ヘロン（2世紀） ギリシアの数学者・物理学者。アレクサンドリアで活躍し、幾何学と物理学の書を多数著した。

\*25：右（droite） フランス語の droite には、「右」「直線」の意味があり、また、形容詞 droit（女性形 droite）には、「右の」「まっすぐな」「正しい」といった意味がある。ここでの記述はそのような多義性に基いている。

\*26：円積問題 円と面積の等しい正方形を作図する問題。実際には作図不可能である。また、比喩的に、「解決できない問題」を意味する表現でもある。

権力の座にある芸術の破綻は、もっとも著名な鑑定家たちの目にさえ、日増しに明白になっている。そして彼らは、絶望にくれて、彼らが発見している芸術の破綻と、あらゆる芸術的実践の形而上学的破綻とを混同している。かくして彼らは、まだこれからなすべき現代的実験の意味をねじ曲げてしまう。そもそも、そのようにアンダーグラウンドであるよう強いられることについては、彼ら免状付の鑑定家たちに大いに責任があるのである。

たとえばシャルル・エスティエンヌ\*1は、自分のこけおどし的な現代芸術を捨てたときに、難破船から何かを救い出そうとして、「タシスム\*2」に手を出した。当然、彼は、偽りの現代化を絶えず追及しているすべての人々と付き合っていた。しかし彼らは皆、真のタシスムは、彼らがそのラベルを考案する以前に、すでに行き着くところまで成し遂げられていたという事実を隠していた。タシスムの手法を見つけた人々はすでに死んでおり、彼らの模倣者たちの作品がすでにショーウィンドウに並んでいた。そしてもちろん、あらゆる現代美術館にも並んでおり、それはヴォルス\*3とポロック\*4がそこに受け入れられる以前のことである。

クルト・シュヴァイヒャーの最近の批評は、幸いにも、よりラディカルである。彼はタシスムさえ捨てる。彼の著書『芸術は死んだ、芸術万歳』（特に彼のテーゼの第4点を参照のこと）には、シチュアシオニストの立場に近くて好感の持てることが数多くある。けれども不幸なことに、それらすべてははなはだ混乱したままである。クルト・シュヴァイヒャーは、否定的なもの役割を理解せず、現代芸術におけるその役割を認めない。彼は、すべての問題の奥底にある単純さを理解せず、その偽りの複雑さを考察している。また彼は、新しい全体を、つまり、現代芸術の危機の単純さの自覚から展開されるより上位の複雑さを、よく理解していない。シュバイヒャーが自分で掲載した図版――それらは、たまたま裏方作業の屑の中から得られた絵画（イマージュ）である――を一方向的に非難するとき、彼はそのような物体が芸術になるのは、絵画（イマージュ）破壊の芸術家によって前もって実際に実現された実験の後であると言う自明の事実を無視している。また、それらの物体のうちから彼が行った選択は、何よりもまず、彼の個人的な趣味と、ある種の完成した芸術段階を識別する彼独自の流儀とによって規定されている。この場合、彼の趣味は、月並みなアンフォルメル絵画のカリカチュアにまで至っている。

シュヴァイヒャーの根本的な誤りは、あまりにも多くの資金が現代芸術に投資されたという思い込みにある。――実際には、あまりにも少なすぎるのに。

膨大な数のえせ現代芸術家が、芸術家として世に出るために、自分のブルジョワ的な仕事（彼らはまず最初に弁護士、広告代理業者、警察官である）から得ている資産を人為的に投資する。この過程は特別な経済階層を形成し、それは新たな順応主義となって現れる。それこそまさしく、シュヴァイヒャーが正当に告発している非-美学的なアカデミズムである。クルト・シュヴァイヒャーの考えの混乱は、彼の階層の実際の混乱を反映しているにすぎない。人々はそこでは、競争的な自由企業精神のもとに、目的がそれぞれ異なる数多くの「前衛潮流」に援助するほうがいいと思い込む。全く、宝くじを確実に当てたくてくじ券をめいっぱいストックする愚か者さながらである。しかしながら、ある時点で別の芸術条件を創造するために可能な方向は1つしか

ない。それに、その方向に進む流派をすべての中から見分けるための簡単な基準がある。それは唯一、金で買収できない流派である。

十分に情報に明るい人は、たとえ自ら進んで口にしなくても、それが現在シチュアシオニスト・インターナショナルであることを、すでにたいへんよく知っている。

ローター・フィッシャー\*5、ハイムラッド・プレム、  
ヘルムート・シュトルム、ハンス＝ペーター・ツィンマー

この記事は、ドイツのシチュアシオニストの雑誌『シュプール』第2号の論説として発表されたもので、クルト・シュヴァイヒャーの著書『芸術は死んだ、芸術万歳 (Die Kunst ist tot, es lebe die Kunst)』への返答である。

\*1: シャルル・エスティエンヌ (1908-66年) 『コンバ』紙、『フランス・オブセヴァトゥール』誌などで活躍した美術評論家。戦後の抽象表現美術とシュルレアリスムの接近に注目し、多くの論文を書いた。ブルトンらと協力した展覧会も企画している。

\*2: タシスム フランス語の「しみ (tache)」に由来し、広義には抽象表現芸術全般を、狭義には1950年代のアンフォルメルOp Artの抽象表現を指す。

\*3: ヴォルス (本名ウォルフガング・シュルツェ 1913-51年) ベルリン生まれの画家、写真家。ドレスデンで写真の勉強をした後、1932年、デッサウのバウハウスでクレーの授業を受ける。その後パリに移り、写真家として仕事をしながらシュルレアリストと出会い、墨やインクを用いた幻想的なデッサンや絵画を描くようになる。39年から40年までドイツ国民という理由で収容された後、その絵は次第にミクロの世界の細胞やバクテリアを思わせる形態の非具象的なものに移っていく。この形態の消失への動きは戦後さらに激しくなり、ヴォルスは50年代のアンフォルメルOp Artの先駆者とされている。

\*4: ジャクソン・ポロック (1912-56年) アメリカの画家。抽象表現主義の代表者の1人。アメリカ・インディアンの砂絵に想を得て、地面に平らに置いた大きなキャンバスの中で絵の具を垂らして描く「アクション・ペインティング」で有名。

\*5: ローター・フィッシャー SIドイツセクションのメンバー。1962年2月に他の〈シュプール〉派のメンバーとともにSIを除名。

## ポトラッチ

あなたはたびたびポトラッチを受け取ります。レトリスト・インターナショナルはそこで毎週の問題を取り扱うでしょう。ポトラッチは世界で最もアンガジェ〔＝政治・社会参加〕している刊行物です。私たちは新しい文明の自覚的かつ集団的な創設に励んでいます。

編集部

## 海の水全部でも……できないだろう

12月1日、マルセル・M（女、16歳）は、愛人と心中しようとする。2人が救助された後、その男（成人、既婚）は、「嫌々ながら」道連れにされたのだと、厚かましくも述べ立てる。マルセルは少年裁判所に召喚される。少年裁判所は「道徳的責任のうちの彼女の分担分を見積もる」必要があるのだ。フランスでは、未成年は一般に宗教的な牢獄に監禁され、そこで青春を過ごさせられる。

2月5日マドリードで、CNT\*1を再建しようとした18人のアナーキストが軍事的反逆のかどで有罪を言い渡される。

フランコの追従者であり銃殺執行者である人々が、陰鬱な「西洋文明」を守っている。

4月の週刊誌は、彩りを添えるために、ケニアからの写真を何枚か載せている。死刑の宣告を聞く反逆者「中国将軍」。イギリス王国空軍の飛行機の胴体、そこに描かれた34の人影は、地上で機銃掃射を浴びせられた同数の現地人を表わしている。

撃ち殺された黒人の名はマウ＝マウ\*2という。

6月1日、滑稽な『フィガロ』紙上で、モーリヤック\*3は、フランソワーズ・サガン\*4が、——帝国が水泡に帰そうというときに——例えばモロッコ国民の心をわれわれにつなぎ留めている非常にフランス的な価値のいくつかをちっとも説き勧めないとして非難している（当然ながら、われわれには、この不作の1954年の小説や女流作家たちを読むために無駄にできる時間は1分たりともない。しかし、モーリヤックのような人が、18歳の少女を話題にするのは卑狼である）。

ネオーシュルレアリスムの雑誌『メディウム』\*5——今まで無害であった——の最新号は、挑発に転じる。ファシストのジョルジュ・スーレが、アベリオ\*6という偽名で、目次に突如現われる。ジェラルド・ルグラン\*7は、パリの北アフリカ人労働者を攻撃する。

真の問題に対する恐怖と、時代遅れの知的流行に対する媚びへつらいは、こうして、文章のプロフェッショナルたちを結集させる。その文章が模範的なものであれ、あるいはカミュのように反抗的なものであれ、無差別に。

それらの人々に欠けているもの、それは〈恐怖（テロル）〉だ。

ギー＝エルネスト・ドゥボール

## 新しい神話

最後のラマ僧たちは死んだが、イヴィッチは切れ長の〔東洋人特有の〕目をしている。イヴィッチの子どもたちは誰になるだろうか。

今からイヴィッチは待っている、世界のどこでも。

アンドレ＝フランク・コノール\*8

## やつらにやつらのチューインガムを飲み込ませること

今一度、フォスター・ロケット・ダレス\*9は諸君に武装蜂起を呼びかける。グアテマラは「ユナイテッド・フルーツ」社を収用した。それは、1944年から、ゴムとその国の住民を搾取して、なくてはならないチューインガムを得ていたトラストである。

反共産主義軍の神は、次のような言葉で考えを述べた。「それら悪の勢力を排除するために、平和的で集団的な行動に訴える必要がある。」

その行動は進行中である。メイド・イン・USAの武器がすでに反動的なホンジュラスとニカラグアに引き渡された。大量のドルの力でいくつもの陰謀が起こされた。アメリカは再び十字軍に出かける。細部に至るまで再び、共和制スペインを壊滅させた方法が採られている。

しかしボゴタでは、学生が戦車の砲火のもとでデモを行なっている。そしてグアテマラの革命運動は、この大陸における唯一の自由の可能性として現れている。

J・アルベンス・グスマン\*10政権は労働者を武装させる必要がある。経済的制裁に対して、また帝国主義の攻撃に対しては、中央アメリカの隷属した国々で起こされる内戦によって、またヨーロッパの志願兵へのアピールによって、応えなければならない。

パリ、1954年6月16日

レトリスト・インターナショナルのために

アンドレ＝フランク・コノール、ムハンマド・ダフ

ギー＝エルネスト・ドゥボール、ジャック・フィヨン\*11

## 今週の心理地理学的遊び

あなたが求めるものに依じて、地方を選び、人口密度の高いまたは低い町を選び、にぎやかなまたは淋しい通りを選びなさい。家を建てなさい。その家に家具を入れなさい。家の装飾や家の周囲を最大限に活用しなさい。季節と時間を選びなさい。最も適した人々を招き、ふさわしいレコードとアルコールを揃えなさい。照明や会話は、もちろん、外の気候やあなたの思い出と同じように、その場にふさわしいものでなくてはならないでしょう。

あなたの計算に間違いがなければ、答はあなたにとって満足のいくものになるはずです。（結果を編集部までお知らせください。）

## 暗い小路\*12（ザ・ダーク・パッセージ）

モリエール小路（カンカンポワ通り、82番地）のダブル・ドゥート〔＝二重の疑惑〕画廊で、影響波及的\*13（アンフリュアンシエル）メタグラフィーの展覧会が、成果を上げて続けられている。レトリズム事務所は今や防弾鉄格子で守られている。

## 新たな任用

ムハンマド・ダフは、オルレアンヴィル\*14のレトリスト・グループに、至急パリに来て言う通りに動いてくれる決意の固い男を5人指名するよう求めている。

ムハンマド・ダフ

編集長 アンドレ＝フランク・コノール  
パリ六区、デュゲ＝トゥルアン街15番地

\*1：CNT 全国労働組合（Confederación Nacional del Trabajo）1910年に結成のスペインの労働組合。アナルコ・サンジカリズムを標榜。1945－60年の間、分裂していた。

\*2：マウ＝マウ ケニアのキクユ人の秘密結社。1952年、白人植民者への武装叛乱を開始し、爆発的な蜂起となったが、54年4月、イギリス人植民地政府はマウ＝マウ団掃討のための戦時評議会を設け、アンビル作戦と呼ばれる大規模な弾圧に乗り出し、60年までには叛乱を押さえ込んだ。

\*3：モーリヤック（1885－1970年）フランスのカトリックの作家。代表作に『テレーズ

・デスケール』(1927年)。1952年ノーベル文学賞受賞。

\*4: フランソワーズ・サガン フランスの女流作家。1954年、18歳のときに『悲しみよこんにちは』でデビュー(参照)。なお、ドルーエは、その注では、ヴィクトル・ユゴーの偏愛した女優ジュリエット・ドルーエかもしれないと書いたが、1950年代の天才少女ミヌー・ドルーエであろう。この文学少女は当時多くの詩集を出版して天才少女と騒がれたが、1955年11月、母親がゴーストライターなのではないかとの疑いを持ったジャーナリストの前で、実際に詩を作り、天才少女であることを証明した。

\*5: 『メディウム』誌 1952年から55年まで出されたシュルレアリストの雑誌。ジャン・シュステルの編集で、第1次は52年8月から53年6月にかけて8号、第2次は53年11月から55年1月まで4号が出された。ここで触れられている「最新号」とは54年5月発行の第3号。

\*6: レーモン・アベリオ(本名ジョルジュ・スーレ 1907-) フランスの作家。政治に気をそそられて、社会主義労働者インターナショナルからヴィシー政権(第二次大戦中の親独政権)支持へと至った。彼はその成り行きを秘教の影響と分析している。

\*7: ジェラルド・ルグラン(1927-) 戦後のシュルレアリスト。ブルトンと共著で『魔術的芸術』(1957年)を著したことで有名。参照。

\*8: アンドレ=フランク・コノール レトリスト・インターナショナルの活動家として『ポトラッチ』第1号から第8号までの編集長を務めたが、1954年「新(ネオ)仏教徒、福音主義者、神秘論者という嫌疑」でLIを除名。『ポトラッチ』第9-10-11合併号の記事と第12号のコノールの自己批判の手紙を参照。LI以降の著作に、『癌と科学のテロリズム』(1977年)など。

\*9: フォスター・ロケット・ダレス ジョン・フォスター・ダレス(1888-1959年)を指すと思われる。アメリカの政治家。トルーマン大統領の顧問となり、対日講和条約(1951年)を成立に導く。1953年共和党のアイゼンハワー大統領の国務長官となり、強硬な反共十字軍的外交政策を展開。1954年1月、「大量報復戦略」政策を打ち出し、これはアメリカの核抑止戦略の原型となる。また、中ソを包囲する反共軍事同盟網の形成を企図し、1954年SEATO(東南アジア条約機構)を成立させて中国を包囲する反共軍事同盟網を実現した。その過程で、インドシナにおけるフランス軍の敗北を阻止するために米・英・仏などの統一行動による軍事介入を提唱するなど、「戦争瀬戸際」政策を推進した。

\*10: ハコボ・アルベンス・グスマン(1913-71年) グアテマラの軍人、政治家。194

4年、陸軍大尉のときウビコ独裁打倒闘争に参加。打倒後、改革派のアルバロ政権下で国防大臣を務める。50年、選挙で大統領に選ばれる。労働者、農民、知識人、軍部、共産党の支持のもとで国内の構造改革と経済の自立化をめざし、52年に本格的な土地改革を実施。しかし同国に巨大な利権を持つ米国企業ユナイテッド・フルーツ社（現ユナイテッド・ブランズ社）の所有地16万ヘクタールの収用をめぐる米国政府と対立し、54年6月、ホンジュラスでアメリカCIAの支援を受けて反革命軍を組織していたカスティリョ・アルマス大佐の侵攻に直面して、同政権は崩壊した。その後メキシコに亡命し、その地で死亡。

\*11：ジャック・フィヨン LIのメンバー。1955年10月『ポトラッチ』第23号から編集長を務めるが、1957年1月、シチュアシオニスト・インターナショナル結成直前に、ジル・ヴォルマンとともにLIを除名。『裸の唇』誌第7号（1955年12月）に心理地理学的なパリの記述「パリの合理的地図」が掲載されている。

\*12：暗い小路 原文の見出し〈THE DARK PASSAGE〉は、1947年にデルマー・ディヴズ監督、ハンフリー・ボガート主演で製作されたアメリカ映画の題名を転用したと思われる。

\*13：影響波及的（influentiel）英語の形容詞influential「影響を及ぼす」からの借用と思われる。

\*14：オルレアンヴィル アルジェリアの都市シェリフの旧称。オルレアンヴィルは、一旦、エル・アスナムという名称に改められた後、1981年にシェリフというれ称に改められた。

## ポトラッチの使用法

あなたがたに挨拶しても面白くも何ともない。そんなことをするのではなく、具体的な力が必要なのだ。わずか数百人の人間があてずっぽうに時代の思想を決定している。彼らが知っていようといまいと、われわれはその彼らを自由に動かすことができる。『ポトラッチ』は、世界のあちこちに散らばった人々に送られ、われわれが望む時と場所で回路を切断することができる。

これまでに何人かの読者が独断で選ばれた。それでも、あなたがたにも読者になるチャンスはある。

編集部

## 共通の尺度なしで

どれほどすばらしい知性の遊びもわれわれにとっては何でもない。経済学、愛、都市計画、これらのものは何よりも倫理的次元の問題を解決するためにわれわれが要求すべき手段にすぎない。

人生に対し、絶対的に情熱的であることを免れさせうるものは何もない。

われわれはいかにすべきかを知っている。

世間の敵意とトリックにもかかわらず、あらゆる点で恐るべき1つの冒険に参加する者たちが手加減せずに結集している。われわれはみな、これに参加する以外には、名誉ある生き方は存在しないと考えている。

レトリスト・インターナショナルのために  
アンリ・ド・ベアルン、アンドレ＝フランク・コノール  
ムハンマド・ダフ、ギー＝エルネスト・ドゥボール  
ジャック・フィヨン、パトリック・ストララン  
ジル・J・ヴォルマン

## ヴァンクーヴァーからの手紙

僕はまだカナダから出さしてもらえない！……ひょっとして、もうすぐ出ることができるのだろうか？ 僕の行動はもはや謎であるだけでなく、どんな行為もどんな不正な言葉も人から非難されることなく、人を恐怖に陥れるものになっている。それどころか、完全に違和感を覚えさせる結果になる模範的な行動だ。

パトリック・ストララン

## イヴィッチのための2つの転用文

イヴィッチの勝ちだ、イヴィッチの勝ちだ、それはほとんど微笑みながらの愛になるだろう。

またそれが見つかった。何が？ 永遠が。

それは太陽と溶け合ったイヴィッチだ。<sup>\*1</sup>

緊急連絡はすべて、TUR 4 2-3 9に電話されたし。

## 第2の記念日

1952年6月30日の夜、『サドのための叫び』が〈アヴァンギャルド・シネークラブ〉という名のシネークラブで上映された。公衆は憤慨し、20分間の大混乱の後、映画の上映は打ち切られた。

## 心理地理学の練習

ピラネージ<sup>\*2</sup>は階段において心理地理学的である。

クロード・ロラン<sup>\*3</sup>は宮殿と海の組み合わせさせた地区を現前させることにおいて心理地理学的である。

郵便配達夫シュヴァル<sup>\*4</sup>は建築において心理地理学的である。

アルチュール・クラヴァン<sup>\*5</sup>は迅速な漂流において心理地理学的である。

ジャック・ヴァシェ<sup>\*6</sup>は服装において心理地理学的である。

バイエルンのルートウィヒ II 世は王権において心理地理学的である。

切り裂きジャックはおそらく愛において心理地理学的である。

サン＝ジュストは政治において心理地理学的である。（1）

アンドレ・ブルトンは出会いにおいて素朴なまでに心理地理学的である。

ネマドレーヌ・レヌリ<sup>\*7</sup>は自殺において心理地理学的である。（2）

そして、ピエール・マビユ<sup>\*8</sup>は驚異の収集において、エヴァリスト・ガロワは数学において、エドガー・ポーは風景とヴィリエ・リラダンの苦悩において心理地理学的である。

- (1) 恐怖政治は人を途方に暮れさせる。
- (2) 『サドのための叫び』を参照のこと。

ギー＝エルネスト・ドゥボール

## 出ていけ

レトリスト・インターナショナルは、1952年11月以降、「古びた部隊（ヴィエイユ・ギャルド）」の除去に努めてきた。

いくつかの理由で、何人かの除名が行われた。

——イジドール・ゴールドシュタイン——イジドール・ゴールドシュタインまたの名をジャン＝イジドール・イズー——は道徳的に退行した個人であり、制限的な野心のために。

——モーゼ・ビスマス——またの名をモーリス・ルメートル——は、延長された幼児趣味、早すぎる老成、良き使徒という理由から。

——ポムランス——またの名をガブリエル・ポムランは——、改竄者、まったくのゼロという理由から。

——セルジュ・ベルナは、知的厳密さの欠如から。

——マンシオンは、単に装飾過剰の理由から。

——ジャン＝ルイ・ブローは、軍事至上主義的逸脱のために。

——ラングレは、愚かさから。

——イヴァン・クチェグロフ——またの名をジル・イヴァンは神話癖、解釈の錯乱、革命意識の欠如から。

死者に立ち戻ることは無益である。そんなことはブルーム\*9に任せておけばよい。

ジル・J・ヴォルマン

## 覚えておいたほうがいい

「何事であれ何かを維持するものはすべて、警察の仕事に貢献している。というのも、われわれは、既に存在しているどのような考えもどのような行動も不十分であることを知っているからだ。現在の社会は、それゆえ、レトリストと密告屋（……）のただ2つだけに分けられる。」

(1953年2月19日の宣言)

ダフ、ドゥボール、ヴォルマンの署名

『アンテルナショナル・レトリスト』誌 第2号所収)

編集長アンドレ＝フランク・コノール

パリ6区、デュゲ＝トゥルアン街15番地

\*1：またそれが見つかった。何が？永遠が。／それは太陽と溶け合ったイヴィッチだ。 アルチュール・ランボーの詩「永遠」の冒頭部。「海」を「イヴィッチ」に変えてある。

\*2：ピラネージ（1702－78年） イタリアの版画家・建築家。クロード・ロランの風景画に影響を受け、古代ローマの廃墟や遺跡をもとにした幻想的な版画を作った。代表作に『ローマの景観』、『古代ローマ』（共に1756年）のほか、「想像の牢獄」（50年）が特に有名で、そこに描かれた牢獄のなかの階段は幾重にも重なり、迷路のようにになっている。

\*3：クロード・ロラン（本名クロード・ジェレ 1600－82年） フランスの風景画家。フランスのヴォージュ地方に生まれ、多くの風景画を描いた。微妙な光の描写において傑出し、19世紀のターナーや印象派などの先駆として知られる。「宮殿と海の組み合わさった区域」とは、ロランが『クレオパトラの上陸』（1643年）や『シヴァの女王の乗船』（48年）などに描いた一連の風景で、一様に遠景に太陽と水平線を、中景に船と海を近景に港の宮殿を置く構成になっている。

\*4：郵便配達夫シュヴァル フェルディナンド・シュヴァル（1836－1924年）のこと。フランスのドローム県オートリーヴで郵便配達夫をしつつ、独力で30年以上かけて「理想の宮殿」を塵設した。鉄筋とセメントで作られたこの宮殿は、洞窟、海底の風景、アンコール・ワット、ガウディの建築、ノイシュヴァンシュタイン城、ダリの絵画などを混ぜ合わせたような奇怪な建築物で、シュルレアリストが大いにもてはやした。

\*5：アルチュール・クラヴァン（本名ファビアン・ロイド 1887－1920年）詩人にしてボクサー。スイスのローザンヌで生まれたがフランスに来て、詩を書きながら、ボクシングの世界タイトルマッチに出場。1912年から15年、パリで個人雑誌『マントナン』を発行し、手押し車に乗せて売り歩く。その第4号にサロン・デ・アンデパンダンの椰楡とユーモアに満ちた展覧会評を載せたことから、ブルトンは「黒いユーモア選集」にクラヴァンを取り上げた。1920年、メキシコ湾を夜中に小舟で乗り出してそのまま行方不明になった。

\*6：ジャック・ヴァシエ（1896－1919年）フランスの詩人。1914年第一次世界大戦に動員されて負傷し、ナントの病院に入院、当地で16年にアンドレ・ブルトンと出会う。あらゆる社会的価値からの離脱（それをヴァシエは「ユーモア Umour」という言葉で表している）を説くなど、ブルトンに多大な影響を与え、ヴァシエなしにはシュルレアリスムはなかったとさえ言われている。19年、阿片を過度に吸引して死亡（自殺説もある）。戦中、ブルトン、アラ

ゴン、テオドール・フランケルに書き送った手紙が死後『戦場からの手紙』（1919年）として出版された。常にダブルの長いフロックコートを着ていた（ヴァシェの残された写真にもそれが写っている）ことを指して、ここで「服装において心理地理学的」と言われているのだと思われる。

\*7：マドレーヌ・レヌリ 12歳半で川に身を投げて自殺したラジオの少女スター。それを伝える新聞の三面記事が、ドゥボールの映画『サドのための叫び』に使われている。

\*8：ピエール・マビュ（1902－52年） フランスのシュルレアリストの作家・医者1930年代にシュルレアリスムの雑誌『ミノトール』の編集に携わり、精神分析や人類学、とりわけ「鏡」に関する多くの文章を発表。代表作に『驚異の鏡』（1940年）。

\*9：ブルーム ジェイムズ・ジョイスの小説『ユリシーズ』の主人公レオポルド・ブルームのことと思われる。ブルームは、10年前に生後まもなく死んだ一人息子の思い出を抱えて、ダブリンの街をさまよい歩く。

## グアテマラは失われた

6月30日、その前日にモンソン大佐によって奪取されたグアテマラ政府は、米国とその現地〔次期首班〕候補C・アルマス\*1によって企てられた攻撃に降伏した。

どんなに愚かなヨーロッパのブルジョワジーの指導者たちでさえ、彼らの「不滅の同盟国」の成功が彼らにとってどんなに脅威となるか、またそのせいで彼らは、「アメリカ流の生き方（アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ）」の割が悪く取り消しもできない剣闘士契約\*2に縛りつけられ、そして、やや3色がかった48個の星のために歴史の次の修羅場の中に進んで愛国的な死を遂げるはめになるということ、のちになれば理解するであろう。

ローゼンバーグ夫妻の殺害\*3以後、アメリカ政府は、自由に生きることを望み、そうするすべを知っている世界中のあらゆる人に、毎年6月、血塗られた挑戦状を投げつけることに決めたようである。

グアテマラの大義は失われた。なぜなら、政権の座にあった人々が、真に自らのものであった陣地で闘う勇気がなかったからである。レトリスト・インターナショナルの6月16日付——クーデターの3日前——の声明（「やつらにやつらのチューインガムを飲み込ませること」）が指摘したように、アルベンスは労働組合を武装させ、中央アメリカの労働者階級全体に頼るべきであった。彼は中央アメリカの解放の希望を代表していたのだから。

自発的な人民の組織化と蜂起に訴えることなく、正規軍の要請のためにすべてを犠牲にしてしまった。まるで、すべての国で、軍は本質的にファシストでなく、いつも弾圧のためにあるのではないかのよう。

サン＝ジュスト\*4の言葉が、この種の人々にあらかじめ判決を下している。「革命を半分だけ行なう人々は、自分の墓穴を掘っているにすぎない……」

墓は、グアテマラのわれわれの同志——港湾労働者、トラック運転手、プランテーションの労働者——に対しても口を開いている。彼らは抵抗することもできずに拉致され、まさにこの瞬間にも銃殺されている。

スペインとギリシャに続いて、グアテマラも、ある種の観光旅行を引きつける国の中に分類されることになる。

われわれはいつの日かその旅行をしたいものである。

レトリスト・インターナショナルのために

M=I・ベルンシュタイン、アンドレ＝フランク・コノール  
ムハンマド・ダフ、G=E・ドゥボール

## すべて説明がつく

それは「レトリスト」と呼ばれる人々である。昔、「ジャコバン派」とか「コルドリエ派」\*5とか言ったように……。

ミシェル＝イヴィッチ・ベルンシュタイン

## バラックの建設

近年の社会政策キャンペーンの一環として、住宅危機に備えるためのバラックの建設が、熱に浮かされたように続けられている。わが国の大臣や都市計画建築家の巧みさには、ただ舌を巻くばかりである。調和が少しでも壊れるのを避けるために、彼らはバラックの典型を開発した。その設計図はフランスのいたる所で利用されている。鉄筋コンクリートが彼らの好む資材である。——この資材は最も自由自在な形に向いているのに、人々はそれを四角い家を造るためにしか用いない。この種の最もお見事な成功作は、ル・コルビュジエ將軍の「輝く都市」のようである。もっとも、名手ペレ\*6の作品が、彼と勝利の栄冠を争ってはいるが。

彼らの作品においては、20世紀半ばの思想と西洋文明の規範を定めるスタイルが展開されている。——それは「兵舎」スタイルであり、1950年代の家は箱である。

景観（デコール）は行動を規定する。われわれは心をわくわくさせるような家を建設するであろう。

A=F・コノール

## 今選のベストニュース

ペルピニャン〔フランス南部、スペイン国境の地中海側に近い都市〕、6月30日（『フランス・ソワール』〔大衆的夕刊紙〕発）。——今朝4時30分にセーズ村の近くで起きた交通事故で、ドミニコ修道会の総会長であるエマヌエル・スアレス神父様と、同じ修道会の事務総長であるアウレリアーノ・マリネス・カンタリーノ神父が、命を落とした。

この2人の修道士は、ローマから車で来てスペインに向かっていた。運転していたカンタリーノ神父が、疲労に負けて居眠り運転をした模様である。猛スピードで走っていた車は木に激突して大破し、乗っていた2人は即死した。

## ピン・インはヴァシエとは反対に

戦争と『戦場からの手紙』の大流行のせいで、われわれはいやおうなしに、汚いヒロイズムの行為と同様に、最も美しい逃亡行為を知ることになる。

しかし、内部への逃走の弁明——ジャック・ヴァシエの本質的に象徴的な象徴の数々とは、それであった——(「私はこんなに多くの戦争に決して勝てないだろう」)を、われわれはもう愛読しない。われわれは、勝利する反乱を選ぶであろう。

人格がどのように形成されるかをわれわれは知っている。ジャック・ヴァシエはいずれにせよ当時の軍事制度にすっかり条件づけられたのだということを、われわれは忘れない。

(逆にアルチュール・クラヴァンは、時代のビザを全然持たずに、隅から隅まで衝撃的な旅行をうまくやり遂げたように思われる。)

われわれは、ヴァシエの個人的な抵抗の貴さに異議を唱えようとは思わないが、しかし、われわれが1952年10月に有害無益なチャップリンの『ライムライト』アイドルに関して書いたように、「最も急を要する自由の行使とは、偶像の破壊であると、われわれは信じる。とりわけ偶像が自由を後楯にしている時には、なおさらそれが必要だ……。」(『アンテルナショナル？レトリスト』誌第1号)

われわれは、実のところ、文学をわれわれのプロパガンダの諸要請との関連においてしか評価しない。ヴァシエの『書簡』がフランスの高校生の間に広まっても、当世流行の平凡な否定にいくらかのエレガントな表現形式が加わるだけであろう。

しかしながら、ほとんど知られていない小さな本『中国の革命的な少女の日記』(ヴァロア書店、1931年)によって、ピンイン——16歳の女生徒で、上海へ向けて行進中の人民軍の後に付いていった——はわれわれに赤い青春の言葉を残しておいてくれた。「私の両親についていえば、私はもちろん両親と別れたくありませんでした。でも、私たちはもうそんなことを考えていられないのです。だって、革命というのは、大多数の人々の利益と幸福のためなら、少々の人を犠牲にしなければならないのですから……」

この話の結末はお分かりだろう。そして、20年にわたる將軍その將軍は今なお台湾でいたずらに生き長らえている——の支配のことも、国民党の虐殺者たちのことも。

「……でも、私たちはちっとも苦しみを感ぜませんでした。明日は穏やかで良い日になるだろうって信じていました。つまり、血のように赤い太陽、そして私たちの目の前には、光に満ちあふれた大いなる道、美しい庭。」

ピン・インの声がわれわれに届くのは、われわれの女友達とわれわれの最も確かな共犯者たちが旅立ち、消えてゆく——地球の自転のキロメートル毎秒でいうとどれくらいの速度で?——このような日暮れからである。少なくとも、内戦にはきわめて正当な理由がいくらでもあるだろう。

『ポトラッチ』は編集部に連絡された住所のいくつかに送られます。

『ポトラッチ』編集長 アンドレ＝フランク・コノール  
パリ6区、デュゲ＝トゥルアン街15番地

\*1：カスティリヨ・アルマス（生没年不詳） グアテマラの大佐。1954年6月、ホンジュラスでアメリカCIAの支援のもとに反革命軍を組織してグアテマラに侵攻し、アルベンス大統領率いる左翼政権を打倒した。

\*2：剣闘士契約 「剣闘士」（gladiator）とは本来、古代ローマの円形競技場で剣で闘った闘士のことであるが、ここでいう「剣闘士契約」とは、NATO〔北大西洋条約機構〕のことと推測される。

\*3：ローゼンバーグ夫妻の殺害 ジュリアス・ローゼンバーグ（1918－53年）とその妻エセル・ローゼンバーグ（1915－53年）は、1950年2月、戦時中に原爆機密をソ連に漏洩するのに協力したというかどで逮捕される。夫妻は一貫して潔白を主張したが、51年4月、死刑判決を受ける。この事件は、1949年にソ連が原爆を保有し、アメリカの原爆独占が破られたことに対する政治反動としてでっち上げられたものであるとして、米国内でもヨーロッパでも強力な抗議運動が巻き起こり、世界中の著名人からの処刑中止の要請も相次いだ。マッカーシズムの吹き荒れるアメリカは聞き入れず、53年6月、電気椅子によって死刑が執行された。

\*4：ルイ・アントワーヌ・ド・サン＝ジュスト（1767－94年） フランス革命期の急進的指導者、革命理論家。国民公会議員、公安委員となり、ロベスピエールの片腕として恐怖政治を推進、「革命の大天使」と恐れられた。テルミドールの反動で処刑された。参照。

\*5：コルドリエ派 フランス革命期の大衆的政治クラブ。正式名称は「人間と市民の諸権利の友の会」であるが、パリの閉鎖中のコルドリエ修道院を本部としたためこの通称で呼ばれた。革命においてジャコバン派に次ぐ重要な役割を演じたが、指導者にはダントン、マラーなどのちの山岳派が多く、またプチ・ブルジョアジーが主体であった。1793年にはエベール派に掌握され、ジャコバン独裁を批判して国民公会に蜂起を宣言したために閉鎖された。

\*6：オーギュスト・ペレ（1874－1954年） ブリュッセル生まれのフランスの建築家。パリのフランクリン通りに建てたアパート（1903年）は、鉄筋コンクリートを全面的に用い、しかもコンクリートの骨組みを露出した斬新な建物として知られる。コンクリート構法を機能的、経済性の側面から大規模に実用化しつつ、コンクリート固有の質感を建築構造の中に生かして

、 20世紀の機能主義建築の流れを方向付けた。

## 最低生活

組合主義の現在の要求は失敗を運命づけられているということは、いくら強調してもし足りないだろう。世間に認知されたその組織機構の分裂と依存からよりもむしろ、その綱領の貧困から、彼らは必ず失敗する。

搾取されている労働者たちに、大切なものは取り替えのきかない彼ら自身の生——そこではあらゆることを行うことができる——であり、価値のある喜びなど何1つなく、武器を取ることにすら経験したことのないまま過ぎ去っていった彼ら自身の最良の日々である、といくら強調してもし足りないだろう。

「最低生活賃金」を保証せよとかそれをアップせよとか叫ぶのではなく、大衆を最低限の生活におしとどめることをやめろと叫ばねばならない。パンのみを要求するのではなく、遊びも要求せねばならない。

労働協約委員会が去年定義した「軽作業労働者の経済的地位」——この地位は人間から期待しうるすべてのものに対して耐え難い侮辱であるが——において、余暇——と文化——の占める割合は、1月に〈セリ・ノワール〉\*1の推理小説たったの1冊である。

他に逃げ道はない。

おまけに、体制は、新聞と海外映画と同様、推理小説によっても、その牢獄を広げている。その中では、勝ち取れるものは何も残っておらず、失うものはただ鎖だけだ。

生はこの牢獄の彼方に勝ち取られる。

問題として立てるべきは、賃金の増加ではなく、西洋の人民が置かれた状態である。

資本主義によってすぐに再び疑わしいものとされ、資本主義のなかに取り戻されてしまうこまごまとした譲歩を獲得するために、システムの内部で闘うことは拒否せねばならない。根底的な問題として立てねばならないことは、生き残るのか、それともこのシステムを破壊するのかという問題である。合意できるものについて話すのではなく、受け入れられない現実について語らねばならない。ルノー公団のアルジェリア人労働者に、君たちの余暇はどこにあるのか、君たちの祖国は、威厳はどこにあるのか、きみたちの女はどこにいるのか、と問わねばならない。彼らに、君たちの希望はいったい何なのかと尋ねたまえ。社会闘争は官僚主義的なものであってはならず、情熱的であらねばならない。職業的組合主義の惨悟たる結果を判断するには、1953年に自然発生したストライキを分析するだけで十分だ。下部の決断、黄色組合の連合によるスト破り（サボタージュ）、CGT〔労働総同盟〕彼らは、ゼネストが勝利のうちに広がりつつあったのに、それを扇動することも利用することもできなかつたによる放棄。これとは逆に、議論を活

性化させうる事実気づく必要がある。たとえば、世界のいたるところにわれわれの友人がいて、われわれは彼らの戦いのなかに自らの姿を認めうるという事実、またさらに、人生は過ぎ去り、その代償はわれわれ自身が発明し、われわれ自身が打ち立てねばならないもの以外には期待できないという事実にある。

それは勇気の問題にはほかならない。

レトリスト・インターナショナルのために  
ミシェル・I・ベルンシュタイン、アンドレ＝フランク・コノール  
ムハンマド・ダフ、G＝E・ドゥボール  
ジャック・フィヨン、ジル・J・ヴォルマン

## 今週のベストニュース

マドリード——7月8日——。フランコ総統は昨日、アメリカのバード上院議員をプラドの自分の宮殿に1時間以上迎え入れ、その前で、「難局を迎えている」（バード氏による）フランスに対するかなり厳しい意見を言った。自分の方はと言えば、その強大国の未来に関してわずかな希望しか抱いていないと、フランコは上院議員に語った。

（『パリ＝プレス』紙、54年7月9日付）

6月11日ダブル・ドウト画廊で開催された影響波及的メタグラフィの展覧会はさしたる事件もなく7月7日に終わった。

## レトリスト・インターナショナルのアンケート

——現代社会においてあなたは集団的遊びにどのような必要を認めますか？

——この欲求を反動的なやり方（トゥール・ド・フランス式の）で反らせるものに対しては、どのような態度をとればよいでしょう？

解答は、パリ5区、モンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ街32番地、『アンテルナショナル・レトリスト』編集長ムハンマド・ダフまでお送り下さい。

## すぐ隣の惑星

建設者は破滅したが、憂慮すべきピラミッドはすべてを凡庸化する旅行代理店の仕打ちに抵抗して建ち続けている。

郵便配達夫シュヴァルは、一生涯毎晩働いて、オートリーヴの自分の庭に「理想の宮殿」を建てた。それはデベイズマンの建築の最初のデモンストレーションである。さまざまなエグゾチックなモニュメントと、1つの石の植物の形式を転用したこの奇怪な（バロック）宮殿は、滅びてなくなるといふ以外に何の役にも立たない。その影響はやがて莫大なものになるだろう。ただ1人の男が信じがたい頑固さで提供した労働の総量は、当然のことながら、毎日訪れる客が考えるように、それ自体においては何の価値もない。だが、いつまでもたっても曰く言いがたい奇妙な情熱を啓示してくれるのである。

これと同じ欲望に幻惑されて、バイエルンのルートウィッヒII世は莫大な金を費して、その王国のうっそうたる山中に、いくつかの常軌を逸した紛い物の城を建てた。それは彼が、さして深くはない湖のなかに消える前のことだ。

彼の劇場である地下の河や彼の庭に散りばめられた石膏の彫像は、この非妥協的な企てと、彼の悲劇を示している。

もちろんそこには、精神科医のくずどもの介入を許すあらゆるモチーフがある。また、時々「素朴（ナイーフ）」を追いかけ回す温情主義のインテリどもがよだれを垂らす頁もまだまだたくさんある。

だが、素朴なのは彼らの方だ。フェルナンド・シュヴァルもバイエルンのルートウィッヒも、新しい人間の条件に合わせて、自分の望む城を建てたのである。

## どこでも有効な

「わが国の選挙がどんな奇妙な結果に到り着くか指摘せざるをえなかった。開票された数字を読む限り、『国民』はごくわずかな選ばれた労働者だけが反対する百万長者で構成されているのではないかと疑問に思うほどだ。」

（『裸の唇』誌 第1号からの抜粋、ブリュッセル、ベルギー）

## 答える権利

フランスの極右は実力行使を準備している。1953年7月14日\*2の挑発にも、ディエン・ビエン・フーでのカストリ将軍の降伏のあとの暴動\*3にも、そのことが示されている。これらの暴動は警察に公然と支援された突撃隊によって組織されたものだが、彼らはかつてのインドシナ戦争の兵士（つい最近の6月25日に発行された『フランス＝オブセルヴァトゥール』誌を参照）や若い学生のなかでも最もインテリの者たちで構成されていた。毎週、左翼新聞の売り子が何人か、腕を磨く決心をしたならず者たちに捕まっている。

どのような暴力に対しても、それを上回る暴力で答えねばならない。幸運にもフランスには、数年前から、優れた革命意識を持つ戦闘的な少数派が存在する。北アフリカの労働者は、パリや

北部あるいは東部の都市には、とりわけ数多くいる。彼らのなかに真面目なプロパガンダを行う努力をすれば、「得るところ」が極めて大きい。彼らとの同盟によってもたらされる利点は、数多くあるとともにめざましいものである。街頭での彼らの闘争技術は、最もよく訓練された軍隊式部隊のそれと同じか、それを上回る。アルジェリア人カフェが失業者であふれている多くの地区で、そのための窓口が自然に生まれている。

結局、パリのすべての北アフリカ人のあいだでは、いくつかの問題について同意が形成されている。彼らには、レットテルが何であれ、あらゆる種類のファシストを切りつける用意ができて

いる。  
警察の援護を受けていても、いくつかのごろつきどもを公道から追放するのはしごく簡単なのである。

編集部

『ポトラッチ』編集長 アンドレ＝フランク・コノール  
パリ6区、デュゲ＝トゥルアン15番地

\*1：〈セリ・ノワール〉 第二次大戦以降フランスの大手出版社ガリマール社から出されている黒表紙の推理小説叢書。作家のマルセル・デュアメルが、フランス解放後怒涛のごとく押し寄せたアメリカ推理小説の向こうを張り、1945年に作った叢書で、〈セリ・ノワール〉(黒シリーズ)の名は詩人のジャック・プレヴェールの命名。

\*2：1953年7月14日 この日、CGTとフランス共産党とが組織したデモの解散地点で、警察・右翼と北アフリカ出身者を中心としたデモ隊約2万人との間で激しい衝突が生じ、その際、北アフリカ人7名が虐殺された。

\*3：ディエン・ビエン・フーでのカストリ将軍の降伏のあとの暴動 1954年5月7日、カストリ将軍率いる在ヴェトナム・フランス軍1万6千人の立てこもるディエン・ビエン・フーの大要塞は、ボー・グエン・ザップの指揮するヴェトミン軍の56日間にわたる攻撃のすえ、死傷者6千人、捕虜1万人（ヴェトミン軍側は死者8千人、負傷者1万5千人）を出して陥落した（312ページの注を参照）。その報を受けたフランス本国では、5月14日、パリの凱旋門で、パラシュート部隊の軍人や右翼が中心になり、政府の不手際に抗議する激しいデモを行った。

## カタリ派\*1は正しかった

ワシントン発、7月9日——アメリカの全マスコミは今日、シカゴ大学教授の物理学者マーセル・シャイン\*2と彼の黒板、そして彼の発見した「反陽子」の写真を公表した。この不思議な宇宙の小物体は、この冬にテキサス州の上空30キロメートルで観測気球が検出したものだろうということだ。

実は、これは現代科学最大の発見の1つかもしれない。反陽子とは、何年も以前から世界中の物理学者が探していたもので、陽子とは反対のものである。

陽子は水素原子の核であり、したがって、地上の全物体の基本的要素である。陽子と反陽子が出会うと、それらは互いを破壊し合う。反陽子はそれゆえ、陽子でできたすべての物質を消滅させることができる。それは本質的には「反物質」なのかもしれない。しかしながら、地球全体を破壊するに十分なだけ反陽子を集めることは不可能なようだ。

(『コンバ』紙、7月10日付)

## 結論

——つい最近、グアテマラの新政府は文字を読み書きできないものから投票権を取り上げた。

(『ル・フィガロ』紙、7月9日付)

——グアテマラに勝利をもたらした反徒らの指導者であるカルロス・カスティージョ・アルマス将軍は、軍事評議会の会長に任命された。

(『パリ＝プレス』紙、7月10日付)

——カスティージョ・アルマスは自らの政策を「銃殺隊の正義」と定義した。

(『ユマニテ』紙、7月14日付)

## 摩天楼の根のあたり

あらゆる領域で、ますます抑圧の印がのしかかっているこの時代に、特別に嫌悪すべき男

、明らかに並はずれて警察的な男が1人いる。この男は居住単位の独房をいくつも建設し、ネパール人のための首都を建設し、垂直になったゲッターや、しばらくの間なら十分死体公示所（モルグ）に使える建物を建設し、たくさんの教会を建設した。

このプロテスタントのモデュロール\*3、ネオキュビスム風の駄作のへぼ絵かき、ル・コルビュジエ＝シング＝シングは、神の最大の榮譽のために「住むための機械」を作動させたが、この神たるや腐った死骸とル・コルビュジエらを自分の姿に似せてこしらえたのだ。

現代の〈都市計画〉なるものは今までに1度も芸術になったことはなく——生の枠組みになったことはなおさらなく——、逆に、常に警察の刑事たちから着想を得てきたということ、そして、結局、オスマンがこれらの大通りを作ったのは大砲をうまく運ぶためでしかなかったということ、これらの事実を忘れてはなるまい。

だが、今日、ル・コルビュジエが通りをなくすことに情熱を傾けているのを知るにつけ、牢獄が住居のモデルとなり、キリスト教道徳が有無を言わず勝ち誇っていることに気づく。というのも、彼はそれを自負しているからだ。生活はいくつもの閉じられ孤立した地区、いくつもの監視された社会に分割され、叛乱のチャンスも出会いのチャンスも終わり、自動症的（オートマティック）な諦めが支配する——それが彼の計画である（ついでに、次のことを指摘しておこう。自動車の存在は万人もちろん、何人かの「経済的弱者」は除いて——の役にたつ。最近亡くなったばかりの警視總監、あの忘れることのできないベイロは、バカロレア〔の学生〕の最後のスクラムのあと、街頭でのデモ行進は以後交通の必要と相容れないとも語っていた。そして、7月14日が来るたびに、そのことは証明される）。

ル・コルビュジエとともに、真に衝撃的な建築物から期待しうる遊びと認識——日常的な逸脱（デペイズマン）——は、ごみ箱に捧げられることになった。そのごみ箱も、すでにUSAの全ホテルに設置されている規定にかなった聖書のためには決して使われないのだ。

ここに現代建築を見るためには、バカになるしかない。うまく埋葬されなかった古いキリスト教世界をむりやり呼び戻したにすぎないのだ。前世紀のはじめ、リヨンの神秘思想家ピエール＝シモン・バランシュ\*4は、その著書『償いの都市』——その描写は〔ル・コルビュジエの〕「輝く都市」を予感させる——のなかで、すでにこの理想の生活を書き表していた——

「〈償いの都市〉は、人間の単調で悲痛な有為転変の法則と社会的必要の御しがたい法則を生き生きと映し出すものでなくてはならない。そこではあらゆる習慣が、最も無邪気な習慣でさえ、真正面から攻撃されねばならない。何ものも1つ所にとどまらず、人の生は亡命の地での旅であるということを、そこでは、あらゆるものがたえず知らせ続けなければならない。」

しかし、われわれの眼には、地上の旅は単調でも悲痛でもない。社会の法則は御しがたくはない。真正面から攻撃すべき習慣は、たえず新たに生まれる驚異に取って代わられた。そして、われわれが願う第1の快適さとは、この手合いの考えと、そうした考えをまき散らす蠅を除去することだろう。

ル・コルビュジエ氏は人間の欲求について何を予想しているのか？

大聖堂はもう白くはない。そしてわれわれがそれを見て喜ぶ姿などありえない。「日当たり」に太陽広場、音楽も知られている——MRP（フランス人民共和派）\*5のオルガンとタンバリン

だ——、その上、天上の牧草地には、亡くなった建築家たちが草を食べに行くというわけだ。〔巨きな〕牡牛を盗め、これは〔小さな〕雌牛だ。

レトリスト・インターナショナル

## 今週のベストニュース

東京発、7月14日——生糸工場の女性従業員たちがこのところ行っていた、正常な精神生活の権利を求めたストライキは、雇い主らと富士宮——東京から64キロメートルの場所の住民との間でほとんど「戦争」状態に発展した。

「近江絹糸株式会社\*6」の工場で働く若い女性たちは、極めて厳格な規律下に置かれた寮に住んでいるが、会社があらゆる手段で、彼女らの結婚を妨げ、精神生活を持つことを妨害していることに不平をもらしている。会社がそうするのは、「それに起因する生産高の減少」を危惧していることだそう。工場とその付属施設を離れるには7名の許可を得なければならないこと、口紅や白粉を塗ってはならないこと、毎晩、9時になれば眠らねばならないことに対して、少女らは不満の声を上げている。

社長の夏川嘉久次氏は仏教徒で、毎朝、工場の庭に整列して仏教のお経を唱えねばならないことが、少女らには不満である。

このお経が終わっても、まだ別の歌が控えていて、それは、たとえば、「今日、私は法外な要求はいたしません」とか「今日、私は不満を漏らしません」などという題が付いている。

(『コンバ』紙、7月15日付)

## 模範的な自己批判

「(……)世情の複雑さも、彼らがメンバーの1人を除名することの妨げにはならない、そのメンバーが少しでも卑俗さの印を見せれば、あるいはまた自分のしたことで満足すれば。」(1954年6月に除名されたレトリスト・インターナショナルの一メンバーが、1953年10月に書いた言葉)

今号の『ポトラッチ』の編集はベルンシュタイン  
コノール、ダフ、ドウボール、フィヨン、ヴォルマンによる。

ベルギーのシュルレアリスト・グループのアンケートへの回答

「詩（ポエジー）という語にどんな意味を与えますか？」

詩（ポエジー）は形式に関してその最後の威厳をなくしてしまった。詩は今や、美学を超えて、人間の冒険の能力のなかにしかない。詩は人々の顔の上に読むことができる。それゆえ新たな顔を作ることが急がれている。詩は都市の形のなかにある。われわれはそれゆえ、人を動転させるような都市を作ろうとしている。新しい美は状況のものとなるだろう、すなわち一時的であると同時に経験された美となるのである。

最近の芸術のヴァリエーションにわれわれが関心を持つのは、そこに付与したり発見したりすることのできる影響波及的な力のためだけである。われわれにとって、詩は、完全に新しい行動の錬成、そしてそのことに情熱を傾ける手段という意味しかない。

レトリスト・インターナショナル

（『自然による地図』誌 特別号に掲載、ブリュッセル、54年1月）

『ポトラッチ』編集長 アンドレ＝フランク・コノール

パリ6区、デュゲ＝トゥルアン街15番地

\*1：カタリ派 11世紀から13世紀に南欧、特に南仏に広まった、アルビジョア派を含むマニ教的異端宗派。

\*2：マーセル・シャイン（1902－） チェコスロヴァキア生まれの合衆国の物理学者。第二次大戦勃発の前年、合衆国に移住、シカゴ大学で宇宙線の研究を行う。戦後、アラスカのマッキンレー山頂で宇宙線測定を行ったり、B29や気球に乗って高空観測を行ったりしたことで有名。

\*3：プロテスタントのモデュロール モデュロールとは、ル・コルビュジエが黄金分割比をもとに考案した建築設計のための基準尺度。ル・コルビュジエはスイス生まれのプロテスタントだった。

\*4：ピエール＝シモン・バランシュ（1776－1847年）フランスの作家、哲学者。イタリアの歴史哲学者ヴィーコから受け継いだ歴史哲学を神秘論的社会理論に結合させた独自の思想を編み出し、自由主義的なカトリック教徒に影響を与えた。著書に『文学との関係において考察した感情について』（1801年）、『社会の転生』（27－29年）

\*5：MRP（フランス人民共和派）主として対独レジスタンス派が結成したキリスト教的民主主義

政党。1967年に解消。

\*6：近江絹糸株式会社 大阪に本社を持ち、彦根、岸和田、大垣、富士宮などに工場を持つ従業員1万2000人の紡績会社。熱烈な仏教徒夏川社長のワンマン体制のなかでの前近代的な労働環境に反発し、会社のご用組合に反旗を翻した第2組合が22項目の要求を掲げて、1954年6月4日、無期限ストに突入、105日にわたる激しい闘争の末、9月17日、中労委などの斡旋で決着を見た。この闘争は、その要求内容から「人権闘争」と呼ばれ、多くの犠牲者を出しながらも、闘争の過程で各地元市民や他労組からの支援を次々と生み出した。『ポトラッチ』のこの記事では、結婚の自由の要求がもつぱら「少女」からのみ出された要求と取れるが、実際は、夏川社長は男性社員に対しても、結婚しないことを説き、若い社員が結婚するとすぐに左遷し、夫婦が同居

## 響きと怒り

1947年\*1、オノマトペ詩は1つの新しい思想潮流の最初のスキャンダラスな介入を記していた。自らが主張する詩法のために「レトリスト」という名称のもとに結集した集団が、それ以降数年間にわたり、その活動領域を、小説から絵画に（1950年\*2）、さらに映画へ（1951年\*3）と広げてゆくことになる。

ポジティブなダダイズムと言うべきこの時期の運動は、美学のさまざまな学説の形式的進化に対する批判を行った。その関心はもっぱら新しさにあったが、それは、是が非でもオリジナルなものをという嗜好ではなく——われわれはそのことについてあまりに容易に反対された——、発明のメカニズムを支配しようという意志だった。レトリズムの目的の拡大は弁証法的に考えれば十分予想できたことだが、過程にはフラクション間の激しい闘争と乗り越えられたメンバーの除名とが刻み込まれている。このレトリズムの目的の拡大という事態によって、問題の所在は、発明のメカニズムを情熱的な〔＝情念に関する〕目的に利用することにのみ局限されることになったのである。

1952年6月に結成されたレトリスト・インターナショナルは、レトリストの運動の過激な潮流を結集させた。同年10月、インターナショナルの支持者が引き起こしたチャーリー・チャップリンに反対した事件と、その行動へのレトリスト右派の非難のあと、退嬰的な潮流との協力関係は破棄され、そのメンバーは粛清された。

それ以来、われわれの歩みはあらゆる機会に明確なかたちを取ってきた。

われわれが常に言ってきたことだが、たとえば、ある種の建築の実践や社会騒乱の実践は、われわれにとって、構築すべき形態の生へのアプローチの手段を意味するだけである。

詩の表現など、エクリチュールが取りえた別の歴史的形態と同じく、われわれにはどうでもいいにもかかわらず、ただ悪意に満ちた敵意だけが、世論の一部を誘導して、われわれを詩の表現——あるいはその否定——の1段階と混同させているのである。

われわれを何らかの美学の支持者の役割に限定することは、他のところでよくなされているように、われわれを麻薬中毒者とかギャングだとか言って断罪するのと同じくらい軽率である。いく度も言ってきたことだが、かつてシュルレアリスム——このシステムだけを挙げるとすれば——によって定義された要求のプログラムは、われわれの眼には最低限のもの、その緊急性が見落とされてはならないものと見えるというだけなのである。

個人の野心はと言えば、それは、われわれがそのために意図して身を危険にさらしてきた大義とは、かなり両立しがたい。

1954年7月22日

レトリスト・インターナショナルのために  
ミシェル＝I・ベルンシュタイン、アンドレ＝フランク・コノール  
ムハンマド・ダフ、G＝E・ドゥボール  
ジャック・フィヨン、ヴェラ、ジル・J・ヴォルマン

## 東方（オリエント）へのアピールへの覚え書き

アラブ国家は死に絶えつつある。自国の国民の貧困の上に作られた彼らの国家政策はどこに通じているのだろうか。

エジプト革命は起きなかった。それは、その最初の日々にすぐ死に絶えた。「共産主義者」として銃殺された織物工場の労働者たちとともに死んでしまったのだ。

エジプトでは、群衆にスエズ運河を見せて彼らを眠り込ませている。イギリス人もそれほど遠くに去りはしない。せいぜいヨルダンかレバノンまでだ。

サウジアラビアはコーランの上に社会生活を建設し、自分の国の石油をアメリカ人に売りさばいている。中東はすべて軍人の手に渡っている。資本主義列強は敵対的なナショナリズムを鼓舞し、それを弄んでいる。

ナショナリズムという考えの一切を乗り越えねばならない。北アフリカは外国勢力による占領からだけでなく、彼ら自身の封建的支配者からも解放されねばならない。われわれに相応しい自由の理念が君臨するところならどこにでも、そしてただそこにのみ、われわれの祖国を認めねばならない。

われわれの兄弟は国境と人種の問題を超えたところに存在する。いくつかの対立——イスラエル国家との紛争のような——も、2つの陣営のそれぞれの内部での革命なしには解決しない。アラブの国々にこう言わねばならない——われわれの大義は共通である。あなた方の前にあるのは西洋（オクシデント）ではないのだ、と。

ムハンマド・ダフ

## 今週のベストニュース

——インドシナ全域での停戦協定が調印される。

（『フランス＝ソワール』紙、7月22日付）

——チュニス発、7月22日、AFP。フェラーガ\*4の運動は依然として重要である。この36時間だけでも、ケフに向かって南西山脈に登っていったいくつもの反乱者部隊の通過が確認されている。これらの無法者が行動を起こすことが懸念され、当局はその脅威を回避するためあらゆる

る予防措置を講じた。さらに、サヘル\*5の150名の若者が、つい最近フェラーガに合流したことも確認されている。

(『ル・パリジャン・リベレ』紙、7月21日付)

## ちゃちな麻薬

一般に知られている娯楽のくだらなさを見れば、真面目だと評されている事業のうちでも最もひどいもの——たとえば大陸間戦争やプランタン・デパートの発展など——になぜ多数派がすぐに同意を与えてしまうのかが説明できる。

売り買いされている「逃避手段」があまりに貧弱なため、キリスト教を受け継いだばかりのいままでに抑圧的なわれわれの社会だけが、若い未経験者の伝統的な陶醉とモルヒネの習慣化とのあいだに区別を設けているのである。

逃避はいかにしても不可能である。可能なのは、われわれの生活条件のすべてを変えることである。それ以外は、面白くなく、卑しいことである。安易な方法を選ぶ者は、雑多さと、ちゃちな麻薬と、退屈と、卑小さのなかに自己を見失うだけだ……。

娯楽を持たぬ王とは何なのか？

新しい行動様式のチャンスが賭けられている。

この賭はこの上ない厳密さをもってしか行えないのである。

## 神話の境界

生まれるのが20年早すぎたために人生をしくじった女たちがいる。イヴィッチについても同じだが、彼女は相変わらず生きている。彼女は、オイディプスにテーバイの門で讃えられた時に、すでに年齢不詳だった。その後、何人かの作家が、彼女が足早に通過したことを記録している。時に人に気づかれ、時に讃えられるが、理解されることはない。

何年か前から、彼女は力づくでのカムバックを準備しているらしい。それは、万事がついに影響波及的になった暁に実現されるだろう。彼女が最後に姿を現したのは、『自由への道』\*6にさかのぼる。もう少しで間違われるところだった。かなり近眼のサルトル氏には、イヴィッチがブロンドに見えたが、実際は黒髪だったのである。

彼女がわが国を通った記録も少しあったが、彼女が自分を待っていてくれる場所に亡命したのはまったく正しい。彼女が知らないことは、あえてまだだれも認めようとしない。そのあいだ、彼女は自分に近い者と一緒に暮らす。それが理由で、世界の不幸も、イヴィッチの疲労も生まれる。彼女はまだ眼を上げようとはしない。男たちは乱暴で騒がしい。彼らはせわしなく動き回っている。結局、男は大きな沈黙を乗り越えられないのだ。とはいえ、もしかりにこの宇宙にわずかでも微笑みがあるとすれば、それはすぐに訪れるだろう。なぜなら、再びイヴィッチを探し

ているからだ。彼女はわれわれの方に歩いてきている。だが、人生は波濤万丈、小説とは違って終わりが無い。したがって、続きは次号で。

A=F・C

## 心理地理学に関するお知らせ

レトリスト・インターナショナルは、ヴァレット街（5区）に賃貸のアパルトマンを3戸探している。

『ポトラッチ』編集長アンドレ＝フランク・コノール  
パリ6区、デュゲ＝トゥルアン街15番地

\*1：1947年 イジドール・イズーがパリでガリマール書店から『新しい詩と新しい音楽への序説』（「ボードレーからレトリズムにいたる」という副題がある）を出版し、レトリズムの理論を公表した年。レトリズム自体の名は、その前年1月21日、トリスタン・ツァラの芝居『逃亡』の上演会場で、イズーとポムランが「ダダは死んだ！ レトリズムがその後を継いだのだ！」などと叫び、『コンバ』紙など翌日の新聞に大々的に取り上げられて有名になっていた。

\*2：1950年 この年、ガブリエル・ポムランの絵文字でできた本『サン・ゲッター・デ・プレ』（78ページの注を参照）が発行された。

\*3：1951年 この年、イジドール・イズーのレトリスト映画『誕と永遠についての概論』がカンヌ映画祭でジャン・コクトーに絶賛され、「アヴァンギャルド観客賞」などの賞を獲得した。

\*4：フェラーガ フランスからの独立運動期のチュニジア、アルジェリアの武装ゲリラ。「フェラーガ」とは北アフリカ・アラビア語で「匪賊、反逆者」の意味。チュニジアは、1954年にフランスから内政上の自治を勝ち取ったが、それに「フェラーガ」すなわち武装ゲリラが果たした役割は大きかった。アルジェリアのFLNは11月1日に武装蜂起するが、その前夜ともいうべきこの時期には、第二次大戦前から独立運動を行っていたアルジェリア人民党(メッサーリ派)の方針を不十分に感じた若者たちが、チュニジアのフェラーガにならい、メッサーリの意向を無視して武装ゲリラ方針を立て、蜂起へと向かっていった。

\*5：サヘル 北アフリカ地中海沿岸の丘陵地帯。

\*6：『自由への道』 サルトルが1945年から49年に発表した未完の長編小説。イヴィツチは、主人公の哲学教師マチューの教え子の姉の名。

「.....ヨーロッパにおける新思考」

真の革命的な問題とは、余暇の問題である。経済的に禁じられているものやそこから帰結する精神的なものは、いずれにせよ、やがて破壊され乗り越えられるだろう。絶え間ない労働に縛りつけられる度合いがやや少ない民衆の余暇の組織化ないしは自由の組織化は、資本主義国家にとってもその後を継ぐマルクス主義国家にとっても、すでに必要なものになっている。なのに、どこでも、スタジアムやテレビ番組による否応なしの白痴化だけにとどまっていた。

まさにこの点に関してこそ、われわれは、われわれに押しつけられている不道德な条件、貧困状態を告発しなければならない。

何もしない——この言葉の普通の意味で——で何年か過ごした後で、われわれは前衛の社会的な立場について語るができる。なぜならば、依然として、一時的に生産に根拠を置く社会において、われわれは余暇のことしか真剣に案じようとはしなかったからである。

もし現在の経済的搾取が崩壊する以前にこの問題がはっきり提出されないならば、変化は取るに足らないものにすぎない。新たな欲望を認め周知させることができなくて旧社会の存在目的を再び纏うような新社会、それはまぎれもなく空想的社会主義派〔の社会〕である。

ただ1つの企てだけが考慮に値するとわれわれには思われる。それは、完全な娯楽の開発である。

冒険家とは、冒険が自分の身に起こるのを待つ人というよりも、自分の身の回りに冒険を起こす人である。

状況の構築とは、熟慮して選ばれた大いなる遊び〔=大博打〕の連続的な実現になるだろう。つまり、ある環境や争いから別の環境や争いへの移り変わりであり、しかもそれらの環境や争いは、昔の悲劇の登場人物ならそれがもとで24時間で\*1死んだものだったというたぐいのものである。しかし今では生きる時間は十分にあるだろう。このジンテーゼの実現のためには、行動の批判と、影響波及的（アンフリュアンシエル）都市計画と、環境および人間関係の技術とが、協力し合わなければならない。それらの根本原理をわれわれは知っている。

シャルル・フーリエが示した、情念の自由な戯れにおける至高の引力に、常に新たな意義を見いだす必要があるだろう。

レトリスト・インターナショナルのために  
ミシェル=I・ベルンシュタイン、アンドレ=フランク・コノール  
ムハンマド・ダフ、ギー=エルネスト・ドゥボール  
ジャック・フィヨン、ヴェラ、ジル・J・ヴォルマン

## 今週のベストニュース

ワシントン発、7月29日（AFP）ある宗教会議の際になされた演説の中で、米国のリチャード・ニクソン副大統領は、「茶碗一杯の米」でアジア諸国民が共産主義の方へ進むのを防ぐことができるなどと思い込んでいる人々は「とんでもない思い違いをしている」と、自分は考えていると言明した。

大統領は次のように続けた。「経済的なゆとりは重要である。しかし、生活水準を引き上げることでアジア諸国民をわれわれの味方にする事ができると断言することは、嘘であり誹謗である。彼らは、偉大な過去の歴史を持つ誇り高い民族なのである。」

## 奇妙な生活

「奇妙な展覧会」という見出しのもとに、『ニース・マタン』という名の地方紙が、ドゥブル・ドゥート画廊でのレトリスト・インターナショナルのメダグラフィの催しについて、「この新しい芸術形態は無償ではない。なぜならそれは、観客の感情と行動を操作しようとするものだからである」と明かしている。

そのようにわれわれを責めるのである以上、実のところメタグラフィと新聞の間に根本的な違いはないということを認めなければならない。

せいぜいのところ、それぞれが何のプロパガンダのために「感情と行動を操作」しようとしているのかと自問することができるくらいである。

ドゥブル・ドゥート画廊の展覧会は、一部の人々が甘んじている生活条件ほど「異様」でも「奇妙」でもない、われわれには思われる。『ニース・マタン』という名の——惨めったらしく反動的な——地方紙を買うのに向いている人々がいる。そして、そこで働くのに向いている人々もいる。

## フランスの大勝利

シュヌヴィエーヴ・ド・ガラル嬢は、おそらく彼女の生涯で2番目に大きい試練練であったものに、見事に耐えた。彼女はアメリカ人を魅了したのである……

なんととっても、最悪の事態になる恐れだってあったのだから……

「天使（ジ・エンジェル）」である「ジュヌヴィエーヴ嬢」は、「前もって説明を受ける」必要も準備をする必要もなかった。彼女は自分で、胸に浮かんだ答を見つけたのである……

ディエン・ピエン・フー\*2は「フランスには魂があり、フランス人は名誉のために戦い続ける」

この証明であったと彼女が表明したとき、アメリカ人の目には涙があった……

それは、単純さと善良さの勝利であった……

ジュヌヴィエーヴは大変落ち着いており、良家のお嬢さんの物腰と澄んだ目をした頑健なガールスカウト隊長の物腰を保っていた。彼女が昨日体験しなければならなかった最も辛い試練とは、およそ2000回の握手をすることであった……

非常に確かなことは、ガール嬢の旅行がここフランスの大義に見事に奉仕したということである。

(『ル・モンド』紙特派員より  
ワシントン、7月29日)

## イヴィッチの不幸

アンダーグラウンド文学にはいくつかの拘束がある。遺憾ながら、『ポトラッチ』誌第6号に発表されたA=F・コノールの記事「神話の境界」には活字の組落としがあって、意味がねじ曲げられてしまった。読者は当然もう自分で訂正済みであろう。

ソヴァージュ通り\*3が壊される

パリで最も美しい風景の1つであり——自然発生的に心理地理学的な風景——が、目下、破壊されつつある。

13区のソヴァージュ通りは、オステルリッツ駅の線路とセーヌ河畔の空き地の広がる地区(フルトン通り、ベリエーヴル通り)の間に位置していて、首都の夜の最も驚異的な眺めを見せてくれていたのであるが、それが、陰気な人々を住まわせるために郊外に立ち並ぶつまらない建物のいくつかに——昨冬から——取り囲まれている。

あまり知られないけれども、シャンゼリゼとその灯よる生き生きとしている通りの消滅を、われわれは嘆く。

われわれは廃墟の魅力に執着しているのではない。しかし、それに代わってそびえ立つ市民兵舎は、ダイナマイトで爆破したくなるほど無意味な醜さを持っている。

『ポトラッチ』は編集部連絡された住所のいくつかに送られます。

『ポトラッチ』編集長 アンドレ=フランク・コノール  
パリ6区、デュゲ=トゥルアン街15番地

\*1: 24時間で 古典主義演劇における「三単一の法則」の1つである「時の単一」のことを言っ

ていると思われる。「時の単一」とは、戯曲が扱う物語は1日（24時間）以内に完結する出来事でなければならない、というもの。

**\*2**：ディエン・ビエン・フー　ベトナム北部、ラオス国境近くの山間にある都市の名であるが、ここでは、当地で1954年5月にベトナム軍がフランス軍を降伏させた事件を指す。フランスの植民地であったベトナムでは、1945年進駐していた日本軍の敗退の直後に、ホー・チ・ミンがベトナム民主共和国の独立を宣言したが、フランスはこの独立を認めずベトナムに侵攻し、インドシナ戦争が始まった。戦争は長引き、フランスはアメリカの軍事援助に頼るようになったが、54年5月、ディエン・ビエン・フーで大敗、同年7月のジュネーブ協定でフランス軍はインドシナから撤退し、フランスの植民地支配に終止符が打たれた。しかし共産主義封じ込め政策をとるアメリカは、南ベトナムにベトナム共和国を発足させ、大量の軍事的、経済的援助を行ない、その後の第二次インドシナ戦争（ベトナム戦争）へと至ることになる。

**\*3**：ソヴァージュ通り　パリ13区、オーステルリッツ駅の南のセーヌ川近くにある通り。

## モロッコ内戦へ向けて

モロッコ\*1で都市住民の進歩的な部分と、フランスによって利用されている封建的な部族との間で暴力が日増しに高まっているときに、真に革命的な少数派の行動が遅延してはならない。

革命的な少数派は、まず初めに王朝の民族主義の主張を支持することによって、今すぐ運動の基盤をより重大な蜂起へと導くことができるが、その際、その介入をモロッコのプロレタリアート全体の階級意識の自覚に左右されることはない。

そのような自覚は、今始まりかけた危機の中では、歴史的には何の役割も演じないだろう。別の勢力によって別のレベルで（反フランスのテロリストとか宗教的狂信者とか）開始される闘争を実現するなかで、そのような自覚を引き起こすことを試みなければならない。自由への戦争は暴動がきっかけとなって推し進められる。

レトリスト・インターナショナル

## へぼ絵描き

人間の建造物の外部装飾に多色配合を使うことは、いつでも、1つの文明の絶頂またはルネッサンス〔=再生〕を画することであった。この分野におけるエジプト人、マヤ人ないしはトルテカ人\*2、あるいはバビロニア人などの作品は、全く、あるいはほとんど、残っていない。しかし今でも話題になる。

したがって、建築家たちがここ数年来多色配合に回帰するのを見ても、われわれは驚かない。しかし、彼らが精神的に貧しく創意に乏しく、ありきたりの人間味に全く欠けているということは、少なくとも嘆かわしいことではある。多色配合は、現在のところ、彼らの無能力を覆い隠すことにしか役立っていない。パリの150人の建築家を対象に実施された調査から選んだ2つの例が、そのことを十分に証明している。

3人の若い建築家（22、25、27歳）の企画。彼らは自分たちの才能と斬新さに自信を持っており、当然ながら、ル・コルビュジエの崇拜者である。オーベルヴィリエ〔パリ近郊、セーヌ・サン・ドゥニ県の都市〕で。——そこはこのうえなく不運な場所である。というのも、悪趣味な陶芸家レジェ\*3に敬服する若者が、すでにそこで例によって馬鹿げたことをしでかしたからである。——それは、直方体である。あまりに平板だと見なされた外壁をしかるべく「遊ばせる」ために、外壁に1メートル×60センチの黄色いパネルと紫のパネルを交互に何枚も取り付ける

つもりである。パネルの位置を選ぶのは職人に任せるつもりである。いわば、客観的偶然だ。

でも、完全に「自動の」建築が初めてできるのはいつだろうか。

比較的有名な建築家（45歳）の企画。

ナントの近く。学校「ブロック」。2つの直方体が、お決まりの運動場と箱入りの見事なミニ・オレンジの木によって分離される。右の建物は、男子側で、2メートル×1メートルの緑と赤のパネルで覆われる予定である。左の建物は、女子側で、同じ大きさの黄色と紫のパネルで覆われる予定である。ここに取りあげた建築家たちは、このお見事な色の氾濫を、セメントの薄いパネルを用いて実現しようとしている。彼らは、その材料が塗料に含まれる化学反応物質に触れているとどうなるかをほとんど完全に無視している。オーベルヴィリエでは、たった1つの雨樋が6階建ての建物の外壁を雨から守ることになる。ナントでも無頓着さは同じである。もっとも3階建てでしかないが。

紫がどれほど不快な影響を及ぼす（アンフリュアンシエル）か、一般に紫がどんな儀式に関与するかは、誰でも知っている〔紫は葬儀の色である〕。やがて汚れた黄色と色あせた紫がどんな配色になるであろうかは、誰でも予想がつく。だからこれらの例にはコメントなど不要であろう。

インタビューを受けた建築家たちの大半が、多色配合に興味を持ったとき、黄色と紫、あるいは赤と緑——現代にとっては少々「若い」配色だ——しか使おうとしないことを知ったら、人が思い浮かべるのは、現在の建築の探求の貧しさだけだろう。

しかしながら、ユニヴェルシテ通りの建築家（45ないし50歳）とヴォージラル通りの建築家（同じ年齢）は、大ぼらを吹かずに、もっと面白い構成を企画している。前者は、アメリカ大陸から戻ってきた人で——興味深く思われるので注記しておくが、現在もっとも文明化された建築形態は、フランク・ロイド・ライト\*4と彼の「有機的」建築のように米国から、あるいはリヴェラ\*5と彼の手がけた都市のようにラテン・アメリカから、こちらに来ている——、彼は、特に金持ち向けの別荘を建築しており、タイルからオランダ煉瓦に至る確かな材料を使って、明るい色調の仕事をしている。後者も同じ色合いの仕事をしているが、しかし、低家賃の公団アパートのようなものを手がけている。それゆえ彼の探求には限度があり、ときおりセメント——それが「ジルソン・ブロック」でない場合であるが——の助けを借りざるをえないはめに陥っている。そのことは彼にとって、また彼以外の人々にとっても、残念なことだろう。

『ポトラッチ』本号の執筆者は

M=I・ベルンシュタイン、A=F・コノール、ムハンマド・ダフ  
G=E・ドゥボール、ジャック・フィヨン、ヴェラ、ヴォルマン

## 今週のベストニュース

産業が飛躍的發展を遂げつつある西ドイツは、戦後初めての深刻な社会的騒乱の危機に瀕している。ハンブルクの交通機関と公共機関のストライキは、48時間前から続いているが、さらに

ケルンに広がっている。かくして、ハンブルクに端を発した社会的騒擾は、徐々に西ドイツ全体に広がっていく。そこではすでに100万人以上の労働者が賃上げと労働時間の短縮を要求しているのである。

(『フランス・ソワール』紙、54年8月7日付)

アルジェリアの塙のビラ貼りプロジェクト

ヴァカンスを過ごしにモロッコへ行こう

版元 レトリスト・インターナショナル・アルジェリア・グループ

モリヨン通り36番地\*6

そしてその当時、路上のあちこちに、誰にも消せない文字で、次のように彫られているのが見られるようになった。

謎のライオンを捕まえるための冒険の始まりだ。

遺失物の奇妙な運命は、捜す行動ほどにはわれわれの興味を引かない。聖杯\*7と呼ばれるものは、さんざん噂の種になったあげくに、その上司である神=警視正、および天国=警視庁\*8のお巡りどものもとに戻った。毎日、彼らのうちの幾人かが老衰で死んでいる。信仰告白は威信を失った。

しかしながら、その聖杯を捜した人々はだまされたのではなかったと、われわれは信じたい。彼らの漂流はわれわれに似ているのだから、われわれは、彼らの散歩は勝手気ままで、彼らの情熱は果てしないと思わなければならない。宗教的な粉飾は長続きしない。神話的な西部劇の騎手たち\*9は、人に好かれるためのあらゆる魅力を持っている。例えば、戯れに道に迷うという偉大な能力、驚嘆に満ちた旅、スピード好き、相対的な地理。

卓の形は酒を飲む動機よりも素早く変わる。われわれが使う卓は円形でないことが多い。しかし、「波瀾万丈の城」を、われわれはいつか建築するだろう。

聖杯の探索の小説は、いくつかの面で非常に現代的な行動を予告している。

『ポトラッチ』は世界で最も聡明な読者を得ているか？

『ポトラッチ』編集長アンドレ=フランク・コノール

パリ6区、デュゲ=トゥルアン街15番地

\*1：モロッコ モロッコでは戦後、スルタンームハンマド・ベンユースフが独立運動の先頭に立ち、フランス人とモロッコ人の共同主権を提案する融和的なフランス植民地政府に対して、完全な独立を求めて戦った。あくまで改革案への署名を拒否するスルタンに対して、フランス政府は、

アトラス山地の豪族勢力を動員して圧力をかけるとともに、独立運動を徹底的に弾圧した。53年8月には、ついにスルタンを廃位し国外追放にして、傀儡のスルタンを任命した。これ以降、モロッコ人民は、指導者不在のまま、都市部では自然発生的な街頭デモ、フランス製品ボイコット、反フランス暴動を繰り返すと同時に、山岳部で「フェラーガ」すなわち武装ゲリラ闘争を組織していった。こうして情勢の展開のなかで、それまで独立運動を担ってきた、労働組合に基盤を持つ既成党派「イスティクラル（独立）党」は、大衆に乗り越えられ、指導政党としての地位を失っていった。モロッコの独立は、その後、1956年に実現するが、『ポトラッチ』第8号のこの記事が書かれた時の情勢は以上のようなものであった。

\*2：トルテカ人 10世紀から12世紀（一説には7世紀から10世紀）にメキシコ中央高原とその隣接地方に栄えた民族（または複数の民族の総称）。トルテカ文化の特徴の1つに彩色土器がある。トルテカ人は各地方で盛んに建設、芸術活動を行ない、地方文化の隆盛をもたらした。トルテカ文化の中心地はトゥーラ遺跡とされるが、異説もある。

\*3：フェルナン・レジェ（1881－1955年） フランスの画家。参照。第一次大戦後、機械を賛美する独特のモダニズム絵画を描いていたが、1936年のフランス人民戦線の成立以降、その政策に協力し、社会主義リアリズムとは一線を画しながらも労働者を讃える内容の絵画や壁画を描き、プロレタリア画家と呼ばれるようになってゆく。第一次大戦中の1940年から45年までアメリカに亡命し（この間にフランス共産党に入党）、戦後フランスに帰国してから、50年に連作『建設者たち』を発表して、フランスの画壇に復帰。52年以降はフランス共産党の政策に忠実に活動し、多くの助手を従えて共同で労働者を賛美する絵を描く。

\*4：フランク・ロイド・ライト（1867あるいは69－1959年） 合衆国の建築家。有機的な（オーガニック）建築を提唱し（『有機的建築』1939年）、建築物を居住者と建物との関係だけでなく、周囲の自然環境との関係のなかで捉え、建築物のなかに外部の自然をうまく取り入れたことで知られる。参照。

\*5：ディエゴ・リヴェラ（1886－1957年） メキシコの画家。壁画の画家として有名。1920年シケイロスに出会い、革命後の新時代にふさわしい芸術を民衆のために興そうという考えに共鳴し、メキシコ市を中心に活発な壁画活動を展開した。1930－33年には米国でも壁画を制作したが、社会主義のテーマを描いたため物議を醸したこともある。

\*6：モリヨン通り36番地 パリ15区にある遺失物取扱所の所在地。

\*7：聖杯 伝説上、キリストが最後の晩餐に用い、また十字架上のキリストの傷口から流れる血を受けたといわれる杯。キリストの墓を用意したアリマタヤのヨセフがイギリスに運んだが、彼の死後その杯は行方不明になったとされる。聖杯の探索は、中世ヨーロッパ文学に重要な位置を

占める「アーサー王伝説」の中心的な主題の1つである。この主題を扱った最初の作品は、フランスの詩人クレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァルまたは聖杯物語』（1185年頃）で、以後続出している。

\*8：天国＝警視庁（la Grande Maison du Père）la Grande maison（直訳は「大きな家」であるが、「警視庁」を意味する隠語でもある）と la Grande Maison du Père（直訳は「父（なる神）の家」で、「天国」のこと）をかけた表現。この段落では、警察的なテーマである遺失物捜しとキリスト教的なテーマである聖杯の探索をかけている。

\*9：神話的な西部劇の騎士たち アーサー王伝説において聖杯の探索に出かける騎士のことであろう。そのような騎士は「円卓の騎士」と呼ばれるが、後出の「卓は……円形、云々」は、そのことへの言及である。（蛇足ながら、この時期、映画界では、西部劇とともに、中世騎士物語を題材とした映画がはやった。）

ヴァカンス特別号

芸術家たちの出口

『ポトラッチ』第8号の〔発行の〕間際になって、「限界を超えると、もう制限はない」というタイトルのコラムが削除された。そのコラムは、インドシナでの休戦協定に関してルイ・アラゴンが『ユマニテ・日曜版』紙に発表したある詩の貧しさを指摘したものだ（「どこでも武器を捨てろ、武器を捨てろどこでも」というのがその最後の1行で、途轍もなく奇妙だというわけではない）。問題のコラムは、ルイ・アラゴンに「社会主義レアリストのポンサー\*1」の良き弟子を認めていた。われわれがそれを削除した理由はほかにもあった。

確かにルイ・アラゴンは笑わせてくれるが、われわれはいやなやつらという時に笑うことは受け入れられない。

社会主義レアリズム芸術の理論は明らかにばかげた理論だ。しかしながら、ソ連——あるいはその周辺国——製のそうした俗悪画でも、進化の乏しいプロレタリアートにいくつかの生存のための戦いを意識させうるのであれば、われわれはそれを非具象（ノン・フィギュラティヴ）とか「アンフォルメルの意味を持つ」（ばかばかしい!）とか言われている百千倍も抽象的なまやかしの探究——パリの画廊や「ニュー・ルック」のブルジョワのサロンを埋め尽くしている——よりも価値のあるものと見なす。

われわれはもうフランス詩には関心がない。フランス詩など、ブルゴーニュ・ワインやエッフェル塔といっしょに、みんなまとめて観光業者に任せよう。われわれがそうした詩を擁護しているなどと思わせてはならない。われわれが支持するのはただ、何よりもフランスの労働者の革命意識のサボタージュを見出すのでなければ、楽しく滑稽な調子になり下がってしまうようなスローガン（「わが党は私にフランスの色彩を与えてくれた……」）とは別の、ある種の形式の政治的スローガンだけである。

編集者として M・ダフ、G=E・ドゥポール、J・フィヨン、ヴェラ

われわれの読者は自分で訂正した

A=F・コノールは、書くものの文体のあらがその思想の貧困を隠し通せないでいたが、結局、新（ネオ）—仏教徒、福音主義者、神秘論者という嫌疑で、8月229日、完全に除名された。

われわれの購読者に『ポトラッチ』の新住所を知らせることにする——

パリ5区、モンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ街32番地、ムハンマド・ダフ。

『ポトラッチ』の週刊発行は今月の末に再開する。

第12号は9月28日に刊行されるだろう。

## レトリスト事務所の破壊

「前衛とは危険な職業である」 ジル・J・ヴォルマン

8月15日日曜日、22時30分、無人の自動車が、レトリスト・インターナショナルが利用していることで有名なモンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ街32番地のバー「金の樽」に猛スピードでつっこんだ。客のうち4名が負傷。偶然の幸運から、バーには、事故の起きた時間にそこに集まることになっていたレトリストのうち誰もいなかった。

## キロメートル単位の漂流

『フランス・オブセルヴァトゥール』誌8月19日号に発表された、クリスチアン・エベールの記事は、パリの駐車場不足の問題に対する根本的な解決策として、市内へのあらゆる自家用車の乗り入れを禁止することと、自家用車に代えて大量の廉価のタクシーを導入することを要求している。

この計画はいくら賞賛してもしたりないほどすばらしい。この上なく確かな教育的成果を期待できる、われわれが「漂流」と呼ぶ気晴らしにおいて、タクシーが果たす重要性は周知のことだからだ。

タクシーだけが、移動経路の極端な自由を可能にする。タクシーは一定時間内にさまざまな距離を移動することによって、自動的な逸脱（デペイズマン）の助けとなる。「旅をする者」は、乗り換えのきくタクシーに縛りつけられず、どこでも乗り捨てることができるし、偶然のおもむくままに捨てることもできる。目的のない移動も、移動途中で恣意的な変更も、タクシーの本質的に偶発的な移動経路によってはじめて容易なものとなる。

それゆえ、エベール氏が提案している方策を採り入れれば、とりわけ苛立たしい問題の平等主義的解決の外にも、とても大きな利点を得られるだろう。つまり、それによって、大量の住民が「路線バス」の強いられた道を超えて、これまではかなり費用の要った漂流の一様式にアクセスすることができるのである。

ミシェル・ベルンシュタイン

最初の通りを行きなさい

私は道に迷うことなく歩かたためしが無い。〈大通り〉は〈トリピエ將軍〉と素顔で闘っている（7区）。〈良い知らせ（ボンヌ＝ヌーヴェル）〉というのも袋小路である。

〈東洋地区〉（ポルト・ド・ヴァンヴ）から出発して町全体を再建するまでは、町の秩序は漂流の取り組みに従って変化する。

「ジェリカン詰め召使い延長」通り——かつてのカスカード通り——は、「だれも気づかず、だれもその通りを延長した小路（パサージュ）を遮断できなかった」通り——かつてのメニルモンタン通り——の一部と、オーベルキャンプ通り——その通りはそこに吸収されて消滅することだけを待ち続けていた——の全部を併合し、「ウージェニーよ、おまえのなかで自然が浪費してきた魅力のすべて、自然がおまえを飾りたてる誘惑のすべて、それらを私は一瞬にして見捨てねばならない延長」通り——かつての〈カルワリオ会の娘たち（フィーユ・デュ・カルヴェール）〉通りにぶつかって終わる。

その通りは、後に「どこでも始まることが許された延長」通り——かつてのラシーヌ通り——のエピソードのあたりで、もう1度、見つかるだろう。（続く）

ジル・J・ヴォルマン

## 今月のベストニュース

ストックホルム発、8月23日——昨日、ストックホルムのベルツェリ公園で、警察によると、強い刺激を求める者たちによって扇動された乱闘が起きた。3000人近い者がこの「気晴らしの暴動」に参加した。けが人も多数出て、その内の3名は警察官である。窓ガラスに向かって投げ飛ばされたある男は動脈を切断し、1人の警察官は顎の骨を折った。逮捕者は32名にのぼった。

（『パリープレス』紙、54年8月24日付）

## 調書

われわれに対する新聞の無視の方針は、ある階層の者たちのあいだで口から耳へと一種の誤った神話が広まることでかなり埋め合わされている。

いわゆる知識人界のさまざまな部門からわれわれのところに定期的に届く証言は、同じ人物が同じ確信から定期的に発している誤った噂を元にしたものである。その噂とは、レトリストの行動に対して独裁的な統制を行っているいわゆる「指導委員会」の耐え難い独断だとか、用心棒やありとあらゆる圧力手段を用いているとか、さまざまな取引に手を染めていて、似非イデオロギー的な運動はそのカムフラージュにすぎないとか、いうものである。さらには、気がかりなことに、モスクワやテルアヴィヴの支援を受けているというものまでである……。

その企てがいかにばかげたものに見えようと、ブルターニュ小説とファントマとグザヴィエ・プリヴァス通りとの間のどこかで一種の「レトリスト・サイクル」が形成されているのである。

そして思想にまつわる論争よりも容易にわれわれの信用を失墜させうるこれらの逸話の発明に、グループを除名された者の何人かがその人生と神話癖の能力を捧げてきたらしい。これらはみな、「レトリストがまだ若いうちに殺さねばならない」という有名な言い回し（モーリヤックのものらしい）に比べるとそれほど真面目なものではない。

別の馬鹿者（ピエール・エマニュエル<sup>\*2</sup>）は、1950年のノートル＝ダム復活祭での〔レトリストの〕示威行動<sup>\*3</sup>の後、「主祭壇の階段の上で冒瀆者の頭を踏みつぶしてしまえ」と確かに語っていた。

しかしながら、ただ1度のつまらぬ挑発に延々と時間をかけるわけにはいかないだろう。つい最近のレトリスト全員が出席した集まりで、かなりのエネルギーを投入して、これらの噂を根底からうち負かす必要があるという点で同意が得られた。「出来事に対しては、どれほど懐疑的な者でも怖じ気づかせられるほど真面目な展開を与えねばならない」（ジャック・フィヨンの報告）のである。

その仕事には特別のグループが当たってきた。

L I

## 個人的メッセージ

教皇へ。書類は安全な場所にある。フェスティヴァルの用意ができているかもしれない。

「フランス人の少女」へ。軟らかな草と一緒に戻ってきなさい。

夜、ヴォーバンの家で。われわれは前進する。雲よ、君は前を行け。

## 教会の閉鎖を待ちながら

〔年月の呼び方に関して〕それまでとはまったく異なったスタイルを押しつけようと試みた1793年のあの暦〔＝革命暦〕があったにもかかわらず、「聖なる」という忌まわしい語が、通りの呼称としてパリのあちこちの通りの壁を汚し続けている。

数ヵ月前から、われわれは、会話のなかでも手紙のやりとりの際にも、この呼び名の廃止のためのキャンペーンをして楽しんでいる。

通りの名は一時的なものである。おそらく、〈幼児イエズス袋小路（アンパス・ド・ランファン・ジェジュ）〉（15区、もよりの地下鉄駅パストゥール）のような名を記念に残す以外は、将来、どんな通りの名が残るというのか。

フランス郵政省は今後、公衆の願いを聞き入れ、〔「サン」を取って〕ブールヴァール・ジェルマンとかオノレ通りで手紙が届くようにせよ。

われわれは健全な世論が公衆衛生のためのこの企てを支持するよう呼びかける。

## 心理地理学と政治

わたしは中国とスペインがまったく地続きであることを発見した。この2つの国が別の国であると考えられているのは無知からにすぎない。

ニコラス・ゴーゴル

## 主権を有する人民

わが「民主主義」の雑誌は王族を大量消費している。

この種の雑誌を刷り続けることは、英国での共和制の到来——われわれの何人かはかつて、戴冠式を熱烈に歓迎する馬鹿どもをテレビが歩道に集めた時に、それを訴えたことがある——にとって非常な損失となるだろう。英国女王という長持ちのするメインディッシュがあるのに、痴呆化を旨とする団体は時々、ヴァリエーションを見つけねばならない。ほとんど廃位した王たちの群れが、渡り鳥のように、マルセイユからキプロスまで、地中海周辺に分布して、拍手喝采されている。——ひょっとして、グラームス山脈\*4からも喝采されるのだろうか？

だが、マーガレット王女の浪費（ごくごく僅かな）の物語はわが国の門番にとって退屈なものになり始め、同じ大衆がベルギーのあの嘆かわしいポドゥワン国王\*5のの劣等感に対してかつて1度もそれほど関心を示さなかったことが確認されているのに、わが国の入り口で王族の一家——あるいはそのまがい物——が発見される。亡命法の時ならぬ廃止のおかげで遠くから帰ってきたある男、パリの伯爵の名で知られている男が、たくさんの子孫に取り囲まれて嬉しそうに写真を撮られているのである。

幸運にも、醜いものはあまり売れない。よき臣民の賞賛に浴している8、9人の王女のうち、1人として美しい者はいない。あるいは単に感じの良い者でさえいないのだ（かなり小さな、11、2歳の少女1人は除かねばならないが。とはいえ、その子も、やがてどうなるかわかりだろう）。

それでも、遠い郊外にお屋敷を構えたパリの伯爵は、封地と、主君への誓いと、農奴の身分と絞首台の古き良き時代をまざまざと再現してくれる。

彼の高貴な封主権を思い起こすこと、それは国民議会とコミューンを権力に就けたこの首都の何百万人もの住民に対して細心の注意を払うことである。

断罪された階級の残り滓が結集している。このブルジョワのインテリの王のために、一大潮流をなす意見が形成されつつある。このマンデス＝フランス流\*6の王のために……

われわれは、40年来反動が勝利したところではどこでも、革命イデオロギー、あるいは少なくとも社会的イデオロギーの横領〔＝転用〕かパロディによってそれがなされたことを知って

いる。

たえず続いてきたこのプロセスを知れば、このイデオロギーがその真の終焉を迎えるのを見るのだという確信を強くする。

## アリアドーネは失業中

植物園（ジャルダン・デ・プラント）のいわゆる「迷路」のデカルト的構成とそこにある立て札の記述はだれでも一目で発見できる。その立て札にはこう書いてある――

迷路での遊びは

禁止されています

一文明の精神をこれほど明解に説明するものはないだろう。まさにこの文明をわれわれは最終的に打倒するであろう。

## 民族の序列について習うべき模範

（『第4インターナショナル』誌掲載の、ボリビアからの手紙の抜粋）

「4月9日革命の2周年の記念日は、とても特殊な条件下で祝われた。大衆は革命の道を前進する決意をしているのに、その大衆によって権力の座に就いた政府は、帝国主義を前にして降伏の道をすでにずいぶん進んでしまっている……。

行列の先頭にいるのは、仕事道具を身につけた鋤夫たちで、銃や何本ものダイナマイト、軽機関銃や重機関銃を抱えながら、それぞれの武器を空中にぶっ放す。ダダダダ、と機関銃の音がする。それは、楽しい行為だが、まだたくさんの戦闘が残っている……。

次に来るのは、輸送車だ。銃と重機関銃を満載したトラックや、肩に銃をかついだ労働者たちを乗せ、エンジンカバーの上には重機関銃を付けたジープが、何台もやってくる。

その後には、農民の行列が終わりなく続く。彼らは途方もなく貧しい姿をしているが、意気揚々と歩いてゆく……。農民たちは-労働者がみなそうしているのとは違って銃を肩紐で吊るさずに、すぐ撃てる体勢で、指を引き金に当てて持っている……。」

『ポトラッチ』編集長 M・ダフ

パリ5区、モンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ街32番地

\*1：フランソワ・ポンサール（1814－1867年） フランスの詩人・劇作家。ロマン主義時

代に、ラシーヌとシェイクスピアの両立を唱え、古典悲劇の再興に尽くした。「良識の至上権」を信条とし、ロマン主義の衰退期に『リュクレース』（1843年）で大成功を収めた。

\*2：ピエール・エマニュエル（1916－1984年） フランスのカトリック詩人。代表作に『オルフェの墓』（1941年）、『汝の守り手とともに戦え』（46年）など。第一次大戦中はアラゴンやエリュアールとともにレジスタンスの詩を書いたことでも知られる。

\*3：1950年のノートル＝ダム大聖堂の復活祭での「レトリストの」示威行動 1950年4月9日、頭髪を剃りドミニコ会修道僧に変装したミシェル・ムールが、レトリストのガブリエル・ポムラン、マルオーク・O、セルジュ・ベルナ、ジスラン・ド・マルベールらに伴われ、パリのノートル＝ダム大聖堂の復活祭のミサに忍び込み、セルジュ・ベルナが書いたキリスト教弾劾の文章を読み上げた。彼らは激昂したカトリック教徒に危うくリンチされそうになり、ノートル＝ダム大聖堂から逃げ出したが、ムールとマルベール、ベルナの3名は警察に捕まった。

\*4：グラモス山脈 ギリシャとアルバニア国境付近にあるグラモス山（2519メートル）のこと。

\*5：ボドゥワン国王（1931－） 1951年から在位したベルギー国王ボドゥワン1世のこと。父レオポルド3世は、第二次大戦中、ナチスに協力し、ベルギー国民の激しい怒りの的となった。そして41年には家族ともどもドイツに逃亡せざるをえなくなり、戦後も1950年まで故国に戻れず、ベルギーへの帰国をはたした時も、国民の激しい抗議行動のまえに退位を余儀なくされ、息子に王位を譲った。「ボドゥワン国王の劣等感」とは、これらの経緯を指しているものと思われる。

\*6：マンデス＝フランス流 ピエール・マンデス・フランス（1907－82年）は、当時の急進社会党左派の首相。ディエン・ビエン・フーの陥落を受けて1954年夏、社会党・MRPなどの支持を得て首相に選ばれ、インドシナ戦争の終結を実現した。しかし一方で、アルジェリアで始まった反仏武装闘争を武力で押さえつけるためにド・ゴール派のジャック＝スーステル総督を任命するなど、北アフリカの植民地問題に対しては何もなしえなかった。1955年2月辞任。

## 1、1969年のシュルレアリスム

「この手の文学主義者は何の役にも立たないな」——と、その連中を見ながら私は思った。彼らの黒いヘルメットには、「コントロール・アタック」と赤ペンキで鮮やかにレタリングされていたからである。1970年の夏、場所は都内の某大学構内。K派の襲撃とそれに伴って予想される機動隊導入に備えて直ちに支援に駆けつけ、防衛のための部隊編成を急いでいた時のことだった。たぶん彼らはこの大学の仏文系の人たちであり、「コントロール・アタック（反撃）」とは1935年にアンドレ・ブルトン、ポール・エリュアールらのシュルレアリストたちが、ジョルジュ・バタイユ、ミシェル・レリスら後の「社会学研究会」グループと共に結成した「革命的知識人闘争同盟」という反ファシズム・グループの機関紙名であった。

「気持ちは分かるけどね——」というのが、正直なところだったと思う。何故ならば既に私は、この前年1969年の9月か10月ごろの新宿の「ピット・イン」という行きつけのジャズ喫茶の大きな壁の一隅に、当時としては実にていねいな2色のサイケデリックな文字で「超現実主義革命」などと書かれた落書きがあるのを発見していたからである。美大系の学生の手によるものだったのだろう。確かそのすぐ隣にはまた別の手で、「政治の季節への移行を嫌って／69年秋、京大全共闘」といった生々しい言葉も書き殴られていたと思う。「それにしても、30年以上前の外国のスローガンを翻訳語そのままに引き写してしまう、この何とも言えない空虚さ」と、自分自身相当なアヴァンギャルド・フリークだった18歳は生意気にも感じ取っていたようである。幾人かのシュルレアリスト詩人たちの転向と戦中の空白をはさんで50年代末に再開されたこの国におけるシュルレアリスムの紹介と研究は、60年代には活況を呈していたと断言していいだろう。そしてそれが60年代後半には、時代の推移と共にようやく政治的な側面へも及んでくるようになっていたのである。

トロツキズムが、学生運動という形で初めて大規模な大衆運動として登場した時代だった。ファシズムに向かった未来派にではなく、フロイトの精神分析に衝き動かされてダダの瞬発性から抜け出し、1920年代にフランス共産党を批判してトロツキーに接近したインターナショナルな芸術運動としてのシュルレアリスムに関心が集まるのは当然だったと言える。1960年代とは、ある意味で「黄金の20年代」の世界的な規模での再演、あるいは幕間の休憩（第2次世界大戦）を挟んで再開された物語の後編だったのである。（この国での前編はごく短いエピソードに過ぎなかったが）。ただし前編と後編では肝心のステージが、その舞台装置が違っていたというべきだろう。ベトナム戦争を背景にした高度経済成長がピークにまで昇りつめようとしていたこの頃、私たちの目の前に出現しようとしていた消費社会は、戦争直後の「必要としての消費」を超えて、より繊細で含蓄に富んだ「消費の美学」「美学の消費」を支える思潮を求めていたと言える。私たちの消費感性を戦後一貫してリードしてきたアメリカニズムは、今まさにベトナムのジャングルと泥沼の中に黄昏ようとしていた。アメリカの裏文化としてのニューヨークやサ

ソフランシスコのサブ・カルチャーの歴史はまだ浅く、正統的なヨーロッパ文化がかつて世界中に向けて振るっていた絢爛たる指導力は、ダダによる「死亡宣言」を待たずとも、シュテフォン・ツヴァイクの言葉を借りれば既に1910年代には「昨日の世界」としてその本質的な役割を終えていたとされる。ヨーロッパの裏文化の包括的なインデックスの趣を持つシュルレアリスムの全振幅がここに呼び戻されただろう。たしかに嫌悪と自発性だけを原理にしたようなダダイズムに比べて、夢、狂気、偶然、黒いユーモア、隠秘学などをめぐって意識下に広がる想像力の体系的探求を目指したシュルレアリストたちの運動は、「ヨーロッパ文化の内なる〈他所〉の発見を促す、一種の文化革命さえ内包していた」（巖谷 国土）と見なされていたのである。実際に20年代のパリに滞在しバタイユらと接触していたヴァルター・ベンヤミンは、そのような可能性を敏感に掴み取っていただろう（「シュルレアリスム」1929年）。そして60年代の大混沌の中から脱け出して70年代の整理と成熟へ向かおうとしていた「消費社会の資本主義」にとってもまた、余暇と消費の領域をめぐる一種の「文化革命」が待望されていたのである。

60年代から70年代にかけてのシュルレアリスムの世界的な流行は、このような舞台＝戦場の上で展開されていたと言える。あらゆる支流、除名者、世界各地の共鳴者たちに関する実にたくさんテキストや資料が翻訳され、出版マーケットに溢れていった。そして、一言で言い切ろう。”狂気”とペイントされた黒ヘルメットの脱ぎ捨てられた後の70年代初頭の東京の街頭には、会田佐和子デザインによる”シュール”なパルコのポスターが大量に現れていたのである。

もちろん、1969年の私がそこまで見通していたわけではない。ただ、この種のアバンギャルドかぶれの活動家たちが操る論理の分析力や行動における戦闘力には少々情けない思いをさせられてきたからである。具体的なこの国で、この街で、私たちが生きて血を流しているこの空間で、「超現実主義革命」とは何ものも意味していなかった。こうして「コントロール・アタック」誌に展開された論陣とその短い活動の帰趨を紹介した先駆的な雑誌『パイディア』（竹内書店刊）などもまた、70年代に入ってから、バタイユ特集に続いてフォーリエ派から転向したカバラ主義者エリファス・レヴィのようなユーロ神秘主義潮流へとその編集の重心を移していくことになる。実はエルンスト・ブロッホが20年代に指摘していたように、古代から中世にかけて隠秘学的知そのものが極めて重要な思考と身体の世界だったと言えるのだが、1972年以降つまり連合赤軍による一連の闘争以降の決定的な敗北過程で、オカルティズムへの志向が多くの人々に帰るべき、そしてそこに没入して眠り込むべき「内部世界」への道標を提供していったことは否めない事実であった。従ってこの時以来、トロツキーとブルトンのメキシコでの邂逅というエピソードを超えて、シュルレアリスムの主張が20年代から70年代にかけてのグローバルな政治社会空間や表象空間の変動する網の目の中で生じさせた意味作用、畢竟シュルレアリスムに孕まれていた全体革命としての可能性不可能性のその枢要部について語られることは、ほとんどなかったとすることができるだろう。

## 2、ジャズの中へ、ジャズとして

だが、平岡正明がいた。あるいは相倉久人と平岡正明を双頭の龍のようなイデオログとするジャズ運動があったと言うべきである。

「今世紀の最も重要な芸術運動の2つ、しかも同時並行現象たる超現実主義とジャズの間——双方の華々しいピークが、スペイン人民戦争前とバップというぐあいにはずれているために、ジャズをシュールレアリスムより後に来たものと理解しがちだが、両者とも同時代に別々に深化していったのである——何らかの関連を見出そうとする試みは、じつは2人が出会った時から相倉久人と俺にはあった」（「裏返された手袋」より、『ジャズより他に神はなし』三一書房、1971年7月刊に所収）。

「シュールレアリスムはジャズの予感である」これが、この論考初出時につけられたサブタイトルであった。掲載されたのは、1969年3月発行の『ジャズ批評』誌5号。著者によれば脱稿は1月20日。つまり全共闘の活動家たちによって東大安田講堂に築かれていたバリケードが8千人の警察機動隊の攻撃によって落城した、その翌日とされている。

職業的な音楽評論家であった相倉久人と特異な政治イデオログといえる平岡正明が、「ジャズ」そのものとしての思想形成を目指して強力なコンビネーションを組む以前にも、もちろんジャズ評論の類いは存在していた。しかし大半は、印象スケッチのようなレコード・ガイドや業界情報、そして文芸批評の遅れた亜流にすぎなかったと言える。これにシニカルなポストモダン評論の類いを加えれば、その情景は現在も何ら変わりはない。これ以前、既に10代の初めから「教室の音楽」としてのクラシックではなく「路上の音楽」としてのロック・ミュージックの洗礼を受けて育ってきた私のような者にとって、ようやく1961年ソニー・ロリンズの2度目の来日の頃から本格的に聴き始めたジャズには、まだまだ「ナイトクラブ・ミュージック」としてのショー・ビジネスの臭いが強すぎたのだと思う。そして14歳の中学生が、当時市内でも数少なかった前衛ジャズのかかる地下の薄暗いアジトのようなスポットに出入りするの、やはり少々はばかられたのである。1966年の私はサン・ラーも、アーチャー・シェップも、もちろんマルコムXも知らなかった。

むしろ、こう凝縮して表現すべきだろう。何よりも、1967年春に現れた平岡正明「ジャズ宣言」（『ジャズ批評』誌1号所載）の中にぶちまけられていた砕け散るような言語のビート感こそが、私たちの世代全体に、「ナイトクラブ」ではなく「路上の音楽」そのものとしての黒人ジャズの姿を最初に、そして震えるように鮮烈に意識させてくれたのだ、と。現実に私が黒人前衛ジャズに没頭するようになるのは、このマニフェストに接した直後であった。そしてこの場合の「路上」とは、ロンドンのカーナビー・ストリートでもニューヨークのイースト・ヴィレッジでもなかった。それはマンハッタン・ハーレム地区の、シカゴ西地区の、そしてデトロイトやワッツやニューアークの黒人ゲットーで激しく展開されていた「暴動する街角」のことであった。既にこの時、アメリカ黒人社会を揺さぶっていた地殻変動の行方を決定的に左右するのは、黒い中産階級の交渉団体によるいかなる折衝でもなくゲットーに展開する「路上の力学だったと言える。ジャズは確かに、ブルースのように直接黒人コミュニティの街路で演奏されて育ってきた音楽ではない。しかし、テクニクや形式の上で最高度の蒸留過程を経て成立し、しか

も白人社会との商業的な接点でギリギリの緊張の中で葛藤してきた音楽だからこそ逆に、この躍動する『路上の力学』の頂点で生じた危機をより熾烈に、より先行的に、そして思いもかけぬ予言的な深さをもって「音楽の力学」として提出しようとしていたのである。このダイナミックな逆説の過程をマイクロスコピック（顕微鏡的）に、そして世界史的展望の下に初めて分析してみせたのが、相倉久人であり、平井正明であったと言える（相倉久人については拙著『破壊的音楽』所収の「相倉久人の1970年代」を参照されたい）。

『ジャズ宣言』は言うだろう。

「ロリンズの奇跡的な力業を除外すれば、ジャズの歴史に後退戦というものはなかった。後退すればジャズの尾についてくる商業主義にからめとられる。前衛ジャズの方にしか突破口はなく、したがって最良のエネルギーはそこに集中され、最高の燃焼はそこでおこなわれるだろうことは認める。しかしそれはブルースの力に直結したものだろうか？ いままさに、ブルースに革命をおこすべきではないか！」

「ブルースは奇跡的なことだが、ひとつの、あるいは最後の共同体だった」「われわれの眼前で進行しているやや錯乱した前衛ジャズのフレーズが伝えてよこすものは、この共同体の崩壊ではないか。この展望はひどく絶望的である。絶望的な眺望をブルースは喰えるか。それともブルースが喰われるか」

「にもかかわらず……根底的な意識の転覆を招来する力はジャズから上の「芸術」にはない。前衛演劇は商品である。アブストラクト絵画はアカデミーの囚徒。最良の革命、的精神はジャズの中に後継者を見出すだろう。……ジャズこそ、ひとつの永久革命にほかならない」（『ジャズ宣言』1968年、現代企画室より1990年復刊）。

この25年前の文体に今もそれほど錆が生じていないことに、まず私たちは驚嘆すべきであろう。「ブルース」と「ジャズ」を他の任意の音楽ジャンルに置き換えてみれば、この論旨はこの4分の1世紀に非西欧世界の音楽に生じたすべての事態に当てはまる。何よりも、現在ただ今眼前で起こっている出来事へのこの強烈な疑い。ほとんどアドルノ的とも言える頑迷さ。彼は深い愛情を込めて、しかし遂に前衛ジャズを信じていないのである。（平岡の耳の快楽としての駿馬が走り回るその中原は、チャーリー・パーカーからアート・ブレーキーに至るバップの沃野にある。これについては後述）。そして初期マルクスの紹介と研究が進んだ60年代に特有の疎外論的なあるいは共同体論的な発想からの、飛び抜けてクールな距離の取り方。さらに、そのノマディックな言語の俊足と強力な分解力と結晶性。こうした文体つまり「反乱の文体」を伴った批判的思考の特徴は、初期シチュアシオニストことにアスガー・ヨルンやギー・ドゥボールのポレミックな論考とも同時代的な共鳴を引き起こしていたとすることが出来るだろう。（平岡の最初のジャズ論が発表されたのはおそらく1961年である）。確かにスペクタクル批判はやや疎外論的であるとはいえ、シチュアシオニストによる「熱狂性」への意識的な脱臼を除けば、芸術の破棄と現実の切り立った境目での思考、戦後前衛アートの政治的不能への前衛的嘲笑、都市的な街路の立場への執拗な執着、そして犯罪への傾斜といった論理の構えの上でのいくつかの重要な共通点も見出せるのである。そしてここには、パリと東京のアヴァンギャルドたちを覆うシュルレアリスム運動の巨大な影が、そして、それに飽き足らない者たちによるシュルレアリスム批判をめ

ぐる2つの鋭角的な方向が示されていたのである。

「おれは超現実主義を蒙古馬にまたがって駆けぬけていた」(出てきた馬がまっくろけのけ)より『ジャズより他に神はなし』所収。)

平岡正明は「ジャズ思想家」であるとともに、というよりそれに先行して、第1次ブントの中から生み出された奇妙な小分派「犯罪者同盟」のイデオログとして極めて異例な東方のシュルレアリストだったのである。『ジャズ宣言』以前に出された初期著作、『鞭韃人宣言』『犯罪あるいは革命に関する諸章』等に残されたオートマティックな檄文の数々を振り返ってみればそれは明らかであろう。彼のこうした「方法としてのシュルレアリスム」は現在に至るまで貫かれる。さらに犯罪者同盟だけでなく、高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之による「ハイレッド・センター」や同じくブント分派「セクトNO. 6」といった、60年安保後の政治と芸術の境界線上に輩出したいくつもの秘密結社的小グループの行動と発想は、レトリストやコブラや初期シチュアシオニストのそれに酷似していたと言わなければならない。その共通する“いかがわしさ”においてもまた十分に。

### 3、屍体処理法について

「シュルレアリスムの屍体をどう処理するのか」――。

これが、1966年にアンドレ・ブルトンが実際に屍体になってしまうずっと以前に、戦間期の革命的シュルレアリスムに1度は強く魅了された事のある者たちが肌で感じ取っていた共通のテーマだった筈である。パリであろうと東京であろうとニューヨークであろうと。モーリス・ブランショは早くも1945年にこう述べている。「シュルレアリスムは消滅したのだろうか。それはつまりここやあそこに在るのではなく、至る所にあるということだ。それは亡霊であり、光り眩い強迫となったのだ」(『シュルレアリスムについての考察』)。

「屍体処理」の方法は大別して2種類あったと言える。いささか比喻めいて語ろう。1つは、屍を直ちにパリからニューヨークに空輸し、さらにアメリカ中西部の広大な砂漠の強烈な陽光の下に運んでカラカラに乾燥させ、粉々に打ち砕き、取って返してヨーロッパ諸都市の地理の中に砂のように散布してしまう方法。フロイトの精神分析装置としての理論モデルからブルトンが着想した「下意識」(フロイト自身は決してそうした実体化を容認しなかったが)の意味の深みは、一瞬にして洩びる。こうしてマンハッタンに到着したダリは摩天楼都市のスカイスクレーパーに自らの絵画的幻視力を震撼され、亡命したシュルレアリストたちと接触してドリッピングの手法をマックス・エルンストからインスパイアされたジャクソン・ポロックは、内面へ遡行するシュルレアリスムの「弱さ」をアメリカの巨大空間に晒すことによって超えようとするだろう(宮川淳『引用の織物』や宇佐美圭司『絵画の方法』等の考察を参照されたい)。ブルトンが夢想した想像力のフィエスタは、既にアメリカ型消費社会のなかで「死んだ表象」つまりエクゾティックな商品のダンスとして実現されていたのである。オートマティズムの方法による詩の革新に似た言葉の細片は、サブリミナルなコピーライティングやDJの即興的な語りとして街中に溢れて

いた。この生煮えの「表象」に、より徹底した「死」を突き付けること。それも強度と崇高と巨大さを売り物にしたニューヨークのアヴァンギャルドたちとは全く別の仕方（おそらくここに80年代のアメリカでシチュアシオニストが蘇った理由がある）。すなわち、表象としての芸術の破壊がそのまま表象を越える何ものかの生成でもあるような、その切り立った稜線を商品社会の真っ只中で全力で縦走すること。第二次世界大戦後、駐留米軍やマーシャル・プランという形でヨーロッパに侵入したアメリカナイゼーションがとりわけそのような戦略を要求したといえる。言わばヨーロッパの地でヨーロッパの表象をアメリカの地でアメリカの表象を叩き潰すこと。——これが、ドウボールたちシチュアシオニストが選び取った屍体処理法だったのである。シュルレアリスム批判はシチュアシオニストの出発点であり、その発想の根幹を形作った最も重要な契機だった。やや思弁的な『スペクタクルの社会』よりも、綱領的文書と言える『状況の構築とシチュアシオニスト・インターナショナル潮流の組織・行動条件に関する報告』を見られたい。ここには明らかに、ヨーロッパの「密教」として表象の源泉と化していったシュルレアリスムに対する、レトリストの創始者イジドール・イズーらを通して再導入されたトリスタン・ツァラのダダ的破壊力が強力に作用していただろう。（ツァラについては塚原史『言葉のアバンギャルド』、イズーについては、同じ著者の『プレイバック・ダダ』を、ダダ的哄笑による爆破力についてはドミニク・ノゲーズ『レーニン・ダダ』を参照）。

もう一つの処理法——それは南に進路を取ることであった。まず屍体を油紙で包み、マルセイユ辺りから出航する新大陸行きの船の甲板に乗せる。地中海を西へ、ジブラルタル海峡を通り西アフリカ沖を南下、カリブの島々を伝って赤道圏へと向かう。この海域特有の嵐と熱風に晒されて、傷んだ屍は確実に腐乱していくだろう。その耐え難いまでの腐臭。だがシュルレアリストたちの地下世界にあっては、「腐った屍体」こそ至高の強度を帯びた聖なる隠喩そのものだった筈である。シュルレアリスムとは、言わば腐った羊皮紙の断片に辛うじて書き遺された地下の文学史だったのである。地中海、マグレブ海域から、アフリカ西岸、カリブ海、そしてラテン・アメリカへと続く航路上には、腐肉の滴りが点々と残されていく。「第三世界」から現れたシュルレアリストたちとして。エジプトのジョルジュ・エナン、モロッコのロベール・ベナユーン、セネガルのレオポルド・サンゴール、マルティニークのエーメ・セゼール、キューバのウィフレード・ラム、メキシコのオクタビオ・パス、ペルーのセーサル・モロ、チリのマッタ……。とりわけフランス領マルティニーク島から現れた黒人詩人エーメ・セゼールがいた。

聴いてみたまえ白人の世界を  
莫大な努力にすっかり疲れはて  
その手に負えぬ関節が厳しい星の下で軋んでいるのを  
青い鋼の硬直が神秘の肉を貫いているのを  
聴け、奴らの裏切りの勝利が敗北を告げるのを  
聴け、壮大なアリバイに奴らが惨めによろけるのを

——『帰国ノート』1939年より

あたかも全ヨーロッパを代表するかのようにして、ジャン＝ポール・サルトルがこれに応えるだろう。「セゼールにおいて、シュルレアリスムの偉大な伝統は完成され、決定的な意味を持ち、同時に破壊される。ヨーロッパの誌の運動であるシュルレアリスムが、1人の黒人によってヨーロッパ人から盗み取られ、ヨーロッパ人自身に向けられた」（『黒いオルフェ』より）——と。確かに、優雅な屍体と化した最後のヨーロッパ思想としてのシュルレアリスムに対する、植民地世界から現れたもう1つの処理法がここにあったと言えるだろう。

この流れに平岡正明たちが介入する。

まさに1969年、相倉や平岡に加えて、アルジェリア独立革命を扱ったジッコ・ポンテコルボ監督の『アルジェリアの闘い』を先鋭に論じた映画批評家・松田政男、後にパレスチナ・アラブでの運動に投じた映像作家・足立正生、そしてシナリオ作家佐々木守ら、70年代に入って「批評戦線」と名づけられた思想＝運動グループを形成してゆく一群の知識人たちを中心にして議論されていたのが、自分たちの眼前に現れたセクシャリティの映像やジャズの噴出そして初歩的な左翼暴力を彼方で戦われていた「第三世界」の武装した革命運動へと繋いでゆく「ミッシング・リンク」（失われた輪）の問題であった（この時代のラディカルイズムの一端が、全世界的に映画や音楽を媒介にして出現したことに注目しよう）。最も非政治的な位置にいたと思われる相倉久人は、その隠された「環」についてこう語っている。「ジャズを強度な意識の緊張をもってする下意識のホットなオートマティズム（自己噴出）と規定することによって、シュールレアリスムを後にジャズにとって代わられる思想の出現を予感したものであったという風に位置づけ、フランツ・ファノンの暴力論を媒介に、ジャズと暴力を通底する……」（1969年1月20日付『日本読書新聞』紙上での発言より）。

60年代の資本主義諸国に現れたラディカルなアートと植民地の革命運動とを地下で繋ぐ第三世界のシュルレアリスム。こうして遂にフランツ・ファノンが登場する。事実若きファノンは、同じマルティニーク島出身のエーメ・セゼールによって刻み込まれた詩的ビートに深くインスパイアされたいだろう。その痕跡は引用といった明示的な影響関係を越えて、何よりもファノン自身の叙事詩的、黙示録的文体の肉質そのものに深く刻印されていたと言える。その意味で、セゼールやファノン本人に「黒いシュルレアリスト」という自己認識はおそろくなかったとはいえ、ブルトン——ファノンという不可視の連続線もしくは断裂線は確実に存在したのである。そして1940年代から60年代にかけてのフランス文化圏で、セゼールからファノンへと向かう黒い思想革命の抽出過程と、アンリ・ルフェーブルからギー・ドゥボールへと向かう日常生活批判からシチュアシオニストへの思想展開は全く同時代の出来事だったのである。初期シチュアシオニスト文書に度々その署名が現れる2人のアルジェリア生まれのアラブ人メンバー、ムハンマド・ダフとアブドゥル・ハティブが59年、60年と相次いで脱退したあと、時あたかもフランス本国での武装闘争を開始していたFLN(アルジェリア民族解放戦線)に身を投じたのかどうか全く詳らかにしないが、構造主義と並ぶ「最後のヨーロッパ思想」としてのシュルレアリスムへの2つの方向からの批判と超出の試みが、ほとんど交差するようにして遂行されていった同時並行現象だったことは間違いないだろう。この2つのラインの交点に「68年5月」が爆発したと言っている。にもかかわらず、当時私たちはこのことを全く知ることができなかったの

ある。むしろ5月革命はシュルレアリストたちの主張の実現であるかのように理解された（この点で津村喬のルフェーブル導入だけが際立っていただろう）。これは、この国におけるフランス思想研究者たちの思想の質の問題であると共に、日仏帝国主義による植民地政策のあり方とその戦後処理の方向性の違いに起因する。政治的軍事的に植民地を維持したフランスと、それらを放棄したアメリカの後方で経済収奪に専念した日本として。植民地学の派生物は人類学だけではなかったのである。ヨーロッパ総てのアバンギャルド・アートは近代初期における「未開」の衝撃と共に生じたと言える。シュルレアリスムのヨーロッパ性に対する批判は、日本においては全く不十分であった。

#### 4、黒い実現・白い破壊？

実にこうした思考空間の微妙なズレの中から、平岡正明の「フランツ・ファノンのビーバップ革命理解」が著される（初出1975年、決定稿は『歌の情勢はすばらしい』1978年に収録）。これこそまさに、平岡ジャズ思想の最高峰にしてかつ最後の達成だったと言えることができるだろう。以降彼によって書かれることになる饒舌な音楽論の総ては、基本的にここで描かれた認識の構図に沿って語られることになる。そしてこの達成においてこそ、平岡正明の極めて独異な音楽思想の帰趨を制することになるその可能性と不可能性の中枢部が露呈されようとしていたのである。

平岡正明は言う。長いが、若い読者のために引用しておこう。

「（『地に呪われたる者』第4章「民族文化について」に付された＜民族文化と解放闘争との相互基盤＞の中で）ファノン是这样いっている。——バップ革命は黒人革命に先行した、と。バップは革命である、と。（中略）仏領マルチニック島に生まれ、アルジェリアに赴任し、祖国フランスを脱走してアルジェリア革命に投じたこの黒人革命家が、バップ革命を、第三世界革命に先行する黒人の世界観の一大変化の証拠としてみていたということだ。バップ革命は“かならずしも全面的に植民地の現実に関わるものではないゆえに”、先進国アメリカ内部の黒人における世界観の大変化であるがゆえに、かえって重要だ、と認知していたことだ。この発想はマルクス主義に特徴的なものである。すなわち、今日イギリスで起こっていることが、明日ドイツで起こり、明後日世界中で起こるがゆえに、イギリスで『資本論』を描いたマルクスの発想を継承し、かつ植民地解放闘争の現状においてバップを見つめたファノンの発想が、植民地インドではなく大英博物館で資本主義の分析を行ったマルクスを超越していると言おう。……アフリカ人の実存とアメリカ黒人の実存とに架橋する努力を、ビーバップ革命の中に、1つのモデルとして見出したという点でファノンは驚異的である。……第2に、明日得会をゆるがす植民地革命の予感を昨日のバップ革命に見るファノンは、バップ革命を、ニューヨーク52番街の出来事に限定せず、合衆国南部の敗北の一つの結果としてみていることだ。すなわち、ブルース地帯の、近代奴隷制生産社会の敗北の一つの結果として。このことによって、ファノンは、バップ革命を音楽上の孤立した現象とみなさず、合衆国黒人の歴史全体の上に据えなおしているのである。……そして

第3に、ファノン、5杯のウィスキーにイカれた老いたるニグロの繰り言を擁護するのは50年後の白人たちかも知れぬという態度を、それから15年後の、日本におけるブルース・ブームの顔面に叩きつけていることにわれわれはドキッとしていいはずだ。かれは、一言に要約して、ブルースの擁護者は白人になるだろう、という痛烈な逆説を提示した。……ファノンは、植民地世界の、古い、伝統的な芸術様式が、植民地人民の覚醒によって変化しはじめたとき、いちばん早くそれに気づき非難の声をあげるのは帝国主義本国の専門家、民俗学者であるとも述べている。(中略)しかし、ファノンは言う。黒人が、世界と、世界における自分の意味(あるいは位置)をみつけた時から、彼のトランペットはよく透り、その声が澄んでくる、と。じつにそのことがバップ革命の本質である

これは、フランツ・ファノン自身が身をもって体現していった植民地知識人の転回をめぐる屈曲した弁証法を、現実の黒人音楽と黒人運動の進行の中にダイナミックに掴み切った見事な把握というべきだろう。ここでバップ革命及びチャーリー・パーカーとは、平岡によってファノンの思想とその行動そのものに重ね合わされている。ファノン——パーカーというラインは、ファノンのテキスト自体の分析を通してダイレクトに連結されたと言える。当時広汎に読まれた『地に呪われた者』だが、そこに補足されたこの小さな付章を、このような形でクローズ・アップさせた者は他には決して現れなかったのである。おそらく国際的なレベルでもそう言えたと思う。確かに、独立したアルジェリアは国境を超えたアフリカ革命へとは向かわず、ソ連への依存の後再びヨーロッパ資本主義の従属下に置かれ、その社会革命は遂に失敗に帰しただろう。そこからイスラム復興運動(それを原理主義と呼ぶべきではない)も台頭した。しかし、その現在の「出口なし」の状況は、同じ支持基盤から現れた筈のライ・ミュージックを無惨にもムスリムの戦闘分子が自らの手で扼殺しつつあることに表されていると言える。ヨーロッパのネオ・ファシストさながらに。スーパースター・シェブ・ハレドは不断の脅迫にさらされ、第2の人気歌手だったシェブ・ハスニの暗殺の後、ライ・ミュージシャンたちのほとんどはフランスへ脱出したと言われる。おそらく巨視的には、イスラムそのものの徹底した自己改革が要求されるであろう。ライの敵は、欧米のオリエンタリストたちや音楽産業だけではなかったのである(アルジェリア独立革命の全体像については、アリストテア・ホーンの労作『サハラ砂、オーレスの石』を参照されたい)。

一方でしかし、サーブリーンたちがいたと言える。次のように敢えて意味を移動させてパラフレーズしておこう。『明日世界を揺るがす移民革命の予感を今日のアラビック・ブルースに見る我々は、サーブリーンを、東エルサレム・サラフ・アッディーン街の出来事に限定せず、パレスチナの敗北の1つの結果として見るだろう。すなわち、アラブ世界の、周辺資本主義社会の敗北の1つの結果として。このことによって我々は、アラビック・ブルースを音楽上の孤立した現象とみなさず、中東アラブ人の歴史全体の上に据え直しているのである。そしてパレスチナ人が、ノマドと化した世界と、その世界における境界線上の可能性としての自分の位置と意味を見つけた時から、カーヌーンやワードはよく透り、カミリア・ジュブラーンの声も蒼く澄んでくる、と。そのことがアラビック・ブルースの本質である——』

このような20年後の1990年代前半の文脈においても、ファノン——平岡的な音楽の弁

証法はその重い規定力を失っていないと断言しておこう。ミシェル・クレイフィやサーブリーンを含む若きパレスチナ知識人たちの今や牽引車とも言うべき位置にあるエドワード・サイドが、先行者としての深い敬意を込めて度々ファノンの言葉を引くのは十分に理由のあることだったのである。パレスチナ——アラブ世界におけるムスリム政治勢力台頭のさらに向こう側に、ラテン・アメリカにおけるサパティスタやサンディニスタの戦いへの注視と同等の意義と熱量をもって、パレスチナ自律左派（と、とりあえず呼んでおく）への注目が喫緊とされる理由はここにある。

しかし、と私たちは言おう。平岡正明自身が言うように問題はまさにここに生じる。

平岡はファノンの論旨を敷衍しつつ次のように言うだろう。「ファノンは、一見哀れなニグロが発するしわがれたブルースを排し、よく透るバップのサウンドを肯定しているかのように見える。そしてこの見解は、一見、奴隷時代のいまわしい記憶のつきまとうブルースを嫌悪し、さらに、どうやら性的卑語に語源をもつらしいジャズという音楽形式を嫌悪して、あたしの演奏する曲はジャズではなく音楽といってほしい、と語る一群のガクタイ屋、たとえばチック・コリア、キース・ジャレット、アンソニー・ブラクストーン、新シカゴ派（シカゴ前衛派とも言う）などを承認するようになる。しかし、一見、だ。ファノンの言わなかったことを俺が言うてやろう。——白人化した黒人は白人よりもしまつに悪い」

複数の層をもつファノンの思惟の豊かな可能性は、1975年の時点で果たしてこのような言葉呼び寄せたといえるだろうか？

やはり、そうではなかったと言うべきだろう。問題は次のように立てられるべきだったのである。私にとってここに掲げられているような幾人かの黒人ミュージシャンたちが辿っていった軌跡が問題なのは、彼らが余りにも西欧化された音楽観の下に演奏を行っていたからではなく、むしろ全く逆に、より仮借ない徹底した「西欧化」の不足、つまり、追い詰められたヨーロッパ音楽が立ち尽くしたその「畔」（デリダ）のギリギリの突端から音が発せられなかったからだ、と。70年代初頭のフリー・ジャズに訪れた危機の只中で、スピリチュアルで民族的な共同性をベースにした「ジャズ」からメタ民族的で普遍的な「ミュージック」へと向かったチック・コリアたちのようにではもちろんなく、さらにシカゴAACM（黒人ミュージシャンたちの自主組織）系の人たちのように統合された「ブラック・ミュージック」でもなく、この時まさにそうした諸音楽の尽きる所に、表象としての「黒人音楽」の破壊として実現される以外にない黒人音楽もしくは黒人非音楽こそがもとめられていたのではなかったか。いくつかの例を掲げよう。エリック・ドルフィーが死の直前に録音し、しかしその非ジャズ的な内容故に最期の日まで公表を禁じていた『アザー・アスペクト』は、1960年代初頭の時点ですでにジャズの中核が、シチュアショニストたちが「解体」派と呼んで攻撃したシュトックハウゼンら現代音楽の先端に直接触れていたことを証言している。あるいは60年代の最後の日々にアルバート・アイラーが遺した先駆的な黒人アヴァン・ポップとも言うべき作品群には、粉々に打ち砕かれた黒人音楽の諸要素の破片が瓦礫の山のように積み上げられていた。黒人たち自身が黒人音楽を信じることができなくなっていたのである。ゲッターのスピリチュアルな共同性は国家暴力と情報費本主義とコカインによって存分によろ蚕食され、その黒い「下意識」は干上がろうとしていたと言える。「ブラック・イズ・ビューティフル」はスペクタクル化された多民族社会にとって格好のカラフ

ルな記号となった。やがて、死の世界からの使者としてエイズ・ウィルスもまたゲッターの扉を叩くことだろう。こうした情動環境の変化の中から多くの試みが現れる。例えばオーネット・コールマンによるハーモロディックス的方法も、アーチャー・シェップやビーバー・ハリスによる連結と横断への最後の努力も、そしてロスコー・ミッチェルやリーオ・スミスを始めとするポスト・ジャズ的な様々な試行も、さらにスティーヴ・コールマンたちのマルチ・ベース・ミュージックもまた、黒人社会の歴史的な変動との関連の中で今こそ再審に附されるべきであろう。しかし、この25年間でアメリカ黒人社会における「西欧化」「白人化」「資本主義化」は最悪の形で、しかも私たちの予想をはるかに超えて急激に進行したと言わなければならないだろう。そこではサン・ラーの秘教的ジャズでさえスペクタキュラーな景物となっていたのである。したがって私たちにとって「ファノンが語らなかったこと」とは、次のようなことだったと言うべきである。

すなわち「中途半端に白人化した黒人と黄人は、白人よりも始末に悪い」と。加えて「中途半端に黒人化した白人と黄人は、白人よりもさらに始末に悪い」と。表象としての限界を超えて「白人化」の極限にまで突き進み、「白」と「黒」の分割を成立させている地平そのものを踏み破ってしまうこと。

ここから、以下の2つのテーゼが1つのものとして一挙に実現されるべきだったと言える。

もう1人のフランツ・ファノンは言うだろう。「白人は彼の白さの中に閉じ込められている。黒人は彼の黒さの中に。この二重のナルシズムから出てくる様々な傾向と、それが指し示している動機とを明らかにすべく努めよう」（『黒い皮膚・白い仮面』序論より）

ギー・ドゥボールは言うだろう。『芸術は諸感覚に関する関係であることをやめて。（状況の構築という）より高次の感覚の直接的組織化となることができる。』（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト第1号』所収「文化革命に関するテーゼ」）

これらのテーゼが交差する所に生まれるだろう達成の可能性は、反スペクタクル暴動としてのロス暴動の後で（本書第1巻解説の小倉論文を参照）、そして「商品の拒否」への欲望を人種の拒否」という下劣な欲動へとすり替えるヨーロッパのネオナチ台頭の後で、今なお、いや今こそますます巨大なものとして待たれている。プリンやラップやブラック・ロックの出現はその微かな予兆にすぎなかった。アメリカ大陸に黒いシチュアシオニストたちが現れてくるとしたら、その運動としての美的転覆力が問われるのはこれからなのである。その際彼らはかつてのファノンのように、しかしファノンとは異なってスペクタクル化された「暴力」の問題を避けて通れまい。

## 5. 裂けた、黒い声

しかし、平岡正明もまた続けている。

「艶歌、ジャズ、サンバ、フォルクローレのいずれにも共通することが混血音楽ということである。——これらの声は透き通っている。混血、売血、出血の方向でインターナショナルなも

のへ向き直しはじめており、「方法悪としての西欧近代」と対決することで、パワーアップされているのだ。——不可避の西欧近代的方法との対決、これが必要悪ということの内容である。——1度根こそぎにされた人々が民族文化を形成するにあたっては、西欧近代との対決は不可避であり、新たに運動的に形成されるそれらの文化の中軸は、多かれ少なかれ暴力的なものである。」

意味のやや曖昧な「対決」という言葉の多用がこの時代を感じさせるが、確かに問題は「方法」にあったと言うことが出来る。「方法悪」とは、音が「音楽」として編成され聴取される際の、現在の段階では避けられない必要悪としての西欧的方法思考を指す。そして平岡正明にとっての方法こそ、最後のヨーロッパ思想としての「シュルレアリスム」だったのである。分水嶺はここにあった。

平岡は明快に語る。「人類が人類全体として解放されるということはユートピアであり、プロレタリアートが自らを解放する闘いの中に、あるいはそれにひき続くその後に人類の解放がある。この理論によってマルクス主義はプロレタリアート独裁を承認するのであり、これがマルクス主義の最もリアルで、最も頑強な党派性の根拠である。このテーゼは実践的な課題である。俺などにはほとんど生理的感覚にまでなっているこの理解はただちに、ジャズを飛びこしてミュージックと言いたがるジャズマンの上昇志向を、ジャズから飛び降りて逃げだすことだと直観させるのだ。それはジャズから空虚への逃亡だ。——いま透ることは明日白人音楽に叩頭することである。——しかし、ポインター・シスターズが現れた。」

1975年の時点で、つまりAACMが結成十年を迎え、オリヴァー・レイクの『ヘヴィ・スピリッツ』が現われ、アーチャー・シェップが『ア・シー・オブ・フェイスズ』を発表したこの時点で、あらゆる解体的でメタ・ジャズ的で状況的なアンダーグラウンド・ジャズではなく、30年代風コスチュームでゴスペル・ジャズを歌う見るからに「黒人的」なポインター・シスターズ。もちろん彼女たちはステキなグループだったが、この選択に平岡正明の「方法としてのシュルレアリスム」（フロイト＝マルクス主義と言ってもいい）が強力に作用していたことは間違いない。再び巖谷國士のコンパクトな評言を引こう。「すなわちヨーロッパ文化のうちなる〈他所〉の発見であろうとしたシュルレアリスムが、これら〈他所〉（いわゆる第三世界）においては、むしろ自己の発見を促す契機を提供したということでもあろう。」

表象としての芸術の「破壊」ではなく、むしろその発見から「実現」へ。確かにシュルレアリストたちが「芸術の破棄」を提言したことは一度としてなかっただろう。ジョン・ケージではなくチャーリー・パーカー。ゴダールの黒画面ではなく『アントニオ・ダス・モルテス』。オリヴァー・レイクではなくポインター・シスターズ。平岡正明をしてこの時点で「ジャズ」と「黒人性」と言う民族的表象にあくまでも固執させた理由が、こうした方法的自覚にあったことは確かである。だがバックもフリーもジャズの新たな実現である以前に、何よりもまずその徹底した破壊ではなかったか。じつはネグリチュード運動の創始者エーメ・セゼールもまた次のような予言的な詞華を残しているのである。

黒とは黒くない黒のこと

またの名によって黒い場所  
数々の烙印の場所  
記憶されたものとしての肉の火

——詩集『太陽、はねられた首』所収の「沈黙の十字軍」より

「方法」の転換が必要だったのである。シュルレアリスムこそまさに「方法悪」であった。

「フロイト革命の意義は、円の中で話すことから楕円の中で考えることへの移行という観点から最もよく理解される」と、かつてジャック・ラカンが示唆していただろう。「下意識主義」とも言うべきシュルレアリスムの解釈とは異なるもう1人のフロイトがそこにいた。「黒い皮膚」「黒い下意識」という内円と、「白い皮膚」「白い意識」という外円とを分割しつつ構成される同心円状の理解から、複数の中心をもつ複数の”線が描く”分割できない領域の中をランダムに揺れ動く楕円状の理解へ。この「楕円の第三世界」の中からエドワード・サイードもホミ・バーバもガヤトリ・スピヴァックも現れる。二分法の暴力から横断する暴力へと向かうファノン以降の亡命知識人たちの思想動向がここに生まれてくる。これを手軽に「クレオール主義」と言うてはならない。

一切の「分割」を横断する思考の力こそが求められていたと言えるだろう。白と黒、白人世界と黒人世界、意識と無意識、政治経済とリビドー経済、暴力のエコノミーと性的エコノミー、政治運動と芸術表現、美の実現とその破壊——。「政治経済とリビドー経済の分割と、しかる後の二重性の融和と結合というフロイト＝マルクス主義ではなく、ただ一つのリビドー経済しかないということ」と、70年代半ばにジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは述べていたと思う（『政治と精神分析』より）。革命家トロツキーと芸術家ブルトンのメキシコにおける邂逅ではなく、唯一人のそして無数のファノン／ドゥボールが地中海と大西洋を暴力的に横断していくことの巨大な可能性。こうした未完の展望が今想起されることの背景には、植民地主義から新植民地主義へ、つまり政治軍事支配から経済支配へ、そしてさらに情報支配へという60年代から90年代に至る社会空間と表象空間の広大な変貌があったと言えよう。やはりパレスチナを例にとろう。60年代から70年代にかけて戦われたパレスチナ人たちの「第三世界」型のゲリラ戦争。これを根絶するために82年に遂行されたスペクタクル戦争としてのイスラエル軍のレバノン侵攻。さらにこれに対抗して87年に始まった明らかにメディアを意識した反スペクタクル暴動としての占領地のインティファダ。そして90年代の湾岸戦争こそ、インティファダのメディア効果を消失させるためにオペレートされた史上最初の電子スペクタクル戦争だったのである。私たちの方法思考と表象戦略が転換を遂げるのは当然だったと言える。現在の「惨憺たる和平」としての部分自治とは、先の3つの段階、つまり入植地の拡大や軍事支配と並行する、ヨルダンとパレスチナとイスラエルを結ぶ広域経済の民族的階層化の進行、そして新たな電子ハイウェイ支配への模索とが混然とした未曾有の混乱の姿だったのである。このカオスから宗教原理主義や旧来の国民国家へ向かうのではないとしたら、何よりもまずそこには、21世紀へ向けた「新しい欲望」「新しい情報環境」の構築が求められていると言すべきなのである。ここにパレスチナ人たちの、とりわけエドワード・サイードやサーブリーンたちの苦闘がある。

「無意識を生産すること。——無意識というのは創り出し、設置し、流動させるべき実体であり、戦いとらねばならない社会的政治的空間なのです」とジル・ドゥルーズは語っていた。異議はない。しかし今あらゆる領域で求められているのは、まず第一に新しい「破壊的要素」の出現である。例えば最新の研究成果に拠れば、1947年のブルトンによるセゼール「発見」以前に、そもそもシュルレアリスムではなくダダの起源にこそ「黒」の衝撃が埋め込まれていたという（塚原史『言葉のアバングアルド』より）。1914年ごろまだブカレスト大学の学生だったトリストラン・ツァラことサミュエル・ローゼンストックは、ウィーンで出されているある人類学誌に掲載されたアフリカや南太平洋の住民たちによって歌われている精霊を呼びよせる歌の詩を熱心にノートし、その音の響きからあのダダ誌の爆発力を引き出していったとされる。ヨーロッパの断崖から遡行的で超歴史的な「下意識」への沈潜へ向かうのではなく、「黒」の一撃から西欧の詩的言語が保ってきた意味連関の爆破へ。シチュアシオニストたちの「拒否」の力は実はこの辺りに淵源している。こうしたもう1つの破壊の系譜学に向けて、複数のセゼール、複数のフランツ・ファノンとともに、複数のチャーリー・パーカーが呼び戻されるべきであろう。

Jazz Pasengersという黒人とプエルトリカンとユダヤ系の混成グループがニューヨークに現れている。もちろん「メッセンジャーズ」としてのジャズへの回帰でもなければ逃亡でもない。ジャズをパッサージュする者たち。ジャズを一つの街路として通り過ぎ、やり過ぎ、うろつき回り、乗船し、航行し、そしてパスつまり拒絶する者たちとして。その音には確かに微妙な配分で、ジャズの実現として

本書の校正の最中に、ギー・ドゥボールの自殺を知らされた。12月2日、本書にも解説を書いていただいたパリのコリン・コバヤシ氏からのファックスで、フランスの新聞がドゥボールの自殺を報じているとの知らせを受けたのである。コリン氏からすぐにファックスで送っていただいた12月2日付『リベラシオン』や3日付『ル・モンド』の記事では、ドゥボールは11月30日の夜、オーヴェルニュ地方の自宅で自殺したということだった（後にアリス・ベッカー＝ホーさんから送られてきた出展不明の別の雑誌の記事では12月1日）。『ル・モンド』も『リベラシオン』もそれぞれ、彼の死を一面トップで扱ったうえで、さらに文化欄で1ページから2ページ全部を使ってドゥボールとシチュアシオニストを特集し、ドゥボールの映画やシチュアシオニストの活動と影響についてエドゥアール・ワイントロップら数名の論者が論じた。その後も12月6日『ル・モンド』紙のフィリップ・ソレルスによるドゥボールの映画への賛辞、12月6日の『リベラシオン』の「何よりもまず（ダボール）、ドゥボールを」と題したソレルスや画家のメリ・ジョリベら3名の追悼文、『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌（12月8－14日号）、『レクスプレス』誌（12月8日号）のフランス二大週刊誌での特集など、フランスのマスメディアはこぞってドゥボールの死を「スペクタクル」に仕立てようとしているかのようだった。だが、結局、こうしたメディアによる「スペクタクル」化に、ギー・ドゥボールの死は十分よく抵抗したといえるだろう。というのも、これらのマスメディアは、ドゥボールの最近の写真に掲載すること（『リベラシオン』が、一面トップに飾った写真は1952年の雑誌『イオン』に掲載されたほとんど顔の解らない写真だし、『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』の写真は1989年『ル・モンド』紙上でのフィリップ・ソレルスによる書評で使われた写真である）も、その最近の様子を伝えることもできなかつたし、まして、なぜ彼が自殺したかに関しては、何1つ確かなことは伝えることはできなかつたからだ。どうボールのしについての唯一の具体的な「情報」は『ル・モンド』が最初に報じた内容、つまり、どうボールが最近住んでいたオーヴェルニュ地方の村の役場に彼の埋葬許可証の申請があったということだけである。

「アルコール性多発神経炎 (polynévrite alcoolique) と呼ばれる病気が、90年秋に発見された。最初はほとんど感じとれなかったが、次第に進行していった。本当に耐え難いものとなったのは、94年11月終わりからのことにすぎない。

不治の病はすべてそうであるが、養生のために走り回ったり、治療を受け入れたりしないほうが利益は大きいものだ。これ [=私の病気] は、後悔すべき軽はずみな行動によってかかる病気とはまったく逆のものである。逆に、それ [=この病気にかかる] には、生涯をとおして考えを堅く貫き通すことが必要である。」

これは、ドゥボールの長年の同伴者アリス・ベッカー＝ホーから著者への手紙に添えられていたもので、アリスによればドゥボールが自殺の直前に彼女に口述タイプさせた文章のコピーである。これが、「生涯をとおして」シチュアシオニストとしての「考えを堅く貫き通す」と

もに、「生涯をとおして」多くの酒を飲み続けたギー・ドゥボール（彼は実際、1989年の著作『称賛の辞（パネジリック）』のなかで、若くから相当の酒を飲み続けたことを書いている）の自殺の、ドゥボール自身による説明である。この文章は、1月9日、フランスのペイ・テレビチャンネル・プリュスで放送されるドゥボールに関する番組（その中でドゥボール自身が2ヶ月前に協力して作られたブリジット・コルナンのドキュメンタリー「ギー・ドゥボール、その芸術とその時代」と、ドゥボールが1973年に製作した映画『スペクタクルの社会』が上映される。われわれは今、この春に日本でこの番組を見る催しを計画している。）の後に公表されるらしい。ドゥボールは、ピストルを使った自殺によって自らの「生」とともに「死」までも自分の意志のもとに置くだけでなく、その「死」に関する情報をマスメディアに売り払わず、あくまで自ら管理した情報を自らの選択に従って提出することによって、「死」という最もスペクタクル化されやすい出来事を徹底的に非スペクタクル化しようと試みたのだと言えるだろう。

昨年春、われわれがこの翻訳の試みを告げたとき、ドゥボールは訳者への手紙で次のように書いて来て、この試みに全面的に賛意を表してくれた――「S Iの機関誌のすべてを翻訳するのは大変な作業です。しかし、実際、それは、アメリカ人たちの本当に一面的な観点を正す最良の手段です。深田卓が危険を冒して引き受けた勇敢なエディションのために、わたしたちのかつてのアンチコピーライトの方式を適用することは確かにまったく正当なことです」。そして、昨年7月に本書第1巻『状況の構築へ』を送ったときもことのほか喜び、今後の「付録資料」として収めるべき貴重な文書（特に『危険！ オフィシャル・シークレット R S G - 6』と題したイギリスの政府核シェルター破壊闘争に関するS Iのパンフレット）を送ってきてくれた。ドゥボールはわれわれのこの翻訳のただ1巻だけを受け取って死の世界（そんなものがあるとして）に行ってしまった。シチュアショニストの運動がドゥボール一人のものでないことは言うまでもない。（とはいえ、その運動の最初から最後までドゥボールが果たした役割は途方もなく大きいと言わねばならない）が、それでもやはりわれわれのこの翻訳作業にとって彼の死はこの上なく残念なことである。

われわれは、ドゥボールの死をフランスのマスメディアのようにスペクタクル化して「消費」するのではなく、彼の死にもかかわらず、われわれ自身の翻訳作業をしっかりと進めてゆきたい。それが、ドゥボールの「死」を記憶するのではなく、その「生」を記憶する唯一の方法だと思ふ。

1995年1月3日 監訳者しるす